

# 寺 田 遺 跡 II

—府営和泉寺田住宅第2期建て替えに伴う発掘調査—

大阪府教育委員会



# 寺 田 遺 跡 II

—府営和泉寺田住宅第2期建て替えに伴う発掘調査—

大阪府教育委員会

## 序 文

本書で報告いたします寺田遺跡は、和泉市の北西部、岸和田市と接する寺田町に位置しています。近辺では、弥生時代から中世にいたる遺跡が数多く残されています。

このたび、府営和泉寺田住宅の建て替えに伴って発掘調査を実施し、弥生時代から古墳時代の集落跡、中世の耕作に関係する痕跡など、重要な発見をすることができました。特に、弥生時代から古墳時代の集落跡の発見は、自然現象による地形変化に伴って人々が移り住む様相を示す、興味深い成果となりました。こうした当時の人々の生活のあり方は、周辺におけるこれまでの調査成果の蓄積があってこそ、明らかにし得たものです。今回の調査成果につきましても、今後の活用によって、和泉地域の歴史への理解をよりいっそう深めていくための糧となることを願っております。

調査にあたりましては、周辺にお住まいの方々をはじめとして、関係各位から多大なご指導、ご協力を賜り、心から感謝しております。今後とも文化財保護行政へのいっそうのご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成 22 年 3 月

大阪府教育委員会事務局文化財保護課長

野口 雅昭

## 例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会が大阪府住宅まちづくり部より依頼を受け、平成 19 年度および平成 20 年度に実施した、和泉市寺田町所在、寺田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査の期間と担当者は以下のとおりである。

平成 19 年度(調査番号 07013)

平成 19 年 7 月 1 日から平成 20 年 2 月 5 日

大阪府教育委員会文化財保護課調査第二グループ　主査　橋本高明

技師　土屋みづほ

平成 20 年度(調査番号 08012)

平成 20 年 9 月 1 日から 10 月 10 日

大阪府教育委員会文化財保護課調査第二グループ　副主査　土屋みづほ

また、遺物整理事業については、平成 19 年度から平成 21 年度にかけて、調査管理グループ  
主査 宮野淳一、同 三宅正浩、副主査 藤田道子を担当として実施した。

3. 本調査の写真測量は、平成 19 年度は富士測量株式会社、平成 20 年度は株式会社南紀航測セ  
ンターに委託した。撮影フィルムは、各社で保管している。
4. 本書で掲載した遺物写真の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
5. 花粉・植物珪酸体分析、微細堆積相分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
6. 出土遺物および記録資料は、大阪府教育委員会で所蔵している。
7. 本書の編集・執筆は土屋が行った。ただし、第 5 章はパリノ・サーヴェイ株式会社の報告を  
記載した。
8. 発掘調査、遺物整理および本書の作成に要した経費は、全額を大阪府住宅まちづくり部が負  
担した。
9. 現地での発掘調査、遺物整理事業、および本書作成にあたっては、下記の機関から助言およ  
び協力を得た。記して感謝いたします。(順不同)  
和泉市教育委員会、岸和田市教育委員会、泉大津市教育委員会
10. 本報告書は 300 部作成し、一部あたりの単価は 1155 円である。

# 本文目次

## 序文

## 例言

### 第1章 調査の経緯と方法

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	2
第3節 調査方法	2

### 第2章 寺田遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 寺田遺跡の地理的環境	4
第2節 寺田遺跡の歴史的環境	5

### 第3章 発掘調査の成果

第1節 基本層序	9
第2節 第1面の調査	13
第3節 第2面の調査	17
第4節 第3面の調査	22
第5節 下層確認調査	46

### 第4章 出土遺物

第1節 土器	48
第2節 粘土塊	59
第3節 石器	59

### 第5章 自然科学分析の成果

66

### 第6章 総括

第1節 中世の寺田遺跡	79
第2節 弥生時代から古墳時代の寺田遺跡	79

土器観察表..... 83

粘土塊観察表..... 88

石器観察表..... 89

参考文献..... 90

## 挿図目次

第1図 調査区配置図	1	第36図 溝B017・B018・B019	43
第2図 地区割図	3	第37図 溝B024・B025・B035	44
第3図 寺田遺跡位置図	4	第38図 溝A033	45
第4図 寺田遺跡と周辺の主要遺跡	7	第39図 下層確認A17土層図	47
第5図 調査区基本土層図	10	第40図 上坑A143・自然流路A142	
第6図 調査区全体図	11	出土土器	48
第7図 第1面全体図	14	第41図 壁穴住居A048・A015・B026	
第8図 第2面全体図	15-16	出土土器	49
第9図 掘立柱建物1	18	第42図 土坑A012・A016出土土器	51
第10図 掘立柱建物2	19	第43図 土坑A024・A025・A032・A035	
第11図 土坑A143	20	出土土器	52
第12図 ピットA139	20	第44図 土坑A030・A031・A035・A040・A045・ A049・A084出土土器	53
第13図 溝B016	21	第45図 土坑A092・B027・ピットA059	
第14図 自然流路A142	21	出土土器	54
第15図 第3面全体図	23-24	第46図 溝A011・A034・A086・A089・B025	
第16図 壁穴住居A015	25	出土土器	55
第17図 壁穴住居A048(1)	26	第47図 溝A033出土土器	56
第18図 壁穴住居A048(2)	27	第48図 包含層出土土器(1)	57
第19図 壁穴住居B026	31	第49図 包含層出土土器(2)	58
第20図 土坑A012	32	第50図 包含層出土土器(3)	58
第21図 土坑A016	33	第51図 粘土塊	59
第22図 土坑A024・A025・A032・A085	35	第52図 石器(1)	61
第23図 土坑A020	35	第53図 石器(2)	63
第24図 土坑A030	35	第54図 石器(3)	64
第25図 土坑A031	36	第55図 調査地点の層序および試料採取位置	
第26図 土坑A035	36		66
第27図 土坑A040	37	第56図 試料および軟X線写真	68
第28図 上坑A045	37	第57図 薄片写真	69
第29図 土坑A084	38	第58図 花粉化石群集の層位変化	70
第30図 土坑B027	38	第59図 花粉化石写真	71
第31図 ピットA044	39	第60図 植物珪酸体含量の層位変化	72
第32図 溝A011	40	第61図 植物珪酸体写真	73
第33図 溝A034	40	第62図 寺田遺跡における居住域の変遷	
第34図 溝A086・A089・A094(1)	42		80
第35図 溝A086・A089・A094(2)	43		

## 表 目 次

第1表 花粉分析結果	70	第2表 植物珪酸体分析結果	72
------------	----	---------------	----

## 写真目次

写真1 現地公開風景 ..... 2

## 図版目次

### 図版1 遠景・全景

- 1 寺山遺跡遠景  
(西から般若寺山遺跡を望む)

- 2 B区全景(北西から)

- 3 B区全景(南東から)

### 図版2 全景

- 1 A区第2面全景(垂直)

- 2 A区第3面全景(垂直)

### 図版3 第1面遺構

- 1 A区第1面全景(南西から)

- 2 溝A136(南東から)

### 図版4 第1面遺構

- 1 B区第1面全景(北東から)

- 2 溝A138検出状況(北東から)

- 3 溝A138完掘状況(北東から)

- 4 溝A138上層断面(南東から)

- 5 溝A136土層断面(南東から)

### 図版5 第2面遺構

- 1 A区第2面全景(南から)

- 2 B区第2面全景(南東から)

- 3 B区第2面全景(北西から)

### 図版6 第2面遺構

- 1 堀立柱建物1完掘状況(南から)

- 2 堀立柱建物2完掘状況(東から)

### 図版7 第2面遺構

- 1 柱穴A141-1土層断面(北西から)

- 2 柱穴A141-2土層断面(北西から)

- 3 柱穴A146-3土層断面(北から)

- 4 柱穴A146-4上層断面(北から)

- 5 土坑A143土器出土状況(北西から)

- 6 土坑A143土器出土状況(北東から)

- 7 ピットA139土器出土状況(北東から)

- 8 溝B016土層断面(南東から)

### 図版8 第2面遺構

- 1 自然流路A142完掘状況(東から)

- 2 自然流路A142土層断面(東から)

### 図版9 第3面遺構

- 1 A区第3面全景(北から)

- 2 A区第3面全景(北東から)

### 図版10 第3面遺構

- 1 B区第3面(北西から)

- 2 B区第3面(北西から)

- 3 B区第3面(南東から)

### 図版11 第3面遺構

- 1 穴穴住居A015完掘状況(北から)

- 2 穴穴住居A015土層断面(北西から)

- 3 中央土坑A133土層断面(北東から)

- 4 穴穴住居A015土器出土状況(北から)

- 5 ピットA134石斧出土状況(北東から)

### 図版12 第3面遺構

- 1 穴穴住居A048完掘状況(北から)

- 2 穴穴住居A048完掘状況(北西から)

- 3 穴穴住居A048検出状況(北から)

### 図版13 第3面遺構

- 1 穴穴住居A048土層断面(南東から)

- 2 溝A117・A118上層断面(南から)

- 3 中央土坑A206完掘状況(北東から)

- 4 中央土坑A206土層断面(北から)

- 5 柱穴A111完掘状況(西から)

- 6 中央土坑A104土層断面(北西から)

- 7 柱穴A101土層断面(南西から)

- 8 上坑A126完掘状況(北東から)

### 図版14 第3面遺構

- 1 穴穴住居B026完掘状況(北西から)

- 2 中央土坑B041完掘状況(南から)

- 3 溝B044・B045土層断面(西から)

- 4 穴穴住居B026土層断面(北から)

- 5 穴穴住居B026上層断面(東から)

- 6 中央土坑B042土層断面(北東から)

- 7 柱穴B039土層断面(北東から)

### 図版15 第3面遺構

- 1 土坑A012完掘状況(北東から)

- 2 土坑A012完掘状況(南西から)

- 3 土坑A012土層断面(北東から)

- 4 土坑A012上層断面(南東から)
- 5 土坑A016完掘状況(北東から)
- 6 土坑A016土層断面(東から)
- 7 土坑A016土層断面(南東から)

図版16 第3面遺構

- 1 土坑A035完掘状況(西から)
- 2 土坑A035土層断面(南東から)
- 3 土坑A040完掘状況(東から)
- 4 土坑A040完掘状況(南から)
- 5 土坑A085土器出土状況(北東から)
- 6 土坑A085土層断面(北西から)
- 7 ピットA044土層断面(西から)
- 8 ピットA059土器出土状況(北東から)

図版17 第3面遺構

- 1 溝A011完掘状況(北から)
- 2 溝A011土層断面(北から)

図版18 第3面遺構

- 1 溝A086完掘状況(北から)
- 2 溝A086完掘状況(西から)
- 3 溝A086・ピットA087土層断面(北から)
- 4 溝A089完掘状況(東から)
- 5 溝A089・ピットA090土層断面(西から)
- 6 溝A094・土坑A085土層断面(北から)

図版19 第3面遺構

- 1 溝A033完掘状況(北から)
- 2 溝A033検出状況(南から)
- 3 溝A033上層断面(南東から)
- 4 溝A033土器出土状況(北東から)
- 5 溝A033土器出土状況(北東から)
- 6 溝A033土器出土状況(南東から)
- 7 溝A033土器出土状況(北東から)

図版20 第3面遺構・基本土層断面

- 1 溝B024土層断面(西から)
- 2 溝B025土層断面(北から)
- 3 溝B035上層断面(南西から)
- 4 溝B035土層断面(北から)
- 5 B区土層断面r地点(北から)
- 6 A区土層断面k地点(西から)
- 7 AIT土層断面(東から)
- 8 AIT土器出土状況(東から)

図版21 第2面遺構出土土器

土坑A143・自然流路A142出土土器

図版22 第3面遺構出土土器

- 1 穫穴住居A048出土土器
- 2 穫穴住居A048出土土器

図版23 第3面遺構出土土器

- 1 穫穴住居A015出土土器

- 2 穫穴住居B026出土土器

図版24 第3面遺構出土土器

- 1 土坑A012・A016出土土器
- 2 土坑A012・A016出土土器

図版25 第3面遺構出土土器

- 1 土坑A024・A025・A032出土土器
- 2 土坑A085出土土器

図版26 第3面遺構出土土器

- 1 土坑A030・A031・A049出土土器
- 2 土坑A035・A040・A092・B027出土土器

図版27 第3面遺構出土土器

- 1 土坑A035・A040・A045・A084・A092・  
ピットA059出土土器

図版28 第3面遺構出土土器

- 1 溝A034・A086・A089出土土器

図版29 第3面遺構出土土器

- 1 溝A011・A086・A089・B025出土土器
- 2 溝A033出土土器

図版30 第3面遺構出土土器

- 1 溝A033出土土器

図版31 包含層出土土器

- 1 第6層から第8層出土土器
- 2 第10層から第12層出土土器

図版32 包含層出土土器

- 1 第14層出土土器

図版33 包含層出土土器

- 1 第11層・第15層・第16層出土土器
- 2 第15層出土土器

図版34 粘土塊・石器

- 1 粘土塊
- 2 石剣・尖頭器

図版35 石器

- 1 石鎌・石錐
- 2 石鎌・石錐

図版36 石器

- 1 尖頭器・スクレイパー
- 2 尖頭器・スクレイパー

図版37 石器

- 1 打製石器・剥片
- 2 砥石・石斧・敲石・磨石

図版38 石器

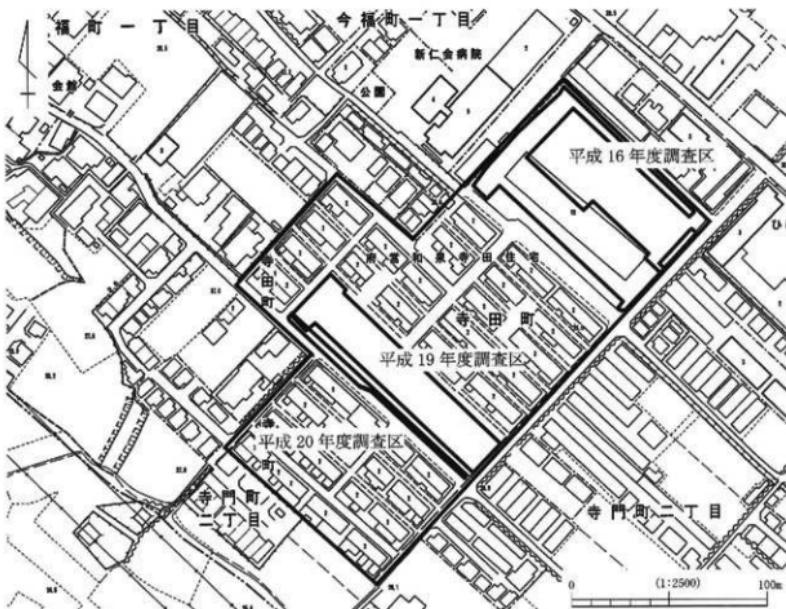
- 1 石斧・紡錘車・石庖丁
- 2 石斧・紡錘車・石庖丁

## 第1節 調査に至る経緯

和泉市寺田町に所在する府営和泉寺田住宅建て替え計画に先立ち、平成14年9月9日から9月11日に、試掘調査を実施した。敷地内はそれまで埋蔵文化財の有無の確認がされておらず、周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかった。試掘調査は、公園など建物のない部分に、2m×2mのトレンチを計5箇所設定して行った。この結果、1箇所をのぞく4箇所の調査区で古墳時代から中世の遺物包含層や、溝1条を確認した。この成果をもとに、和泉市教育委員会と協議のうえ、寺田住宅敷地内を新規発見の寺田遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地とした。寺田住宅敷地内を範囲としたのは、小面積の試掘調査の結果のみからでは、遺跡の広がりが不明なためである。

その後、建て替え事業の第1期の住棟建設予定地および道路拡張部分等、敷地の北東部分から工事に着手する計画となり、工事に先立って平成16年8月9日から平成17年3月25日にかけて、本調査を実施した(第1図)。この結果、古墳時代および中世の遺構と遺物を発見した。特に古墳時代では、多数の竪穴住居が見つかったほか、流路から多量の遺物が出土した。

平成19年度には、建て替え事業の第2期住棟建設予定地である敷地の南西部分に調査区を設定して、本調査を実施した。さらに、平成20年度には、第2期住棟建設に伴う道路拡張予定部



第1図 調査区配置図

分に調査区を設定し、本調査を実施した。

本書では、平成 19 年度、平成 20 年度の調査結果について報告する。

## 第2節 調査経過

平成 19 年度の発掘調査は、平成 19 年 7 月 1 日から平成 20 年 2 月 5 日にかけて実施した。調査面積は 2365 m<sup>2</sup> である。掘削作業に伴う廃土の置き場確保のため、対象範囲を北西側、南東側の 2 区に分けて調査を行った。

7 月 1 日に南東側調査区の掘削を開始し、10 月 24 日にヘリコプターによる空中撮影測量を実施、11 月 8 日に埋め戻しを終了した。後述するように、弥生時代の集落跡を良好な状態で発見したため、10 月 27 日には、地元町内会の方々を対象に現地公開を行った。小雨の降る中の開催にもかかわらず、約 130 人の方々に参加いただいた(写真 1)。

北西側調査区は、11 月 9 日に掘削を開始し、平成 20 年 1 月 17 日にヘリコプターによる空中撮影測量を実施した。その後、下層の遺物包含層の有無などを確認するためトレンチ調査を行い、

2 月 5 日に現地での全調査を終了した。

平成 20 年度の調査は、平成 20 年 9 月 1 日から平成 20 年 10 月 10 日にかけて実施した。調査面積は 300 m<sup>2</sup> である。9 月 1 日に掘削を開始し、10 月 3 日にトラッククレーンによる空中撮影測量を実施した。その後、下層の遺物包含層の有無などを確認するためトレンチ調査を行い、10 月 10 日

に現地での全調査を終了した。

## 第3節 調査方法

**地区割り** 調査区の地区割りは、大阪府発行の 10,000 分の 1 地形図を基準に、第Ⅰ区画から第Ⅳ区画の 4 段階に分割した。

第Ⅰ区画は、10,000 分の 1 地形図の南西隅を基点に、南北を 15 分割(A から O)、東西を 9 分割(0 ~ 8)し、南北 6 km、東西 8 km に分割した区画である。

第Ⅱ区画は、第Ⅰ区画を南北、東西とも 4 分割した、南北 1.5 km、東西 2.0 km の 16 区画である。南西端区画を 1 として東方向へ順に番号をつけ、北東端区画が 16 となる。

第Ⅲ区画は、第Ⅱ区画の北東隅を基点に南北を 15 分割(A から O)、東西を 20 分割(1 ~ 20)した、南北、東西とも 100 m の区画である。

第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画の北東隅を基点に南北を 10 分割(a から j)、東西を 10 分割(1 ~ 10)した、南北、東西とも 10 m の区画である。

調査地は、第VI座標系の第Ⅰ区画 D4、第Ⅱ区画 10 および 14 に属する。「第Ⅱ区画—第Ⅲ区画

—第IV区画」と表記すると、平成19年度の調査区(以下ではA区と呼称する)は、14-03-3~5j、10-A2-10c、9~10d、8~10e、7~10f、6~10g、6~9h、6~8i、10-A3-2~6a、1~6b、1~4c、1~3d、1~2e、1fに該当する。平成20年度の調査区(以下ではB区と呼称する)は、10-A2-10g、9~10h、8~9i、7~8j、10-A3-6a、5~6b、4~5c、3~4d、2~3e、1~2f、1gに該当する(第2図)。

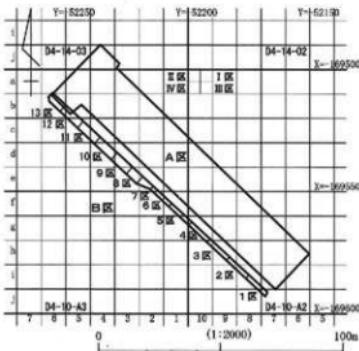
人力掘削における遺物の取り上げは、以上の区画をもとに、第IV区画をさらにI~IV区に4分割した5m四方のグリッドで行った。ただし、平成20年度調査区については、幅1~4m、長さ約120mと細長い形状であるうえ、北西—南東方向と区画割りを斜交するため、上記の地区割りでは煩雑となる。そのため、調査区の長軸方向と平行に1~13区画に分割し、遺物の取り上げを行った。

**水準** 標高値は、東京湾平均海面(T.P.)を用いた。

**座標値** 座標値は国際基準に基づき、方位は座標北を用いた。調査地点において、座標北は、磁北より東へ $6^{\circ} 11' 42''$ 、真北より西へ $0^{\circ} 19' 18''$ 振れる。

**遺構番号** 遺構番号は、平成19年度、平成20年度それぞれの調査ごとに、遺構の検出面や種類に関わらず3桁の通し番号を与えた。本報告にあたっては、番号の前にAまたはBをつけ、A区とB区の遺構を区別する。したがって、平成19年度調査で検出した遺構番号015の豊穴住居であれば、豊穴住居A015という表記となる。豊穴住居に付属すると考えられる土坑や柱穴についても、それぞれ個別の番号を与えている。また、複数の柱穴から構成される掘立柱建物については、柱穴にそれぞれ個別の番号を付し、報告にあたっては、掘立柱建物1、掘立柱建物2と建物にも番号を付した。一連の建物を構成すると考えた柱穴については、調査時に、141-1、141-2など枝番号を与えたものもある。これらの中には、調査進行後の検討により、一連の建物を構成するものではないと結論づけたものもあるが、調査中の記録との混乱を避けるため、番号を新たに付すことはせず、枝番号を踏襲して報告を行う。また、調査時に人為的な遺構と考えたが、後の検討により自然の落ち込みなど人為的な遺構ではないと判断したものに付した番号は欠番としており、遺構番号と実際の遺構数は一致しない。

**図化** 図化は、第2遺構検出面、第3遺構検出面について、測量委託により空中撮影測量と図化(縮尺20分の1および100分の1)を行った。第1遺構検出面および遺物出土状況図、土層断面図などについては人手により実測作業(縮尺10分の1ほか)を行った。土色表示には、『新版 標準土色帖』(小山・竹原1997年版)を用いた。また、本報告書の製図は、遺構、遺物ともIllustratorを用いて行った。



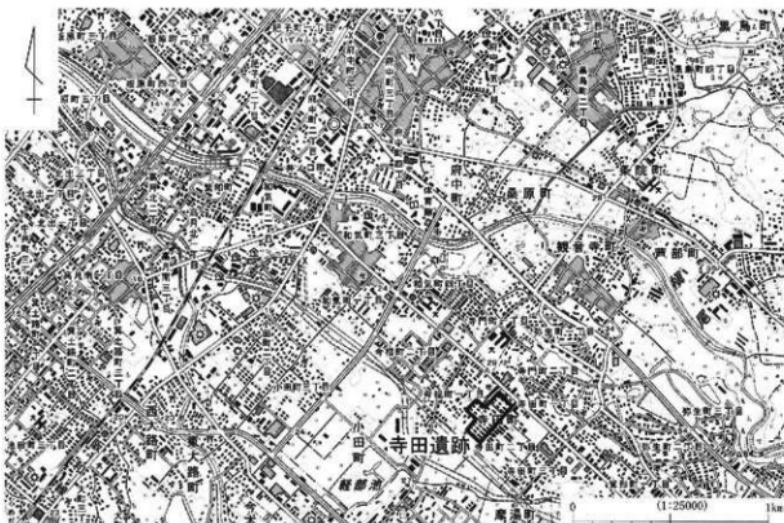
第2図 地区割図

### 第1節 寺田遺跡の地理的環境

寺田遺跡は、和泉市北西部、岸和田市と接する寺田町に所在する(第3図)。南東から北西へと流れる松尾川の右岸、標高27~28mに位置している。松尾川は、北側を流れる横尾川、南側を流れる牛滝川と合流したのち、大津川となって大阪湾へ注ぐ。

和泉地域は、和歌山県との境となる和泉山脈と、その西方の丘陵地帯、それに連続する洪積段丘、海岸線までの沖積平野から成る。和泉山脈は、標高800m前後と比較的なだらかで、領家花崗岩類、泉南酸性火碎岩類を基盤層に、礫岩、砂岩、泥岩が堆積している。丘陵地帯は礫岩、砂岩、泥岩が互層をなす大阪層群によって形成される。和泉山脈を水源とするいくつかの河川がこの丘陵地帯を西流し、大阪湾へと注いでいる。和泉地域は、これらの河川によって分断されており、上述の大津川もそのひとつである。丘陵地帯の縁辺には、この中小河川に沿って河岸丘陵が広がっており、高位段丘、中位段丘、低位段丘に分かれれる。和泉地域で主に発達しているのは中位段丘であり、高位段丘、低位段丘は部分的にしかみとめられない。沖積平野は、大阪湾沿岸に広がるほか、河川沿いにもみとめられるが、分布範囲は極めて狭い。

寺田遺跡は、標高による地形分類では、松尾川によって形成された中位段丘上に位置する。遺跡周辺では、東から西へとゆるやかに下降する地形となっている。遺跡の北東側は一段上がり、南西側は松尾川に向かって一段下がる。また、今回の調査により、旧河川の氾濫によって供給さ



第3図 寺田遺跡位置図

れたと考えられる洪水堆積層を、部分的にではあるが確認することができた。

## 第2節 寺田遺跡の歴史的環境

寺田遺跡周辺の歴史的環境について、周辺市域も含め、大津川流域を中心に概観する(第4図)。寺田遺跡で遺構を確認している、弥生時代から古墳時代、および中世の様相を中心にみていくことをとする。

大津川流域では、不明瞭ながらも、旧石器時代から縄文時代草創期の人々の生活痕跡がみとめられる。寺田遺跡の北西側に近接する和氣遺跡(25)で翼状剥片が出上しているほか、横尾川流域左岸の万町北遺跡や右岸の伯太北遺跡、岸和田市域となる牛滝川右岸の上フジ遺跡、三田遺跡や左岸の西川遺跡で、ナイフ形石器や有舌尖頭器の出土が確認できる。このように、該期の遺物は散見するものの、後世の攪乱を受けた状況で出土するものがほとんどであり、現状では遺構は確認されていない。また、この時期の遺跡は、丘陵上や高位段丘上、中位段丘上など比較的の高域に位置している。

縄文時代早期に至っても、前時期と同様、詳細な様相は明らかでない。横尾川支流の父鬼川右岸に位置する仏並遺跡で早期の土器が出土しているのが、数少ない例である。前期では、仏並遺跡のほか、横尾川中流域右岸の池田寺遺跡、松尾川左岸の小田遺跡(41)でも土器が出土しているが、遺構については明らかでない。中期になると、仏並遺跡では後期前半まで存続する堅穴住居や土器棺墓が、低位段丘上に位置する府中遺跡(16)では中期末の土坑が確認されている。また、小田遺跡のほか、万町北遺跡でも土器の出土がみとめられる。このように、中期には、遺跡数の増加、低域への集落域の展開がみとめられるとともに、土器の散発的な出土にとどまる前期以前と比べると、遺構の様相が明瞭となる。後期には、中期から遺構が存続する仏並遺跡のほか、万町北遺跡でも堅穴住居が、牛滝川右岸の軽部池西遺跡(43)では晩期に至る流路が確認されている。また、府中遺跡、池田寺遺跡のほか、横尾川下流域右岸の池上曾根遺跡(2)、牛滝川右岸の山ノ内遺跡(38)、高位段丘上に立地する山直中遺跡でも土器の出土がみとめられ、遺跡数のさらなる増加と生活域の拡大がみてとれる。晩期には、仏並遺跡、万町北遺跡、府中遺跡、池上曾根遺跡、山ノ内遺跡、山直中遺跡が継続するほか、小田遺跡でも土器が出土する。後期よりは遺跡数が減少し、遺構の様相もやや不明瞭となるものの、立地の多様性は引き継がれているようである。

弥生時代では、大津川流域で最古の集落遺跡として、下流域右岸に位置する、泉大津市域の池浦遺跡(5)をあげることができる。前期中葉の溝が確認されている。前期後葉になると、同じく下流域右岸に、環濠をもつ大集落である池上曾根遺跡(2)が現れ、堅穴住居や方形周溝墓が確認されている。また、虫取遺跡(6)でも、前期後葉から中期前葉の溝、土坑などが確認されているほか、牛滝川中流域右岸の田治米宮内遺跡(36)でも前期後葉の土器が出土している。このように、前期の遺跡は数少ないものの、低位段丘や沖積地など低域に立地する傾向がみとめられる。

中期前葉になると、池浦遺跡(5)、虫取遺跡(6)は廃絶するが、池上曾根遺跡(2)では集落域

の拡大がみとめられる。また、府中遺跡(16)でも中期前葉に土器の出土がみとめられるが、遺構の様相は明らかでない。

中期中葉には、池上曾根遺跡(2)においてさらなる集落域の拡大がみとめられ、中期後葉には最盛期を迎える。また、中期後葉には、前述の府中遺跡(16)のほか、横尾川中流域の池田下遺跡、万町北遺跡でも竪穴住居や方形周溝墓が、松尾川左岸の軽部池遺跡(40)でも竪穴住居が確認されている。本報告書の寺田遺跡(1)でも今回の調査により弥生時代中期後半の竪穴住居が、寺田遺跡に近接する和氣遺跡(25)でも土坑などの遺構が確認されている。また、小田遺跡(41)、山ノ内遺跡(38)、田治米宮内遺跡(36)などでも中期の遺物が出土している。このように、中期の特に後葉には遺跡の増加が顕著であり、また、集落が主として低域に立地する前期と比較して、多様な立地に集落が展開する様相がみとめられる。

後期になると、池上曾根遺跡では、環濠の機能が失われて居住域が分散化し、中期に営まれていた他の集落遺跡も、その多くが縮小、廃絶に至る。その中で、府中遺跡(16)、万町北遺跡、小田遺跡(41)、軽部池西遺跡(43)などでは引き続き遺構が確認でき、特に府中遺跡は、中期とは異なる遺跡南東部に、竪穴住居や大規模な方形周溝墓群が確認されるようになる。一方、寺田遺跡の東側の丘陵上には観音寺山遺跡(29)が、信太山丘陵上には惣の池遺跡が現れ、竪穴住居が確認されている。いずれも広義の高地性集落で、特に観音寺山遺跡では、117基もの竪穴住居が発見されている。さらに、後期後葉には、今木遺跡(44)、山ノ内遺跡(38)で竪穴住居が確認されており、再び低域への集落の展開がみとめられる。なお、寺田遺跡(1)でも、溝など後期の遺構や遺物が確認されたが、中期以前と比較すると希薄である。

以上のように、大津川流域における弥生時代の集落の様相は、前期には低域に集落が営まれ、中期の特に後葉に広域にわたる集落の展開と増加がみとめられる。後期に至り、池上曾根遺跡など中期の大集落がその規模を縮小する頃、丘陵上に高地性集落が現れ、後期後葉には再び低域の中小集落が増加する、という展開を示す。

庄内式併行期には、高地性集落が廃絶する一方、府中遺跡(16)および隣接する豊中遺跡(12)で、引き続き集落が営まれる。また、七ノ坪遺跡(9)、和氣遺跡(25)、上町遺跡でも、竪穴住居などが確認されている。寺田遺跡(1)でも、庄内式併行期から古墳時代前期にかけての掘立柱建物などが発見されている。

古墳時代前期には、寺田遺跡(1)、七ノ坪遺跡(9)、府中遺跡(16)、和氣遺跡(25)、豊中遺跡(12)、田治米宮内遺跡(36)、小田遺跡(41)、西大路遺跡(46)など庄内式併行期から存続する遺跡がみられるほか、三田遺跡では多数の土壙墓が確認されている。寺田遺跡(1)においても、竪穴住居、掘立柱建物などが確認されており、古墳時代後期まで存続する。また、丘陵上には古墳が形成されるようになる。この地域で最も古い古墳としては、前期後半の前方後円墳である、松尾川左岸の丘陵端に位置する摩湯山古墳(33)、信太山丘陵北端の和泉黄金塚古墳があげられる。摩湯山古墳は、寺田遺跡から松尾川をはさみ約700m南に位置しており、前述の三田遺跡との関係が指摘



1 寺田遺跡	2 池上曾長遺跡	3 曾長城跡	4 京瀬遺跡	5 治淮遺跡	6 血取遺跡	7 穴師小學校校庭遺跡
8 穴師遺跡	9 七ノ坪遺跡	10 穴田遺跡	11 芦田城跡	12 葦中遺跡	13 大堀寺跡	14 粟原遺跡
16 府中遺跡	17 和泉國府跡	18 国府城跡	19 和泉寺跡	20 聖神社遺跡	21 伯太蘿古跡	22 伏木千塚古墳群
23 丸笠山古墳	24 王塚古墳	25 和氣遺跡	26 總音寺跡	27 須塚古墳	28 寺門古墳群	29 鶴音寺山遺跡
30 萩原北遺跡	31 和泉丘陵 A87 地点遺跡	32 イナリ古墳	33 岸湯山古墳	34 扇子塚古墳	35 山糸北遺跡	
36 田治米宮内遺跡	37 三治朱雀寺	38 山ノ内遺跡	39 今木城跡	40 岩部松遺跡	41 小田遺跡	42 軽部池
43 猪部治西遺跡	44 今木遺跡	45 今木墓地	46 西大路跡	47 丸山古墳	48 大路城跡	49 金池西遺跡
50 大町遺跡	51 八木城跡	52 田鶴羽遺跡	53 池尻古墳	54 池尻町遺跡	55 久米田古墳群	56 小松里廬守
57 下池田遺跡	58 黒土田遺跡	59 大隅堂廢寺	60 高月寺跡	61 夜坂廢寺跡	62 須野街道	63 紀州街道

第4図 寺田遺跡と周辺の主要遺跡

されている古墳である。

古墳時代中期には、寺田遺跡(1)、府中遺跡(16)、和気遺跡(25)、小田遺跡(41)、田治米宮内遺跡(36)、西大路遺跡(46)などで、引き続き集落が営まれ、寺田遺跡、田治米宮内遺跡は後期にかけて盛行期となる。また、中期後半には、山直北遺跡(35)で竪穴住居が検出されている。古墳は、久米田古墳群(55)に貝吹山古墳、風吹山古墳が築造される。また、陶邑で須恵器生産が開始され、集落跡でも次第に出土土器の多くのを須恵器が占めるようになる。

古墳時代後期には、寺田遺跡(1)などが中期から存続するほか、二俣池北遺跡、上フジ遺跡など、上流域でも新たに集落遺跡が現れる。また、群集墳が多く築かれるようになる。

飛鳥時代には、二俣池北遺跡が存続するほか、水込遺跡、池田寺遺跡、万町北遺跡などの集落遺跡がみとめられるが、古墳時代後期と比較すると希薄となる。また、古墳は築かれなくなり、かわって寺院の建立がさかんとなる。この時期に建立されたとみられる古代寺院としては、信太寺、池田寺、和泉寺跡(19)、坂本寺跡、安楽寺跡などがあり、中でも池田寺は7世紀中葉の建立と考えられる。

奈良時代には、7世紀から存続する集落遺跡に加え、板原遺跡(14)、府中遺跡(16)、小田遺跡(41)、山直北遺跡(35)、三田遺跡、上フジ遺跡などでも集落が形成され、遺跡の増加がみとめられる。また、当初は河内国に含まれていた和泉地方であるが、靈亀2年(716)、大鳥、和泉、日根の3郡を割いて「和泉鎌」が設けられる。天平12年(757)に再び河内国に併合されるが、天平宝字元年(757)には、河内国から大鳥、和泉、日根の三郡が分かれて和泉国が設置される。和泉國府跡(17)は和泉国の国衙と考えられているが、既往の調査では、国衙に関係する明確な遺構は見つかっていない。

平安時代には、水込遺跡、万町北遺跡、山直北遺跡(35)、三田遺跡、上フジ遺跡などが奈良時代から引き続き営まれるほか、山直中遺跡でも集落が現れる。また、和氣遺跡(25)では平安時代の終わりに掘立柱建物からなる集落が現れる。

中世には、和氣遺跡(25)、水込遺跡、山直中遺跡、二俣池北遺跡などで引き続き集落が営まれるほか、池田寺遺跡、万町遺跡でも、集落跡が見つかっている。また、和氣遺跡では、条里地割の区画溝が、松尾川を越え西方に位置する輕部池西遺跡(43)、二俣池北遺跡では水田が検出されている。耕作の痕跡は寺田遺跡(1)でもみとめられている。

### 第1節 基本層序(第5図、第6図、図版20—5~8)

基本層序は、平成19年度調査区(A区)、平成20年度調査区(B区)でほぼ共通している。調査区が広範にわたるため、模式図によって基本層序の概要を示す。ただし、B区は搅乱により十層を連続して把握しがたいため、基本的にはA区の観察結果を示し、B区については、自然科学分析を行った箇所のみ模式図を提示する。なお、A区においても、建て替え前の住宅に伴う基礎杭によって層位が搅乱を受けている箇所が多くみられた。

第2章第1節で述べたように、現在、遺跡周辺では、松尾川へ向かって、東から西へとゆるやかに下降する地形となっている。本調査における土層堆積状況の確認より、この地形が弥生時代の遺構検出面までさかのぼることが確認できた。

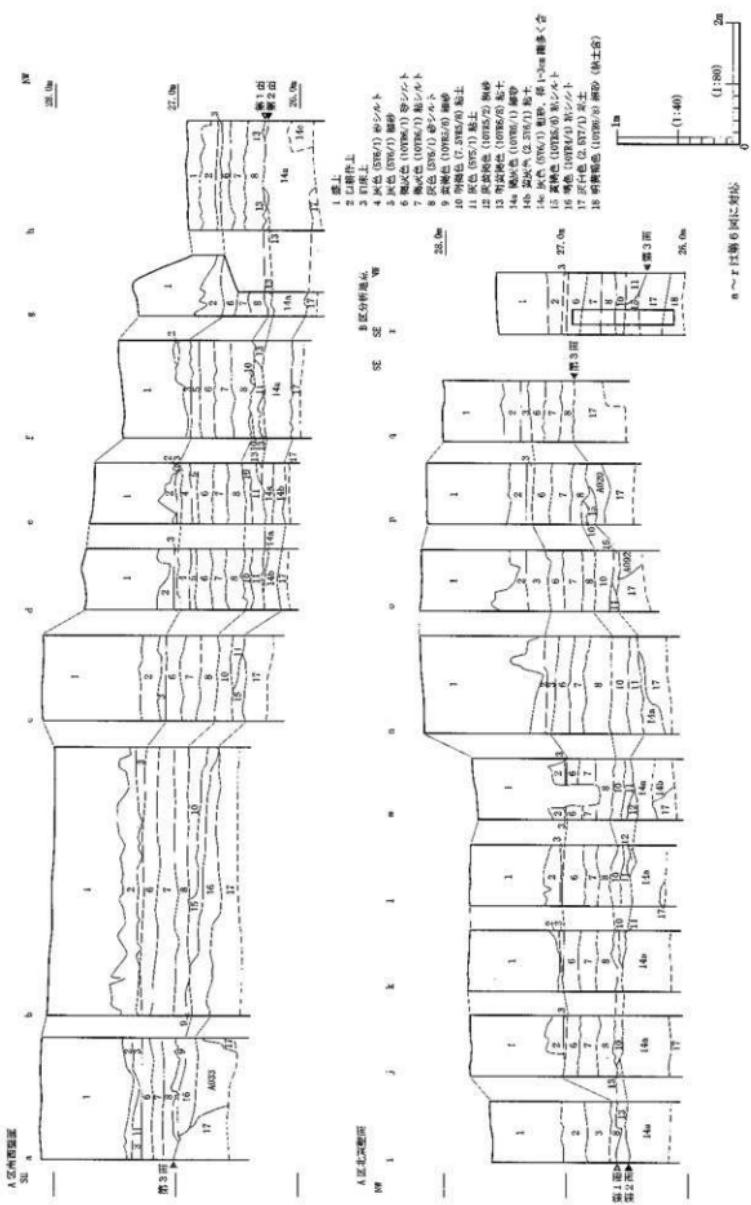
層序は、上層から順に、盛土(第1層、0.2~0.8m)、旧耕作土である黒灰色土(第2層、0.05~0.2m)、旧床土である黄褐色土(第3層、0.03~0.2m)、中世の遺物包含層である灰色または褐灰色の細砂またはシルトと黄褐色細砂(第4層~第9層、0.05~0.5m)、古墳時代後期から飛鳥時代の遺物包含層である明褐色粘土(第10層、0.05~0.1m)、庄内式併行期から古墳時代前期の遺物包含層である灰色粘土と灰黄褐色粗砂(第11・12層、0.05~0.15m)、明黄褐色粘土(第13層、0.05~0.1m)、弥生時代後期の遺物包含層である褐灰色細砂、黄灰色粘土、灰色粗砂礫の互層(第14層、0.1~0.5m以上)、弥生時代中期から後期の包含層である黄褐色シルトと褐色シルト(第15・16層、0.05~0.2m)、弥生時代の遺構検出面である灰白色粘土(第17層、0.1~0.4m以上)、明黄褐色細砂(第18層、0.1m以上)である。

第1層は府営住宅建設時の盛土で、調査区全域でみとめられる。下面の高さは、最も高い東部で27.5m、最も低い西部で26.7mである。

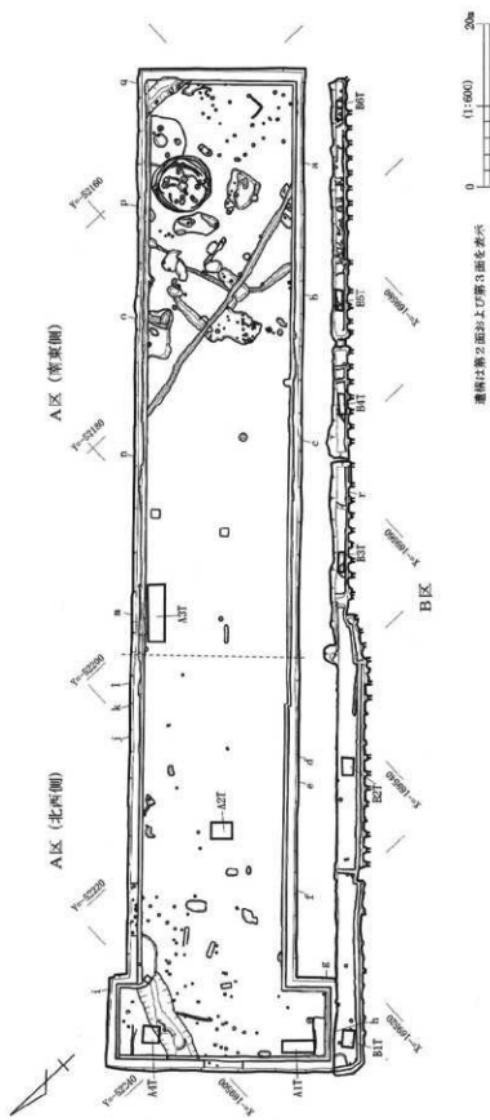
第2層、第3層は、府営住宅建設以前の耕作土および床土で、調査区のほぼ全域でみとめられる。下面の高さは、最も高い東部で27.3m、最も低い北西部で26.5mである。

第4層から第9層は、地点により層厚の差が著しいものの、そのいずれかの層は全域でみとめられる。下面の高さは、最も高い東部で27.0m、最も低い西部で26.3mである。層厚は、北東側では0.3m前後であるが、西側に向かって次第に厚く堆積し、調査区中央部付近で最も厚くなる。さらに西側では再び堆積が薄くなり、最も薄い北西端では、層厚0.1m前後である。弥生時代から中世の遺物を含み、中世を主体とする。第4層から第9層で、層による出土遺物の時期差はみとめられない。第6層、第7層は、自然科学分析より、人為的に搅拌された堆積物と判断されることから、耕作土と考えられる。他の層についても同様の性格が想定でき、また、層厚の薄い第9層については床上の可能性が考えられる。

第10層は、調査区の中央部にのみみとめられる。下面の高さは、最も高い東側で26.8m、最も低い西側で26.4mである。出土遺物はあまり多くないが、弥生時代から飛鳥時代の遺物を含み、



第5図 調査区基本土層図



第6図 調査区全体図

古墳時代後期から飛鳥時代を主体とする。自然科学分析より、洪水堆積物と判断される。

第11層、第12層は、調査区中央部のやや西側に偏ってみとめられ、第10層よりさらに堆積範囲が狭い。下面の高さは、最も高い東側で26.5m、中央部南西側で最も低くなり26.2m、そこから西側ではやや上がり、26.4mとなる。遺物は比較的多く、庄内式併行期から古墳時代前期の土器を主体とする。特に第12層上面で多くの遺物が出土した。第11層が粘土層、第12層が粗砂層であり、一連の洪水堆積物と考えられる。

第13層は、調査区の北西部のみにみとめられる。下面の高さは、最も高い東寄りで26.5m、最も低い西寄りで26.3mである。遺物はほとんど出土せず、また、層厚が薄く、直上層出土遺物との明確な分離が困難でもあったため、時期の特定はできない。耕作等、上層からのなんらかの影響により、下層が変質したものである可能性もある。

第14層も、調査区の中央部から北西部にかけてのみ、みとめられる。下面の高さは、最も高い東側で26.3m、確認できた範囲で最も低い西側で25.3m以下である。褐色細砂を第14a層、黄灰粘土を第14b層、灰色粗砂礫を第14c層としたが、明確に分離できるものではなく、一連の洪水堆積物と考えられる。上面で、庄内式併行期から古墳時代前期の遺構を検出した。遺物は第14a層、第14b層にはほとんど含まれていなかったが、第14c層からは、弥生時代後期後半の遺物が残存度の高い状態で出土した。詳細については第5節で述べる。

第15層、第16層は、調査区中央部より東側にのみ堆積する。第15層、第16層とも北東端ではみとめられず、第16層は南東側には堆積していない。下面の高さは、最も高い東側で26.8m、最も低い西側で26.4mである。弥生時代中期から後期の遺物を含み、中期の遺物を主体とする。第15層、第16層で、層による出土遺物の時期差はみとめられない。

第17層は調査区全域でみとめられる。弥生時代中期から後期の遺構検出面である。上面の高さは、最も高い東側で27.0m、確認できた範囲で最も低い西側では25.8m以下である。遺物は、下層確認調査により上器1点を確認したが、小片であり、所属時期は不明である。

第18層は下層確認調査および調査における排水溝の掘削などにより、調査区の一部のみで確認した。第17層と明確に区分できない箇所も多く、一連の堆積層である可能性もある。遺物は出土しなかった。

以上のように、調査区内では、層によって堆積範囲に違いがみられ、標高の高い北東側では、古墳時代以前の包含層が全くみとめられない。また、弥生時代や古墳時代の遺構面の直上に中世の包含層が堆積しているところもあり、中世以降の耕作により、かなりの削平を受けたものと考えられる。各層の成因については、自然科学分析の結果も踏まえ、第6章で述べる。

遺構面は3面確認した。検出面は、第13層上面、第14層上面、第17層上面である。以下ではそれぞれの遺構面を、第1面、第2面、第3面と呼称する。第1面は、中世の遺物包含層を除去した面であり、中世の溝を検出した。遺構は調査区北西部のみで確認している。第2面は、庄内式併行期から古墳時代前期の遺物包含層を除去した面で、掘立柱建物、土坑など庄内式併行期

から古墳時代前期の遺構を検出した。遺構は調査区北西部のみで確認している。第3面は、弥生時代の遺物包含層を除去した面で、竪穴住居、土坑、溝など弥生時代中期後半から後期中頃の遺構を検出した。遺構は調査区南東部のみで確認している。

## 第2節 第1面の調査(第7図)

基本層序第13層上面で検出した。遺構は、溝のみである。前述のように、遺構は調査区北西部のみで確認している。

溝は6条検出した。

溝A136・B003(図版3-2、図版4-1・5) それぞれA区、B区で検出したが、配置および埋土が同質であることより、同一の遺構と考えられる。北西—南東方向からほぼ直角に屈曲して北東—南西方向にのびる。南西部は調査区外へのびる。幅0.2m、深さ0.12mを測る。遺物は出土しなかった。

溝A138(図版3-1、図版4-2~4) 北西—南東方向から屈曲して北東—南西方向にのびる。調査区外へのびる北西部では、溝の幅が広くなる。また、屈曲部から3.0mおよび5.5mのところで北西—南東方向の溝と交差する。幅0.2~1.2m、深さ0.05~0.14mを測る。瓦器、土師質土器釜、須恵器が出土したが、図化できるものはなかった。

溝A137(図版3-1) 北西—南東方向と北東—南西方向の溝が交差する。南西部は調査区外へのびる。北西部では特に浅く、溝の端が不明瞭となる。幅0.5~1.2m、深さ0.05~0.12mを測る。瓦器楕底部片、土師質土器が出土したが、図化できるものはなかった。瓦器楕は、13世紀のものと考えられる。

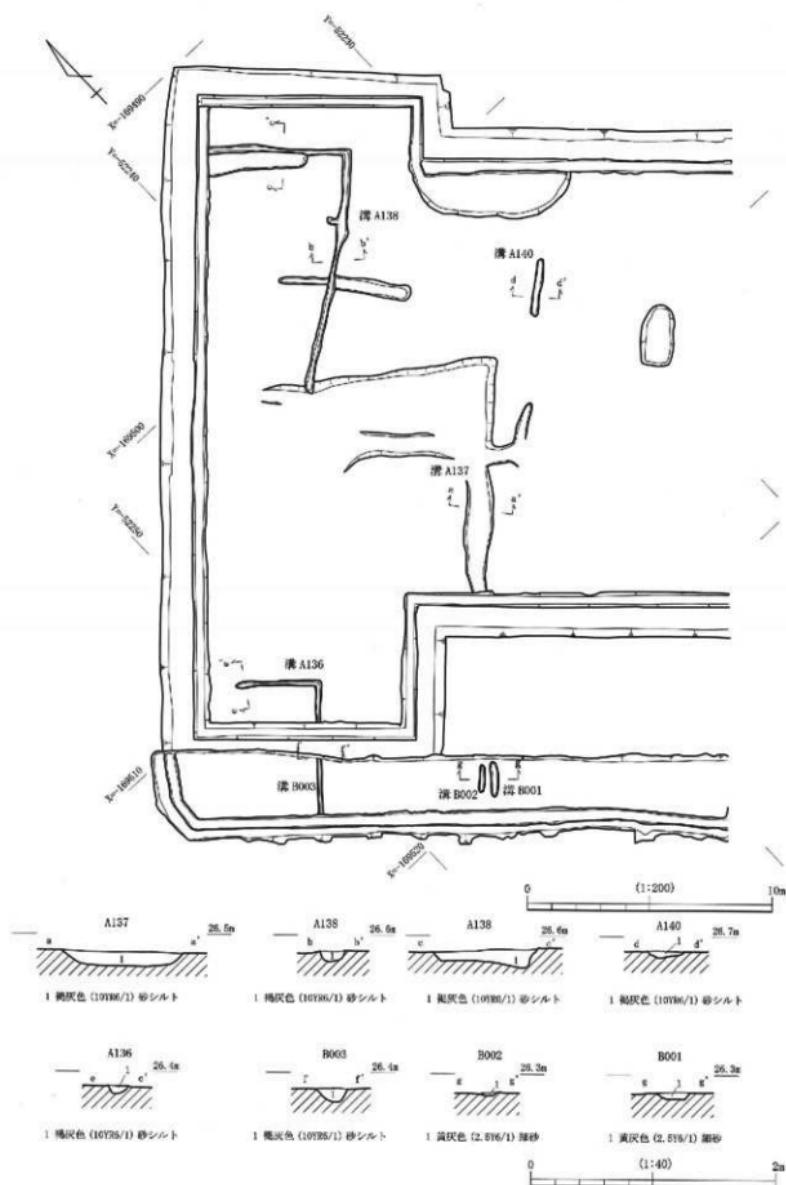
溝A140 北東—南西方向である。幅0.3m、深さ0.05mを測る。遺物は出土しなかった。

溝B001(図版4-1) 北東—南西方向である。幅0.3m、深さ0.06mを測る。須恵器杯身、土師質土器が出土したが、図化できるものはなかった。須恵器杯身は、古墳時代後期に所属し、遺構の時期を示すものではない。

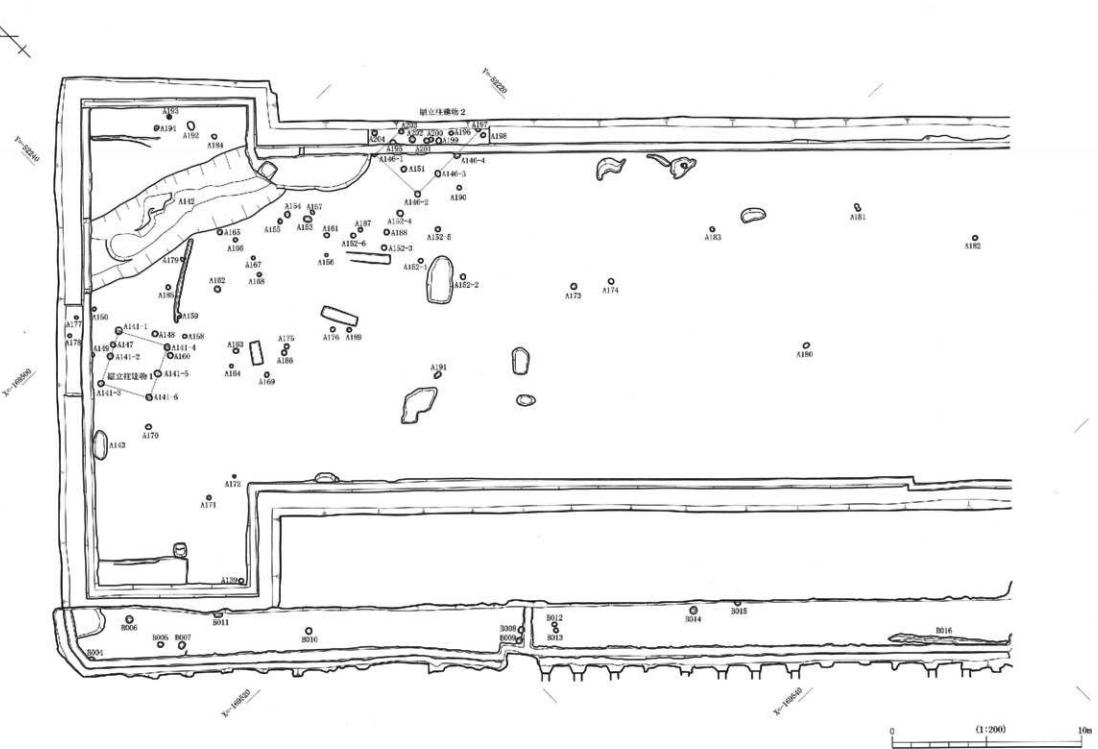
溝B002(図版4-1) 北東—南西方向である。幅0.2m、深さ0.03mを測る。遺物は出土しなかった。

**小結** 第1面で検出した溝は、形状、規模より、3者に分類できる。幅が比較的狭く、深さがあり、直角または直角に近く屈曲する溝A136、B003、A138、幅の広い溝A137、幅が狭く浅い溝A140、B001、B002の3者である。いずれも北西—南東方向または北東—南西方向と、方向が一定している。このうち、幅が狭く浅い溝A140、B001、B002については、鋤溝の可能性が考えられる。幅が比較的狭く、深く、屈曲する溝A136、B003、A138は、区画を示すものである可能性がある。類似した屈曲する溝は、平成16年度の調査でも検出されており、同じ機能を持つ可能性が考えられる。

遺構出土の遺物は少量であるが、最も新しい時期の遺物は、13世紀の瓦器である。一方、遺構面直上層である灰色シルト層(基本層序第8層)も含め、基本層序第4層から第9層からは、12



第7図 第1面全体図



第8図 第2面全体図

世紀から 15 世紀の遺物が多く出土している。いずれの層も、出土遺物の大半が小片であること、基本層序第 6 層、第 7 層は、自然科学分析より人為的に拡攬された堆積物と判断されることなどから、耕作土と考えられる。また、第 1 面遺構埋土は、基本層序第 8 層と類似している。したがって、第 1 面検出の溝はいずれも中世の耕作に関わるものと推定できる。以上、第 1 面遺構および上層の包含層の状況から、12 世紀から 15 世紀にわたり、継続して耕作が行われていたと想定できる。また、溝の方向は周囲の現在の条里地割に一致しており、当地域の条里地割が中世までは遡ることを示している。

なお、第 1 面の検出遺構は調査区西部に偏在するが、中世耕作土や床土と考えられる基本層序第 4 層から第 9 層は、調査区の全域で確認している。遺構が検出できなかったのは、耕作の継続により削平を受けたためか、調査精度によるものと考えられ、耕作は調査区全域で行われていたものと想定できる。

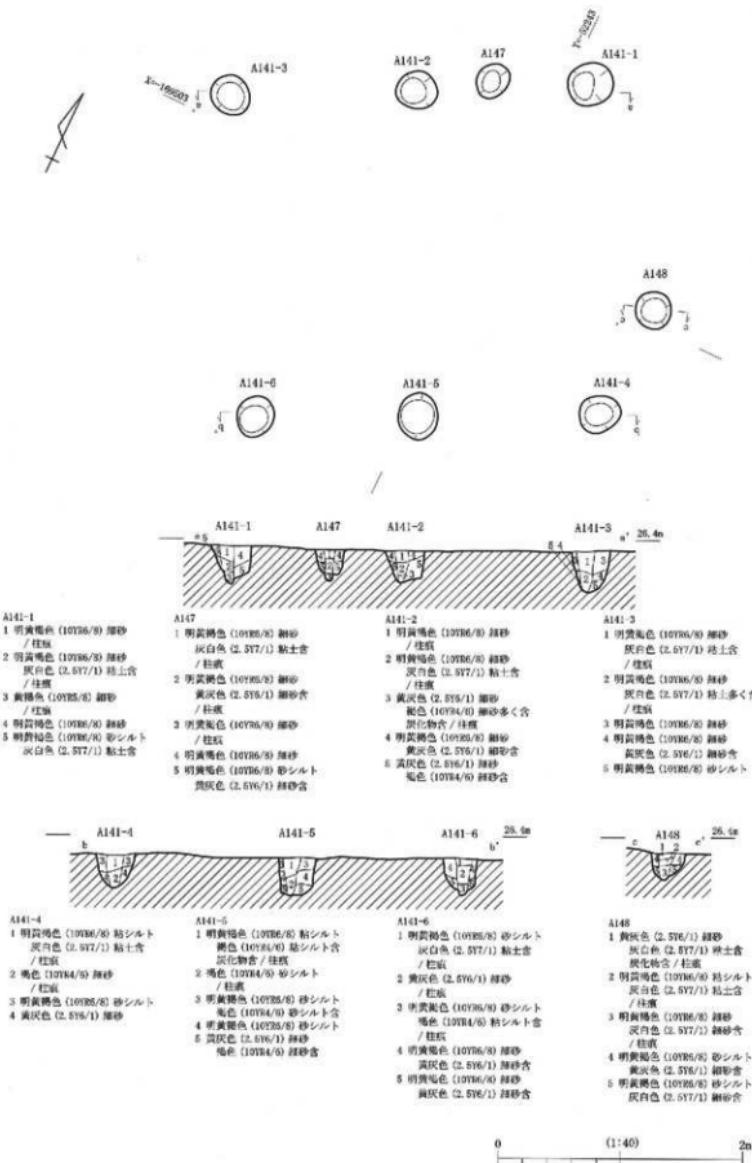
### 第 3 節 第 2 面の調査(第 8 図、図版 2-1、図版 5)

基本層序第 14 層上面で検出した。遺構は、掘立柱建物 2 棟、土坑 1 基、ピット多数、溝 1 条、自然流路 1 条である。遺構は調査区北西部のみで確認している。調査区の北西端および北東部では、ピットの並びを確認するため、部分的に調査区を拡張した。この結果、北東部では、掘立柱建物 2 を検出することができた。

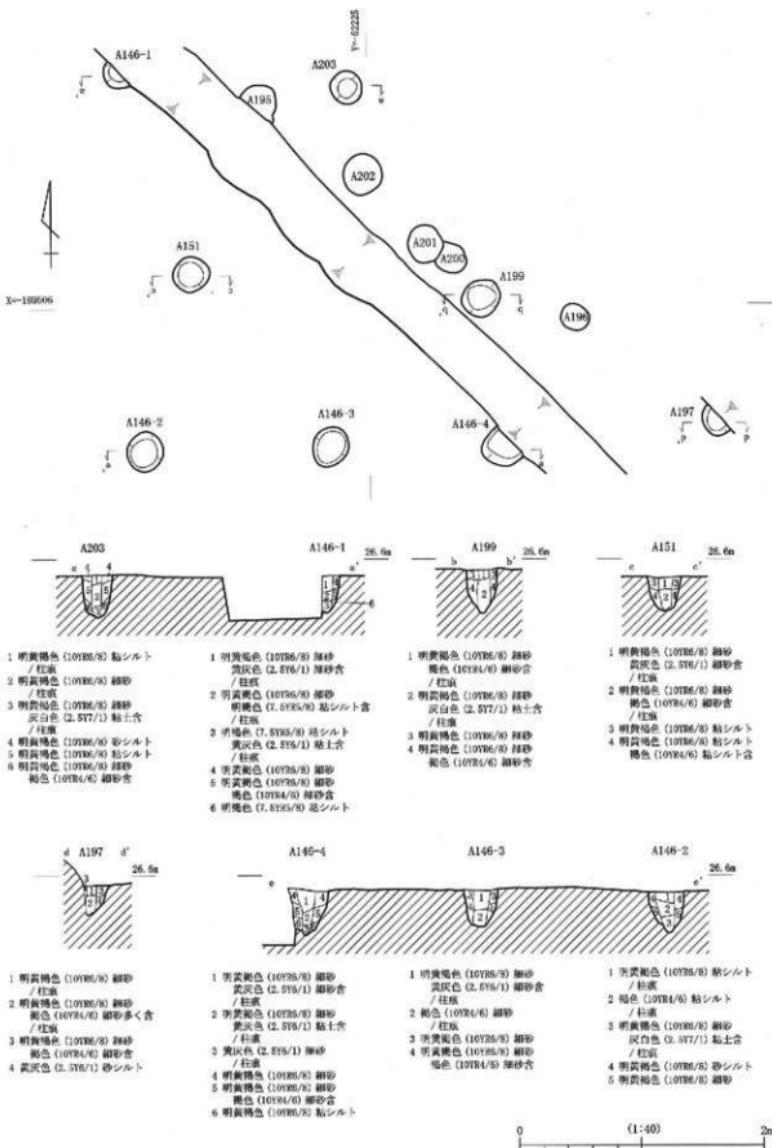
#### (1) 掘立柱建物

**掘立柱建物 1**(第 9 図、図版 6-1、図版 7-1・2) A 区北西部で検出した。A141-1、A141-2、A141-3、A141-4、A141-5、A141-6 の 6 基の柱穴からなる、梁間 1 間、桁行 2 間の規模な掘立柱建物である。梁間 2.5 ~ 2.6m、桁行 2.6 ~ 2.9m を測り、桁行の柱穴の芯々距離は 1.35 ~ 1.5m である。柱穴の平面形は円形で、いずれも柱痕を確認できた。柱穴の規模は、直径 0.3 ~ 0.4m、深さ 0.2 ~ 0.3m、柱痕の直径は 0.10 ~ 0.15m である。A141-1 と A141-2 の間に位置する A147、A141-1 と A141-4 の間に位置する A148 も、関連する柱穴の可能性があるが、A141-1 ~ A141-6 の 6 基の柱穴と比較すると、直径、深さともやや小規模である。A148 は、側柱の可能性が考えられるが、南西側の A141-3 と A141-6 の間では、対応する柱穴は検出できなかった。遺物は出土しなかった。

**掘立柱建物 2**(第 10 図、図版 6-2、図版 7-3・4) A 区北部で検出した。前述のように、調査区を一部拡張して規模の確認を行ったが、東側へさらに展開する可能性がある。調査区内で確認できる範囲では、A146-1、A146-2、A146-3、A146-4、A197、A203 の 6 基の柱穴からなり、梁間 1 間以上、桁行 3 間以上の掘立柱建物である。梁間 3.2m 以上、桁行 4.7m 以上を測り、桁行の柱穴の芯々距離は 1.4 ~ 1.7m である。柱穴の平面形は円形で、いずれも柱痕を確認できた。柱穴の規模は、径 0.3 ~ 0.35m、深さ 0.25 ~ 0.35m、柱痕の直径は 0.1 ~ 0.15m である。桁行方向に並ぶ A151、A199 は、同方向の別の掘立柱建物を構成する可能性が考えられる。遺物は



第9図 捩立柱建物 1

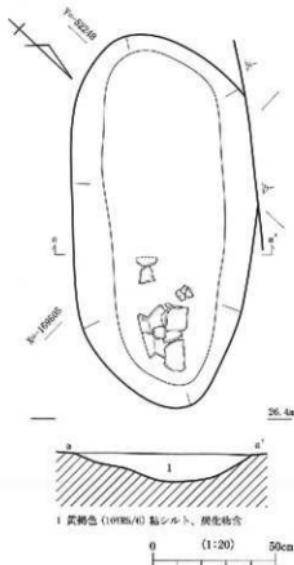


第10図 挖立柱建物2

A146-3より弥生土器が出土したが、図化できる遺物はなかった。

## (2) 土坑

**土坑 A143(第11図、図版7-5・6)** A区北西部、掘立柱建物1の西側で検出した。北西部は調査区外にのびる。平面形は楕円形で、長軸1.6m、短軸0.8m以上、深さ0.1mである。遺物は甕(遺物番号1、以下同)のみである。出土遺物より、庄内式併行期に所属すると考えられる。



第11図 土坑 A143

**(3) ピット**

平面形が円形に近いものをピットとして報告する。A区B区ともに検出している。掘立柱建物を構成するもの、または関連する可能性のあるものとして先にとりあげた造構のほかは、明確に建物や柵列を構成するものはなかった。柱痕を確認できたものは、A149、A150、A152-1～A152-6、A160、A163、A174、A175、A185、A187、A190、A195、A196、A198、A200～A202、A204、B004～B007、B011である。柱痕を確認できたピットは、直径0.2～0.35m、深さ0.15～0.4m、柱痕の直径は0.1～0.15mを測る。柱痕を確認できなかったピットは、直径0.15～0.3m、深さ0.02～0.2mを測る。前者の方が、直径、深さとも規模が大きいことから、機能が異なっていた可能性が考えられる。埋土は、明黄褐色、黄褐色、黄灰色の細砂またはシルト、黄灰色、灰白色の粘土である。遺物は次に報告するA139のみで出土した。

**ピット A139(第12図、図版7-7)** A区西部で検出した。平面形は円形で、直径0.25m、深さ0.2mを測る。柱痕は確認できなかった。遺物は甕1点の底部が出土した。出土状況より、埋土を再掘削し、底部を下にして据えたものと考えられる。取り上げの際に細片となり図化できなかつたが、古墳時代前期に所属するものである。

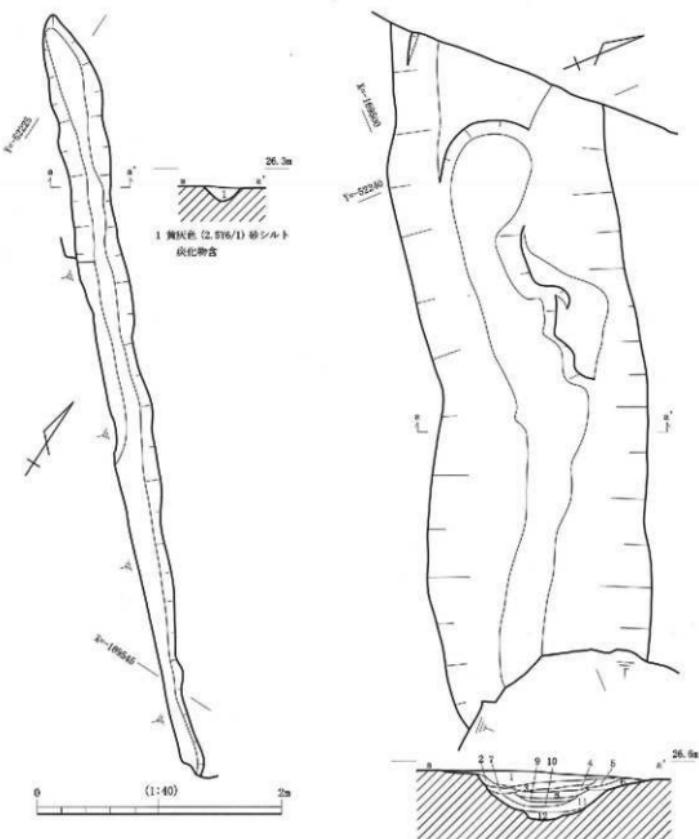
## (4) 溝、自然流路

**溝 B016(第13図、図版7-8)** B区南西部で検出した。南東側は調査区外にのびるが、確認できる範囲では、全長6.4m以上、幅0.35～0.4m、深さ0.1mである。遺物は出土しなかつた。

**自然流路 A142(第14図、図版8)** A区北部で検出し



第12図 ピット A139



第13図 溝B016

た。両端とも調査区外にのびるが、確認できる範囲では、全長11.4m以上、幅3.1~3.6m、深さ0.5~0.8mである。埋土は、上層(1~7層)は明黄褐色の細砂またはシルト主体、下層(8~11層)は灰白色または黄灰色の粘土主体で、最下層(12層)は砂礫層が堆積する。水の流れの方向は、地形から、東から西と考えられる。遺物は、上層から高杯脚部(9、10)が、下層から甕(5~8、u.i.2)、高杯(3)、壺(2、4、u.i.1)が出土した。出土遺物は弥生時代後期から古墳時代前期のものを含み、庄

- 1 細色 (1078/4) 砂砂  
黄褐色 (1073/2) 粘シルト多く含、灰化物含
- 2 黄褐色 (1075/6) 粘シルト  
黄褐色 (1078/8) 粘土、灰化物含
- 3 細色 (1078/4) 砂砂  
明黄褐色 (1078/8) 粘砂含、灰化物含
- 4 黄褐色 (1078/1) シルト  
粘土、灰化物含多く含、灰化物含
- 5 明黄褐色 (1078/9) 砂砂  
粘土、灰化物含多く含
- 6 明黄褐色 (1078/4) シルト多く含  
粘土
- 7 明黄褐色 (1078/1) 砂土、褐色 (1074/4) 粘土含  
粘土
- 8 黄褐色 (1078/8) 粘土含、灰化物含
- 9 灰白色 (2.517/1) 粘土  
明黄褐色 (1078/8) 粘土含、灰化物含
- 10 黄褐色 (2.516/1) 砂砂、灰白色 (2.517/1) 粘土含
- 11 黄褐色 (2.516/1) 粘土含
- 12 黄褐色 (2.517/1) 粘土含、灰化物含、タミナ  
12 黄褐色 (2.515/2) 粘シルト 灰化物含多く含

第14図 自然流路A142

内式併行期から古墳時代前期を主体とする。

**小結** 第2面の遺構出土の土器のうち、図化可能であったものは土坑A143および自然流路A142出土のもののみであり、その量も多くない。しかし、図化できなかつたものも含め、おおむね庄内式併行期から古墳時代前期に位置づけることができる。また、土坑A143およびピットA139の埋土は、掘立柱建物を構成する柱穴も含め、第2面で検出したピットや溝の埋土と類似する。したがって、第2面検出遺構の所属時期は、庄内式併行期から古墳時代前期と想定でき、この時期の集落跡と考えられる。

また、第1節で述べたように、第2面検出面である基本層序第14層より上層に堆積する基本層序第11層、第12層は、一連の洪水堆積物と考えられるもので、庄内式併行期から古墳時代前期の土器が出土している。一方、第14層も、洪水堆積物と考えられるものであり、弥生時代後期後半の遺物が出土している。これらの層はいずれも、旧河川の氾濫によって堆積したものと考えられる。したがって、第2面で検出した集落跡は、弥生時代後期後半に形成された氾濫原上に、庄内式併行期から古墳時代前期にわたって営まれ、古墳時代前期の間に再び河川氾濫により埋没したものと考えられる。こうした河川活動と居住域の関係については、第5節の下層確認調査の結果も踏まえ、第6章で述べる。

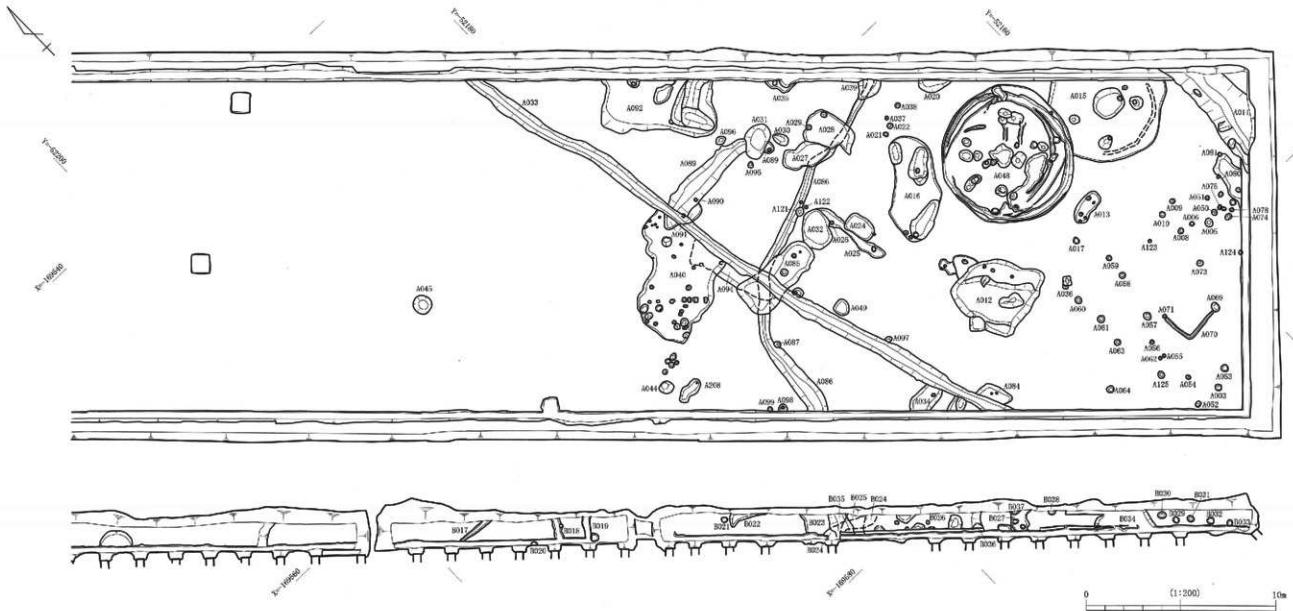
#### 第4節 第3面の調査(第15図、図版2-2、図版9、図版10)

基本層序第17層上面で検出した。遺構は、竪穴住居3棟、土坑28基、ピット多数、溝13条である。前述のように、遺構は調査区南東部のみで確認している。

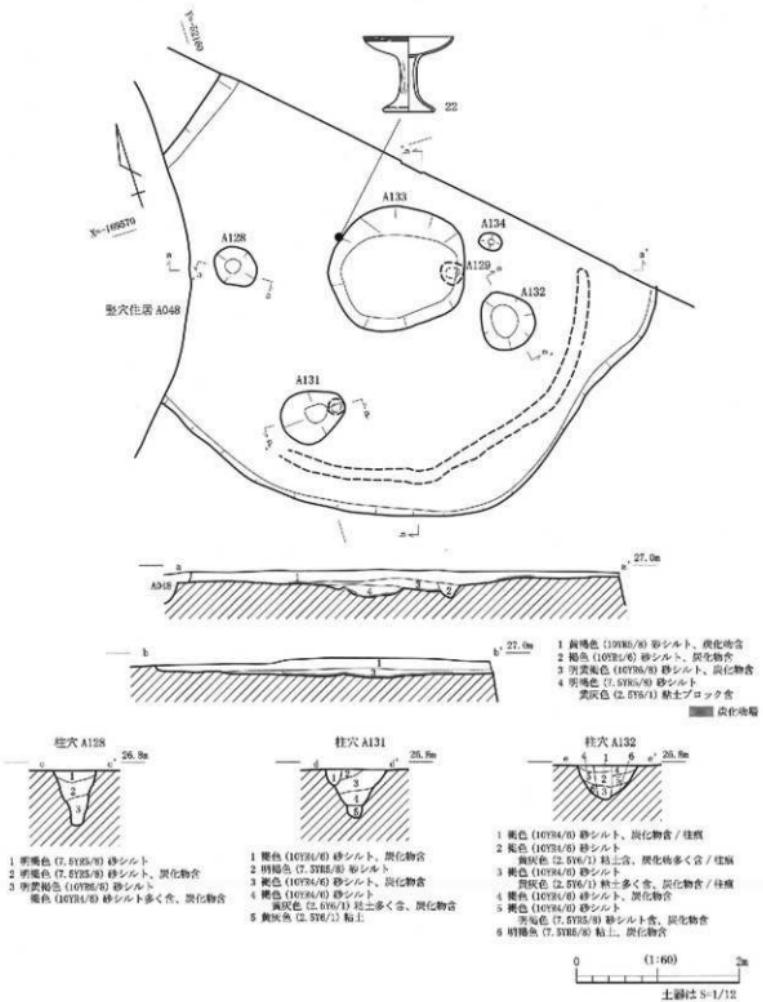
##### (1)竪穴住居

**竪穴住居 A015(第16図、図版11)** A区東部で検出した。北東側は調査区外にのび、西側は竪穴住居A048に埋土を掘削される。平面形は円形で、直径6.3m、深さ0.1~0.25mである。住居内で、柱穴3基、土坑1基、ピット2基を検出した。床面直上に炭化物層が薄く堆積するが、貼り床は確認できない。また、住居内南側では、不明瞭ながら、幅0.15mの溝状遺構の痕跡を確認した。土層断面の観察でも明確でなかったが、壁溝の可能性が考えられる。

柱穴は、A128、A131、A132の3基を確認した。位置関係より本来は4基の柱穴をもっていたと考えられる。このうちA132のみで、柱痕を確認できた。柱穴の規模は、直径0.55~0.75m、深さ0.4~0.6m、柱痕の直径は0.2mを測る。また、柱穴A131の東端では、直径、深さとも0.2mにわたり埋土が削除されている。柱穴の埋没後に設けられたピットと考えられるが、竪穴住居A015に伴うものと断定はできない。土坑A133は、住居中央で検出した。不規則円形で、長軸1.7m、短軸1.5m、深さ0.2mである。壁面に被熱による硬化や赤変はみとめられないが、底部に炭化物層が薄く堆積しており、中央土坑と考えられる。ピットは、A129、A134の2基を確認した。A129は、中央土坑A133の埋土を削除し、規模は、直径0.3m、深さ0.2mである。ピットA134は直径0.3m、深さ0.2mである。



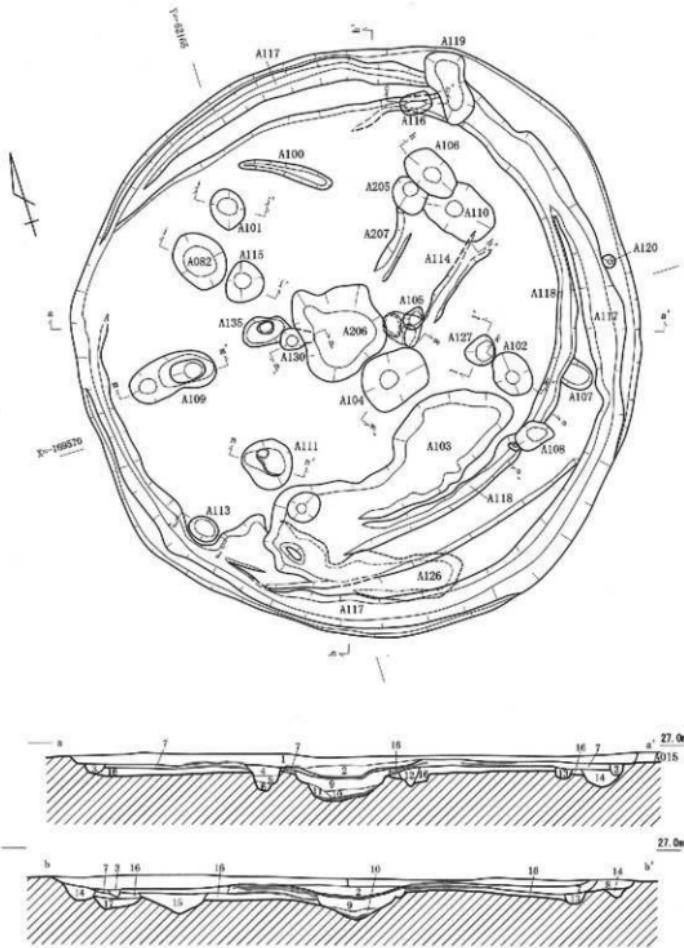
第15図 第3面全体図



第16図 積穴住居A015

遺物は、高杯(22、図版11—4)、水差(20)、斐蓋(21)などの弥生土器のほか、サヌカイト片が出土した。また、中央土坑A133から甕が、ピットA134から蛤刃石斧(180)が出土した(図版11—5)。出土土器より、弥生時代中期後半に所属すると考えられる。

積穴住居A048(第17・18図、図版12・13) A区東部で検出した。積穴住居A015の埋土を掘削する。平面形は円形で、直径7.4m、深さ0.2~0.3mである。住居内では、柱穴11基、土坑5基、ピッ



- 黄褐色 (10YR5/2) 淡褐色、炭化物含  
量少

10 黄褐色 (2.5YR5/2) 淡褐色、炭化物含  
量少

11 暗褐色 (7.5YR5/2) 深褐色、炭化物含  
量多、含腐殖质

12 暗褐色 (10YR5/2) 砂质土、晦褐色 (7.5YR5/2) 细砂多<sup>多く含</sup>  
炭化物含  
量少

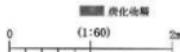
13 暗褐色 (10YR5/2) 砂质、晦褐色 (7.5YR5/2) 砂质含  
炭化物含  
量少

14 暗褐色 (10YR4/2) 砂质、晦褐色 (7.5YR4/2) 砂质含  
炭化物含  
量少

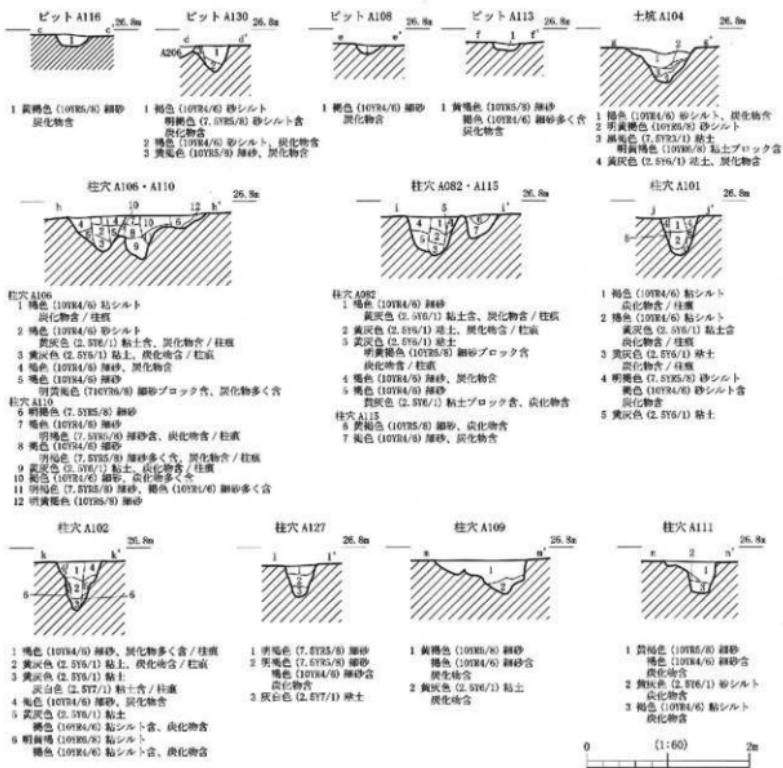
15 暗褐色 (10YR4/2) 砂质、晦褐色 (7.5YR4/2) 砂质含  
炭化物含  
量少

16 褐色 (10YR5/8) 深褐色、晦褐色 (7.5YR5/8) 深褐色  
含腐殖质、土坡 A135

17 暗褐色 (10YR4/8) 深褐色、晦褐色 (7.5YR4/8) 深褐色  
含腐殖质、土坡 A135



### 第17図 竪穴住居A048(1)



第18図 穫穴住居A048(2)

ト7基、溝5条を検出した。貼り床は、住居築造当初のもの(16層、以後「床下層」と呼称する)と、貼り直しによるもの(7層、以後「床上層」と呼称する)の2層が住居跡内のほぼ全域にみとめられる。床上層の設置範囲は、床下面設置時より北側で0.4mほど内側に入っており、住居の直径は約7mとなる。なお、床上層の間でも、1～2層の炭化物層が間層としてみとめられる箇所があり、特に住居の中央付近に顕著である。したがって、少なくとも中央付近ではさらに繰り返し貼り直しが行われていたことがわかる。貼り床には同質の粘土が用いられているため、炭化物層の間層が入らない場合には、貼り直しの有無を明確には確認できない。したがって、炭化物層が顕著にみとめられる中央付近のみでなく、住居内の全体にわたってさらに繰り返し床面の貼り直しを行っていた可能性もある。住居内の遺構の多くは床下層の上面で検出したが、検出状況や土層断面の確認などにより、床上層上面に伴うこと、あるいは、床下層設置に先行することが確認できる遺構もある。

柱穴は、A082、A101、A102、A106、A109、A110、A111、A115、A127、A135、A205の11基を確

認した。このうちA135のみ床上層に伴うことが確認できたが、ほか10基については判断できない。位置関係より、第1群(A082、A101、A115)、第2群(A102、A127)、第3群(A106、A110、A205)、第4群(A109、A111、A135)に分けられることから、一時期に使用されたのは4基であったと考えられる。ただし、第4群としたA109、A135の位置は第1群に近く、一時的には5基が同時に使用された可能性もある。柱痕跡がみとめられたのは、A082、A101、A102、A106、A110である。A109は、柱を抜き取っていることが確認できる。また、A111では、柱を抜き取った痕と、直径0.2mの柱の両者が確認でき、立て直したものと考えられる。また、A106はA110の埋土を掘削する。したがって、各群の柱の数は、第2群をのぞくと3基から4基となり、大きく2度または3度の柱の立て替えが行われたと推定できる。柱穴の規模は、直径0.4～0.7m、深さ0.3～0.6m、柱痕の直径は0.15～0.3mを測る。

土坑は、A103、A104、A119、A126、A206の5基を確認した。このうちA126は、床下層に先行するもの、A103は床下層に伴うもの、A206は床上層に伴うものであるが、A104、A119については判断できない。A126は、長軸2.4m、短軸0.6m、深さ0.15mである。埋土は床下層に覆われ、床下層に伴う溝A117、A118に埋土を掘削される。住居掘削時に掘り下げられ、床下層設置前に平らにならすために埋められたものと考えられる。A104、A206は、住居中央付近で検出した。両者とも壁面に被熱による硬化や赤変はみとめられないが、炭化物層の堆積がみとめられることから、中央土坑と考えられる。A104は不整円形で、長軸0.85m、短軸0.65m、深さ0.4m、A206は不整円形で、直径1.2m、深さ0.3mである。A206は、人為的に埋めた後に上面に床を凹状に貼っている。凹み周辺に薄い炭化物層が確認できることから、床を貼り直した後も中央土坑として使用していると考えられる。9～11層を埋土とする下層遺構をA206a、2層を埋土とする上層遺構をA206bと呼称し、中央土坑3基の使用順序について検討する。A206a、A206bは床上層に伴い、中央付近の貼り直しを介して連続して使用されたと考えるのが自然である。A206bが非常に浅く、A104がこれより後に設けられたとは考えにくいくことから、中央土坑は、A104、A206a、A206bの順に機能し、A104は床下層に伴う可能性が高い。土坑A103は、長楕円形で、長軸3.3m、短軸0.55～0.9m、深さ0.25mである。西側で溝A118につながる。土坑A119は、溝A117、A118の埋土を掘削する。楕円形で、長軸0.9m、短軸0.4m、深さ0.3mである。

ピットは、A105、A107、A108、A113、A116、A120、A130の7基を確認した。このうちA105、A107は床下層に、A116、A130は床上層に伴うものであるが、ほか3基については判断できない。A105は、直径0.55mの不整円形で、中央上坑に隣接し、溝A114につながる。溝A114と一緒に排水に関わる機能をもつものである可能性がある。A116は楕円形で、長軸0.4m、短軸0.25m、深さ0.15m、A130は円形で、直径0.3m、深さ0.3mである。ピットA120は直径0.15m、深さ0.05mと規模のやや小さい円形で、A107、A108、A113のほか3基は、長軸0.35～0.6m、短軸0.3～0.35m、深さ0.1～0.2mの楕円形である。

溝は、A100、A114、A117、A118、A207の5条を確認した。このうちA100のみが床上層に伴い、

ほか4条は床下面に伴うものである。A100は、平面的に確認できたのは北側の一部であるが、土層断面の確認より、住居の外側寄りに北東部をのぞきほぼ全周していたと想定でき、壁溝と考えられる。幅0.15～0.25m、深さ0.1～0.15mである。また、A117、A118についても、A117は住居の外側寄りを、A118はその内側を巡っており、壁溝と考えられる。両者とも西側では確認できない。床上層設置時またはA100など床上層に伴う遺構の掘削により失われた可能性もある。また、溝A118は南西側で土坑A103につながる。規模は、溝A117が幅0.2～0.5m、深さ0.1～0.2m、溝A118が幅0.2m、深さ0.1mである。溝A114、A207は、柱穴A106、A110、A205のあたりから住居中央へ向かってのびており、2条がセットになるようである。長さ0.9～1.2m、深さ0.1mと浅く、両端とも立ち上がりは明瞭でない。排水の機能をもつものである可能性がある。

遺物は、甕(14)、壺(15～17)、高杯(11、13)、水差把手、鉢などの弥生土器のほか、紡錘車(173)、扁平片刃石斧(178)、打製石鎌(155、156、160)、スクレイバー(168、172)、片岩製磨製石器片、サヌカイト剥片が出土した。また、中央土坑A206aから高杯(u.i.3)、壺、打製石鎌(157)、サヌカイト剥片(u.i.23)が、土坑A103から甕、粘土塊(u.i.9)とサヌカイト剥片が、壁溝A100から弥生土器、打製石鎌(158)が、壁溝A117から高杯(12)、甕、磨石(184)、サヌカイト剥片が、出土した。このほか、柱穴A082から壺、柱穴A101から高杯とサヌカイト剥片、柱穴A102から壺とサヌカイト剥片、柱穴A106から壺とサヌカイト剥片、柱穴A109から甕と壺、柱穴A110から弥生土器底部、柱穴A111、中央土坑A104、中央土坑A206bから弥生土器とサヌカイト剥片が出土した。また、柱穴A115、A127、土坑A119、A126、ピットA105、A107、A120、溝A114から弥生土器が出土した。出土土器より、弥生時代中期後半に所属すると考えられる。なお、出土遺物では、床上層、下層で時期差はみとめられない。

**竪穴住居B026(第19図、図版14)** B区南東部で検出した。溝B024の埋土を掘削し、土坑B036、溝B025に埋土を掘削される。両端とも調査区外となる。調査区幅が1mと狭く、他の遺構との切り合いもあるため平面形は不明確であるが、確認できる南東端が直線的ではないことから、円形である可能性が高い。直径7m以上、深さ0.35～0.5mである。B026は、土坑B036および溝B024、B025、B035と埋土が類似していたため、検出時点ではこれらを一連の遺構と考えて調査を進めていた。そのため、竪穴住居B026内の遺構については、平面的な検出を行えずに調査区壁面の土層断面によって確認したものも多い。そうした断面確認によるものを含め、確認し得た住居内の遺構は、柱穴2基、土坑2基、ピット3基、溝4条である。貼り床は、数度にわたる貼り直しを明瞭に確認でき、設置範囲および遺構との関係も考慮すると、大きく3群に分けることができる。これを住居築造当初のものから順に「床下層」、「床中層」、「床上層」と呼称することとする。床下層は、45層を主体とし、44層も含む。床中層は、40層を主体とし、39層を含む。床上層は、28層を主体とし、26、27、29～31層を含む。検出面から床下層上面までの深さは0.25～0.4m、検出面から床中層上面までの深さは0.15～0.35m、検出面から床上層上面までの深さは0.1～0.3mである。竪穴住居A048と同様、炭化物層の間層が入らないために確認でき

ていない床面の貼り直しが、さらに繰り返し行われていた可能性もある。

柱穴は、B039、B040 の 2 基を、いずれも南西壁面での土層断面により確認し、柱痕跡もみとめられた。柱穴の規模は、直径 0.35～0.55m、深さ 0.3m、柱痕の直径は 0.1m を測る。いずれも 28 層から切り込んでいることより、床上層に伴うものと考えられる。

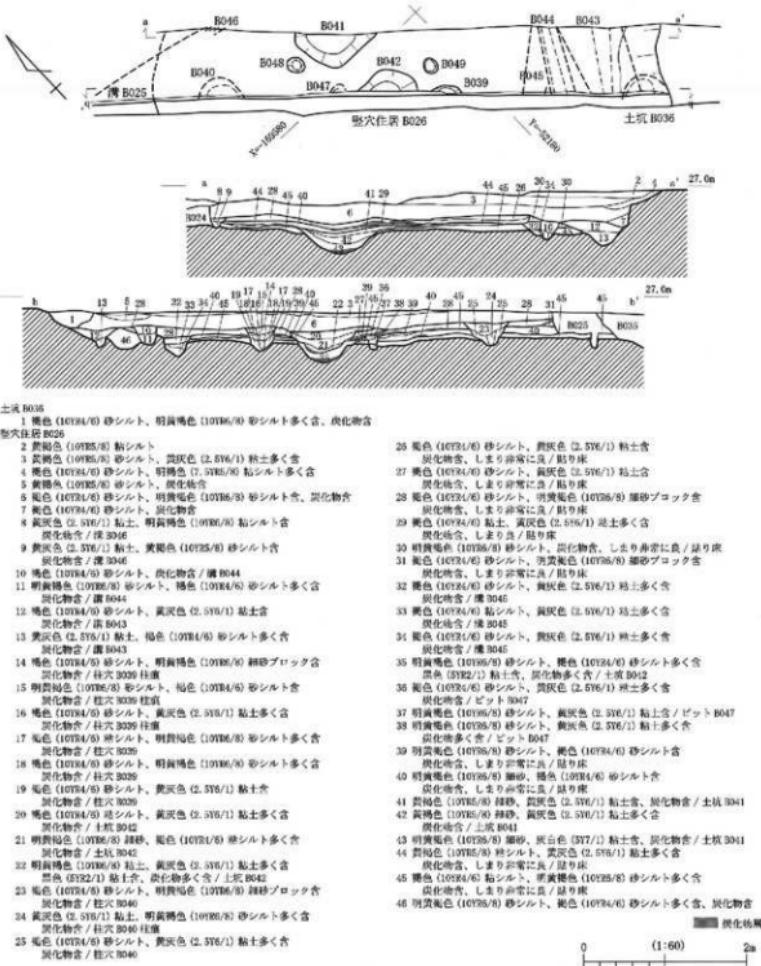
土坑は、B041、B042 の 2 基を確認した。両者とも、壁面に被熱による硬化や赤変はみとめられないが、底部に炭化物層が凹状に堆積していること、埋土は黒色粘土や炭化物を含むことから、中央土坑と考えられる。いずれも不整円形で、B041 は直径 1.0m、深さ 0.3m、B042 は直径 0.8m、深さ 0.4m である。中央土坑 B041 は、44 層、45 層から切り込んでおり、埋土を 40 層で覆われていることから、床下層に伴うこと、床中層設置後は機能していないことがわかる。中央土坑 B042 は、39 層、40 層から切り込んでおり、27 層、28 層の貼り床設置後に、再度掘削を行っている。再掘削後の底部にも炭化物層が凹状に堆積していることから、中央土坑としての使用が想定できる。したがって、当初の掘削は床中層に伴うこと、床上層設置後に再度掘削され、引き続き中央土坑として機能していたと判断できる。

溝は、B043、B044、B045、B046 の 4 条を、土層断面により確認した。B043、B044、B045 は南西、北東の両壁面で確認でき、住居の外側寄りを巡っていると想定できることから、壁溝と考えられる。B046 については、住居の南西側埋土が溝 B025 に掘削されるため北東壁面のみでの確認であるが、住居の外側端で確認されることより同様に壁溝と考えてよいであろう。規模は、B043 が幅 0.6～0.75m、深さ 0.2～0.3m、B044 が幅 0.2～0.25m、深さ 0.2～0.25m、B045 が幅 0.2～0.3m、深さ 0.2～0.25m、B046 が幅 0.15m、深さ 0.1m である。B043、B044、B046 は、28 層または 30 層より切り込んでおり、床上層に伴うと考えられる。B043、B044 はそれぞれ住居の外側、内側をめぐっており、いずれかが B046 とつながる可能性が考えられる。B045 は、40 層から切り込んでおり、埋土を 28 層および 30 層で覆われていることから、床中層に伴うこと、床上層設置後は機能していないことがわかる。

ピットは、B047、B048、B049 の 3 基を確認した。B047 は、土層断面により確認したもの、B048、B049 は、平面で検出したものである。いずれも円形で、直径 0.15～0.2m、深さ 0.1～0.2m である。B048、B049 の埋土は黄灰色粘土で、炭化物を多く含む。B047 は、39 層より切り込んでおり、床中層に伴うものと判断できる。また、最上層埋土 36 層直上に薄い炭化物層が確認でき、さらに 28 層に覆われることから、床中層機能途中に埋没したものと考えられる。B048、B049 については、土層の関係を検討できず、どの貼り床に伴うものは判断できない。

遺物は、甕(23,24)、壺、高杯(25)などの弥生土器のほか、サヌカイト剥片が出土した。住居内の遺構に明確に伴うものは確認できなかった。出土遺物より、弥生時代中期後半に所属すると考えられる。

最後に、各貼り床に伴う遺構と、貼り床の設置範囲から、堅穴住居 B026 の変遷について検討する。住居内の遺構は、床下層に伴うものとして中央土坑 B041、床中層に伴う遺構として中央



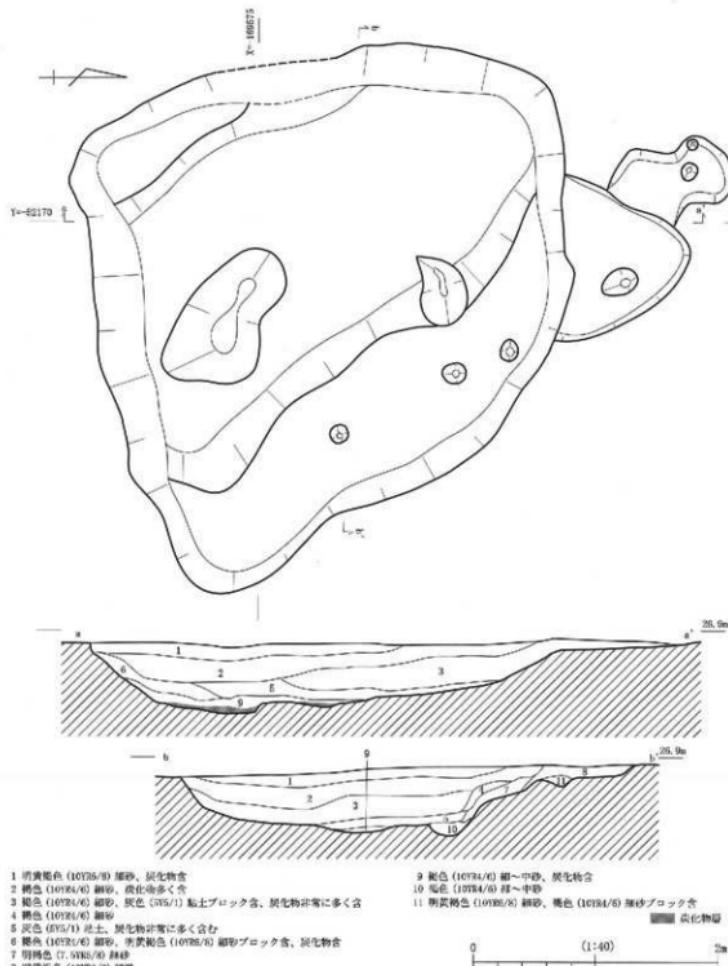
第 19 図 壁穴住居 B026

土坑 B042、壁溝 B045、ピット B047、床上層に伴うものに柱穴 B039 と B040、中央土坑 B042、壁溝 B043、B044、B046 があげられる。ここで、各貼り床の設置範囲をみると、床下層およびそれに伴う遺構は、住居南東側では、端から約 2m の範囲では確認できないが、南北壁では、溝 B025 の埋土下まで残存する。床中層およびそれに伴う遺構は、南東側では、端から約 1.5m の範囲では確認できず、南北壁では、溝 B025 に埋土を掘削されるため不明である。床上層およびそれに伴う遺構は、南東側ではほぼ住居検出範囲の端部で確認できるが、南北壁では、溝 B025 に埋土

を掘削されたため不明である。したがって、住居範囲は、床下層、中層、上層という貼り直しに伴って、南東側へ移動または拡大したものと想定できる。また、中央土坑が住居のほぼ中央に位置するならば、中央土坑 B041、B042 の位置関係も、この想定を裏付けることになる。

## (2) 土坑

土坑は 28 基を確認した。溝の可能性もあるが断定できないもの、自然の落ち込みの可能性があるものなど、性格の不明瞭なものを含めて土坑として取り扱っている。以下では、形状や埋土

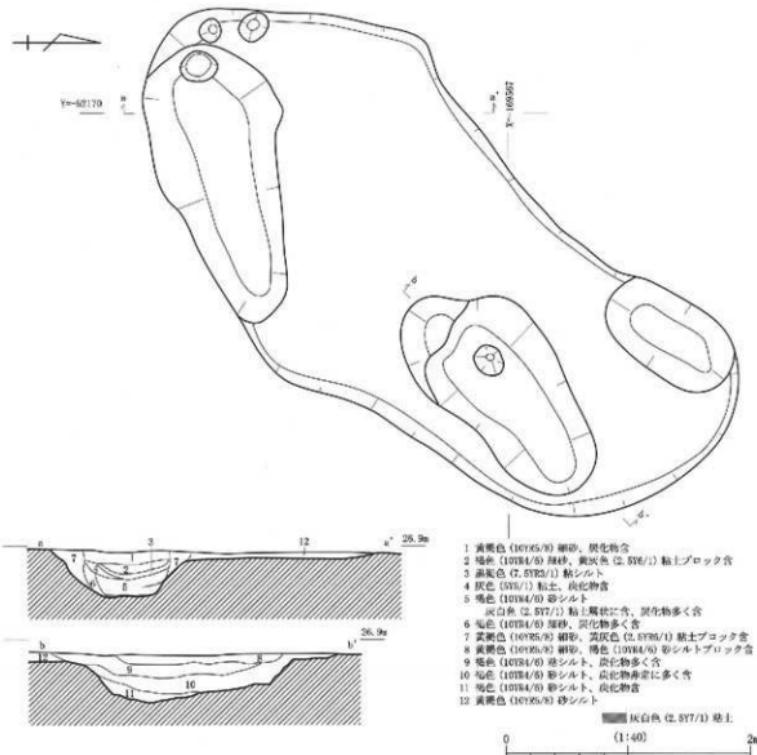


第 20 図 土坑 A012

の特徴的なもの、または顕著な遺物が出土したもののみ個別に述べる。

土坑 A012(第 20 図、図版 15—1～4) A 区南東部、竪穴住居 A048 の南西側で検出した。平面形は不整円形で、長軸 5.1m、短軸 4.2m、深さ 0.55m を測る。北西から南東方向に溝状に深くなつておらず、さらに部分的に窪む箇所もみとめられる。また、北東部の浅い箇所では、直径 0.15～0.3m、深さ 0.1m の円形ピット 6 基を確認した。埋土は、下層ほど炭化物を多く含み、最深部の底部付近には灰色粘土層や炭化物層が堆積する。遺物は、甕(28～34)、壺(35)、高杯(36)、鉢(27)、水差などの弥生土器のほか、砥石(183)、サヌカイト剝片が出土し、比較的遺物量が多い。出土遺物より、弥生時代中期後半に所属すると考えられる。遺構の性格については、底部に灰色粘土層や炭化物層が堆積すること、土器が比較的多く出土していることより、廃棄土坑の可能性が考えられる。

土坑 A016(第 21 図、図版 15—5～7) A 区北東部、竪穴住居 A048 の西側で検出した。平面形は不整椭円形で、長軸 5.6m、短軸 2.6m、深さ 0.4m を測る。内部では、落ち込み 3 箇所と、直径



第 21 図 土坑 A016

0.2~0.3m、深さ0.2mの円形ピット4基を確認した。落ち込みは、全体に浅く堆積した黄灰色シルト層(12層)を切り込んで掘削される。落ち込み内の埋土は、下層ほど炭化物を多く含み、底部付近では灰白色粘土層が堆積する。遺物は、甕(42~44)、壺(45)、鉢(41)などの弥生土器のほか、柱状片刃石斧(179)、打製石剣(164)、サヌカイト Retouched Flake(RF)(u.i.20)が出土し、比較的の遺物量が多い。甕(44)は、土坑A012出土遺物と接合したものである。出土遺物より、弥生時代中期後半に所属すると考えられる。遺構の性格については、落ち込み内に灰白色粘土層が堆積することや炭化物を多く含むこと、土器が比較的多く出土していることより、土坑A012と同様、廃棄土坑の可能性が考えられる。

**土坑 A024(第22図)** A区東部で検出した。土坑A025の埋土を掘削する。平面形は隅丸方形で、長軸1.6m、短軸1.0m、深さ0.15mを測る。南端に直径0.1mの小規模なピットを確認した。埋土は、8層と9層の間に薄い炭化物層がみとめられる。遺物は、壺(46)などの弥生土器が出土した。出土遺物より、弥生時代中期後半に所属すると考えられる。

**土坑 A025(第22図)** A区東部で検出した。土坑A032、ピットA026に埋土を掘削される。平面形は長細い溝状を呈し、長さ4.3m、幅0.4~0.7m、深さ0.1~0.3mを測る。遺物は、甕(49)、壺(47、48)、高杯などの弥生土器のほか、RF(u.i.21)などサヌカイト剥片が出土した。出土遺物より、弥生時代中期後半に所属すると考えられる。

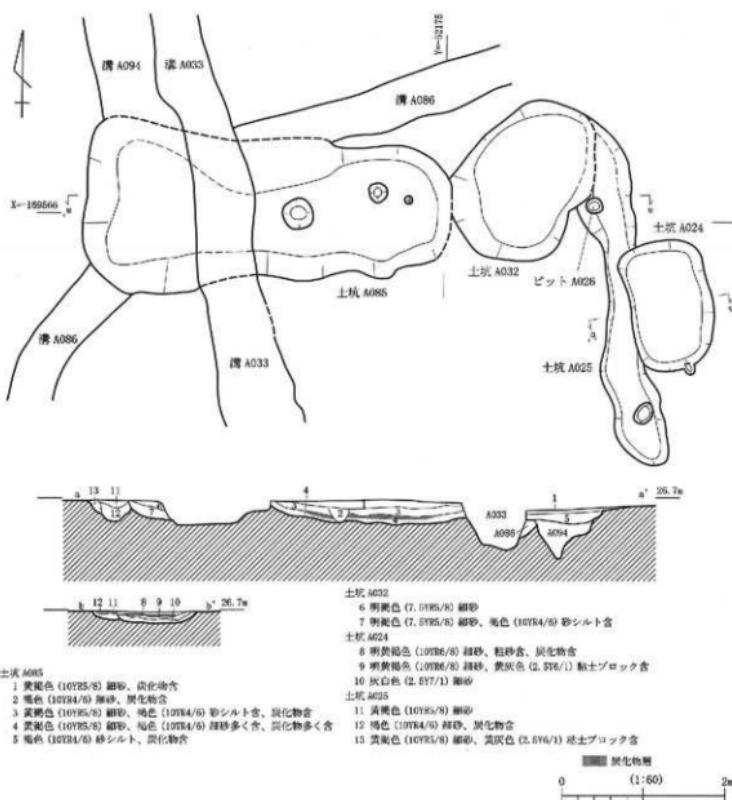
**土坑 A032(第22図)** A区東部で検出した。土坑A025の埋土を掘削し、土坑A085に埋土を掘削される。平面形は楕円形で、長軸2.15m、短軸1.5m、深さ0.3mを測る。遺物は、甕(50)、高杯(51)などの弥生土器のほか、スクレイパー(170)が出土した。出土遺物より、弥生時代中期後半に所属すると考えられる。

**土坑 A085(第22図、図版16—5・6)** A区東部で検出した。土坑A032、溝A086、溝A094の埋土を掘削し、溝A033に埋土を掘削される。平面形はいびつな隅丸方形で、長軸4.5m、短軸1.5~2.1m、深さ0.2~0.35mを測る。内部に直径0.1~0.35m、深さ0.1~0.15mの円形ピット3基を確認しており、このうち2層を埋土とする1基は、3層から切り込んでおり、土坑A085の埋没途中で掘削されていることがわかる。A085埋土は、下層ほど多く炭化物を含む。遺物は、甕(52~55)、壺(56、57)、高杯(58、59)などの弥生土器のほか、粘土塊(u.i.8)、サヌカイト剥片が出土し、比較的の遺物量が多い。出土遺物より、弥生時代中期後半に所属すると考えられる。

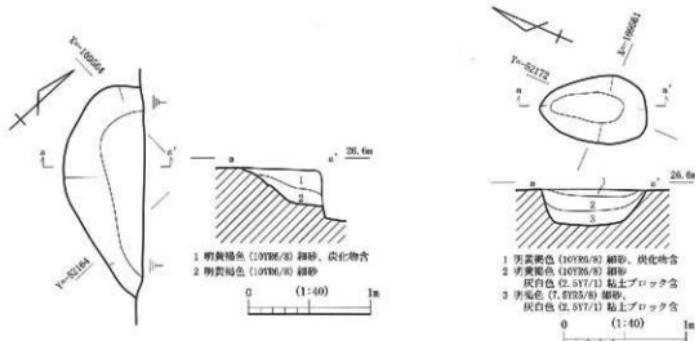
**土坑 A020(第23図)** A区北東部、堅穴住居A048の北側で検出した。北東側は調査区外であるが、平面形は円形または楕円形と考えられる。長軸1.8m以上、短軸1.2m以上、深さ0.3mを測る。遺物は弥生土器が出土したが、図化できる遺物はなかった。

**土坑 A030(第24図)** A区北東部で検出した。平面形は楕円形で、長軸0.9m、短軸0.6m、深さ0.3mを測る。遺物は、壺(60)などの弥生土器が出土した。出土遺物より、弥生時代中期後半に所属すると考えられる。

**土坑 A031(第25図)** A区東部で検出した。溝A089の埋土を掘削する。平面形は楕円形で、長



第22図 土坑A024・A025・A032・A085



第23図 土坑A020



第24図 土坑A030

軸 1.8m、短軸 1.2m、深さ 0.45m を測る。遺物は、甕、壺(62、63)、高杯(61)などの弥生土器が出土した。出土遺物より、弥生時代中期後半に所属すると考えられる。

**土坑 A035(第 26 図、図版 16—1・2)** A 区北東部で検出した。北東側は調査区外であるが、平面形は橢円形と推定できる。また、調査区北東壁面の観察より、北東側がさらに深くなることから、北東、南北方向が長軸と考えられる。長軸 1.7m 以上、短軸 1.6m 以上、深さ 0.3m 以上を測る。埋土は炭化物を多く含む。遺物は、甕(64、65)、壺(67)、高杯(66)、ミニチュア壺(68)などの弥生土器のほか、打製石鎚(153)、サヌカイト剥片が出土し、比較的遺物量が多い。出土遺物より、弥生時代中期後半に所属すると考えられる。

**土坑 A040(第 27 図、図版 16—3・4)** A 区東部で検出した。溝 A094 の埋土を掘削し、土坑 A091、溝 A033 に埋土を掘削される。東部を切られるが、平面形は不整形で、長軸 5.2m 以上、短軸 4.6m、深さ 0.1~0.15m を測る。内部では、さらに、直径 0.1~0.5m、深さ 0.1~0.3m の円形ピット 35 基を確認した。ピット内に柱痕は確認できなかった。遺物は、甕(74)、壺(69、70、73)、鉢(71、72)などの弥生土器のほか、石庖丁(175)、打製石劍(162)が出土し、比較的遺物量が多い。出土遺物より、弥生時代中期後半に所属すると考えられる。

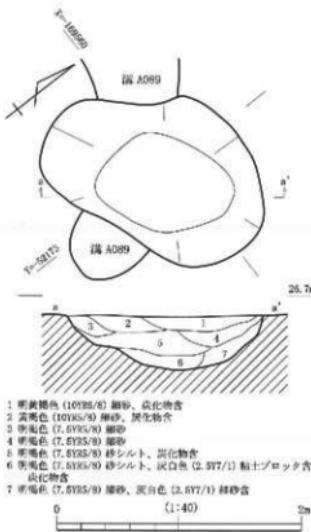
**土坑 A045(第 28 図)** A 区東部で検出した。第 3 面で検出した遺構のうち、最も西側に位置する。平面形は円形で、直径 0.95m、深さ 0.5m を測る。遺物は、壺(75)など弥生土器が出土した。出土遺物より、弥生時代中期後半に所属すると考えられる。

**土坑 A049** A 区東部で検出した。平面形は不整円形で、直径 0.8m、深さ 0.2m を測る。埋土は褐

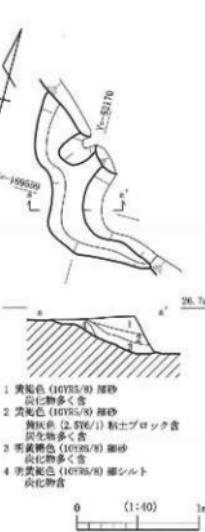
色シルトである。遺物は、壺(76)のみが出土した。出土遺物より、弥生時代中期後半に所属すると考えられる。

**土坑 A084(第 29 図)** A 区南東部で検出した。溝 A033 に埋土を掘削される。

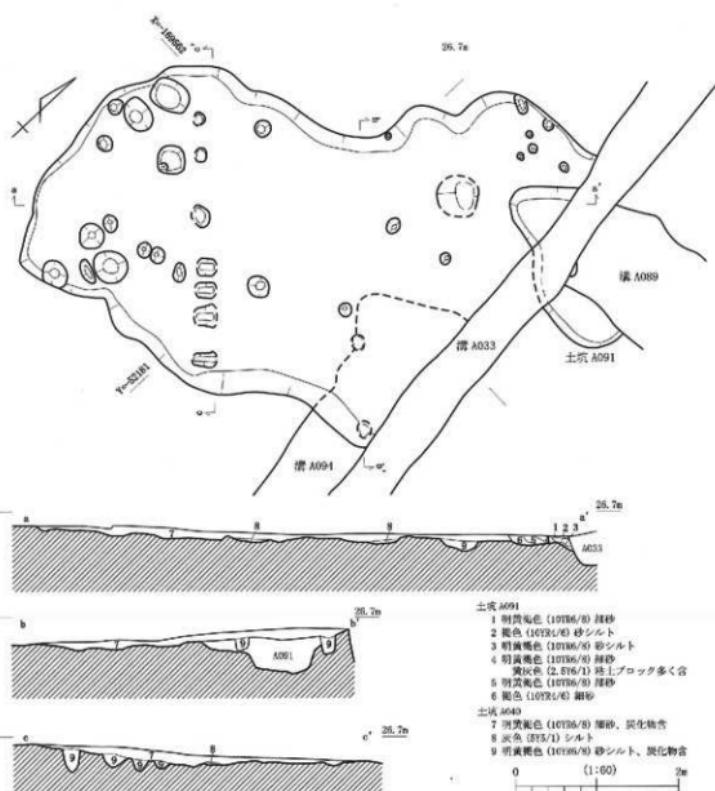
内部に落ち込み 1 箇所と、断面観察によりピット 1 基を確認した。南西側は調査区外へのびるが、平面形は長楕円形と考えられ、長軸 2.5m 以上、短軸 2.2m 以上、深さ 0.1m を測る。遺物は、甕、壺(77)など弥生土器が



第 25 図 土坑 A031



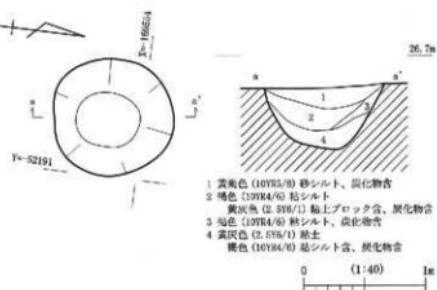
第 26 図 土坑 A035



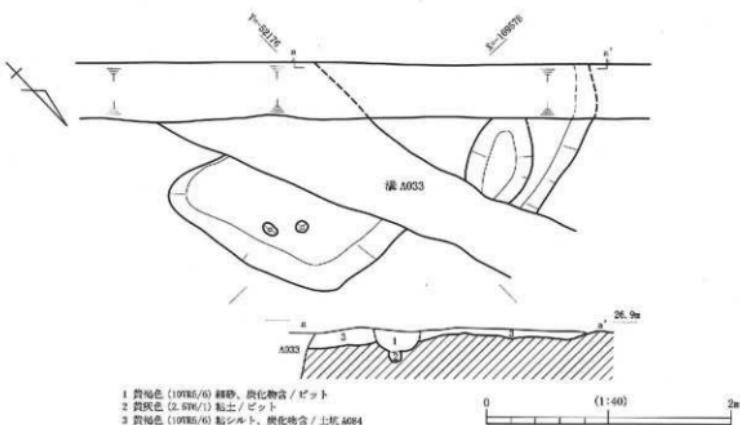
第27図 土坑 A040

出土した。出土遺物より、弥生時代中期後半に所属すると考えられる。

**土坑 A092** A区北東部で検出した。北東側は調査区外へのびる。平面形は不整形で、長軸 6.2m、短軸 3.1m 以上、深さ 0.1~0.7m を測る。内部では、落ち込み 3箇所を確認した。埋土は黄褐色細砂である。遺物は、甕(80)、壺(78、79)、高杯、鉢(81、82)などの弥生土器のほか、打製石鎌(151)、尖頭器(166)、スクレイパー(167)が出土し、比較的遺



第28図 土坑 A045



第29図 土坑 A033

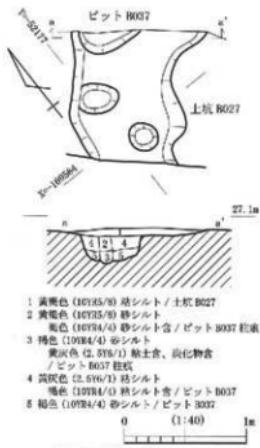
物量が多い。出土遺物より、弥生時代中期後半に所属すると考えられる。遺構の性格については、全体が浅いたまり状で、落ち込みがみとめられる点、遺物量が多い点が土坑 A012、A016 に類似することから、廃棄土坑の可能性が考えられる。ただし、灰色粘土層や炭化物層が堆積しないなど相違点もあり、断定はできない。

土坑 B027(第30図) B区南東部で検出した。両端とも調査区外へのびており、平面形は不明である。長軸 1.1m 以上、短軸 0.9~1.0m、深さ 0.05m を測る。内部では、円形ピット 3 基を確認し、うち B037 では柱痕が確認できた。遺物は、鉢(83)などの弥生土器が出土した。出土遺物より、弥生時代中期後半に所属すると考えられる。非常に浅く、人為的に掘削したものではなく、自然

の落ち込みである可能性もある。

### (3) ピット

平面形が円形に近いものをピットとして報告する。A区 B区ともに検出している。竪穴住居または土坑に関連するものとしてとりあげた遺構のほかは、明確に建物や柵列などを構成すると判断できるものはなかった。柱痕を確認できたものは、A区では、A052、A053、B区では、B020、B029~033、B038 である。個別に報告する A044 を除き、直径 0.3~0.4m、深さ 0.2~0.3m、柱痕の直径は 0.10m を測る。埋土は、褐色、黄褐色のシルトまたは細砂を主体とする。遺物は、個別に報告する A059 のほか、A005 で壺、高杯、サヌカイト剥片、A075 で壺、A026、A036、A063、A064、A097、B020、B029、B030 でも弥生土器が出土したが、図化できるものはなかった。また、A058 では粘



第30図 土坑 B027

土塊が出土した。

ピット A044(第31図、図版16—7) A区南東部で検出した。直径0.8m、深さ0.6m、柱痕の直径が0.1mと規模が大きいが、単独の検出である。南東約1.2mの所に位置する土坑A208内で木材を検出しておらず、柱の可能性もあるが、明確な掘方は検出できておらず、人為的なものであるか判断できない。人為的なものだとすれば、調査区外に建物が展開する可能性も考えられる。遺物は出土しなかった。

ピット A059(図版16—8) A区北東部で検出した。平面形は円形で、直径0.3m、深さ0.5mを測る。埋土は褐色シルトである。柱痕は確認できなかった。遺物は、底部より高杯脚部(84)が出土した。出土遺物より、弥生時代中期に所属すると考えられる。

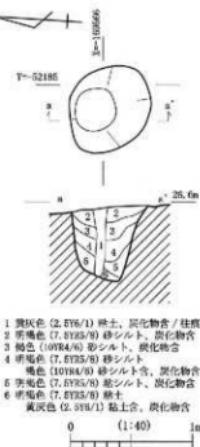
ピット A069・A071・溝 A070 A区南東部で検出したピット2基、溝1基で、位置関係より一連の遺構と考えられる。ピット A069、A071が溝 A070 の埋土を掘削する。A069、A071とも柱痕は確認できなかった。A069は、直径0.4m、深さ0.3m、A071は、直径0.2m、深さ0.3mをはかる。溝 A070は、ほぼ直角に屈曲しており、全長3.6m、深さ4.2mである。埋土は、A069が明褐色粘土、A071が灰白粘土、A070が褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

#### (4)溝

溝は、上述の A070 を含め、13条を確認した。

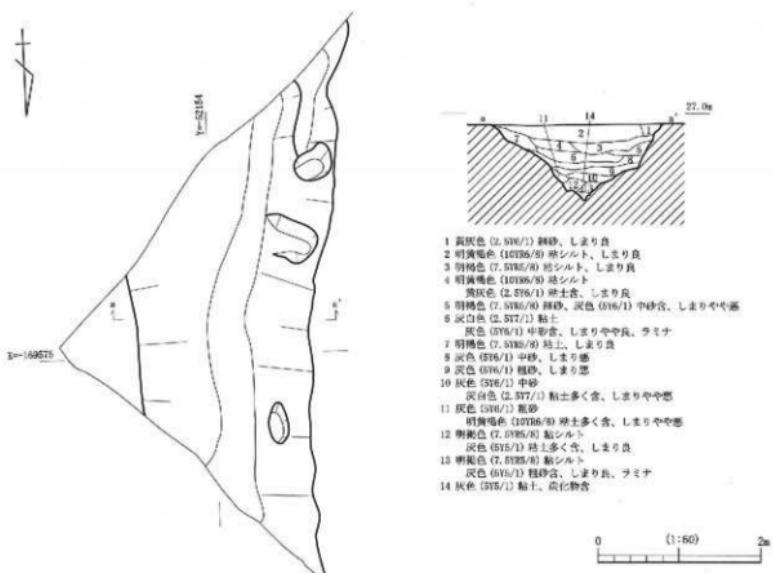
溝 A011(第32図、図版17) A区東端で検出した。両端とも調査区外へのびるが、確認できる範囲では、全長7m以上、幅2.1~2.7m、深さ0.9~1.0mである。横断面形はV字状を呈し、検出面より0.4~0.6m下がったところで掘り込み角度がやや強くなる。埋土は、屈曲箇所より上層までは明黄褐色または明褐色の細砂やシルト(1~7層)、屈曲箇所以下では灰色の粗砂が主体となり(8~11層)、最下層には灰色または明褐色の粘土またはシルトが堆積する(12~14層)。上流から流された土壌により埋没したものと考えられ、再掘削の痕跡はみとめられない。水の流れの方向は、地形から、北から南と考えられる。遺物は、屈曲箇所以上の上層(1~7層)から、生駒西麓産の壺(85)、高杯(86)などの弥生土器のほか、スクレイパー(171)が出土した。出土遺物より、弥生時代中期後半に所属すると考えられる。横断面形より、環境の可能性が考えられる。遺物は、上層のみから出土しており、埋没途中に廃棄されたものと考えられる。

溝 A034(第33図) A区南東部で検出した。東側は溝 A033に埋土を掘削され、西側は調査区外へのびるが、確認できる範囲では、全長2.0m以上、幅0.9~1.2m、深さ0.2~0.3mである。横断面形はU字状を呈する。位置関係より溝 B024に連続する可能性がある。遺物は、壺(87)、水差(88)などの弥生土器が出土した。出土遺物より、弥生時代中期後半に所属すると考えられる。

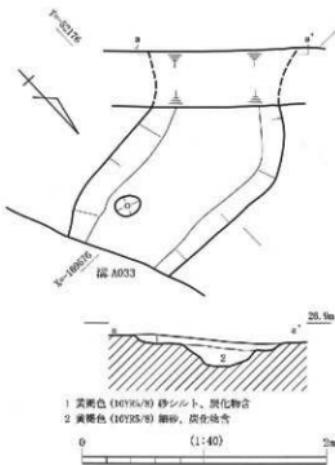


第31図 ピット A044

- 1 黄褐色(2. ET9/1) 砂土、炭化物含
- 2 黄褐色(7. ET25/9) 砂シルト、炭化物含
- 3 棕色(10YR4/4) シルト、炭化物含
- 4 黄褐色(7. ET25/9) 砂シルト
- 5 棕色(10YR4/6) 砂シルト含、炭化物含
- 6 灰褐色(7. ET25/9) 砂シルト、炭化物含
- 7 黄褐色(2. ET9/1) 砂土含、炭化物含



第32図 溝A011



第33図 溝A034

れる。

溝A089(第34・35図、図版18—4・5) A区東部で検出した。土坑A091の埋土を掘削し、土坑A031、ピットA090、溝A033に埋土を掘削される。西端を溝A033にきられるが、確認できる

範囲では、全長 6.4m 以上、幅 0.6 ~ 1.3m、深さ 0.1 ~ 0.45m である。東西にのび、東端で南へ屈曲する。横断面形は U 字状を呈する。上流からゆるやかに流された土壌により埋没したものと考えられる。水の流れの方向は、地形から、東から西と考えられる。遺物は、甕(92、93)、壺(95、96)、高杯(94)などの弥生土器が出土した。出土遺物より、弥生時代中期後半に所属すると考えられる。

**溝 A094**(第 34・35 図、図版 18—6) A 区東部で検出した。溝 A086 の埋土を掘削し、土坑 A040、A085、溝 A033 に埋土を掘削される。北端を土坑 A040、溝 A033 に、南端を土坑 A085、溝 A033 に、東側を A033 にきられるが、確認できる範囲では、全長 5.2m 以上、幅 0.8m 以上、深さ 0.5m である。A033 南北にのび、両端とも東側に屈曲する。横断面形は V 字状を呈する。上流からゆるやかに流された土壌により埋没したものと考えられる。遺物は、弥生土器の底部などが出土したが、図化できる遺物はなかったが、遺構の切り合いでより弥生時代中期後半に所属すると考えられる。

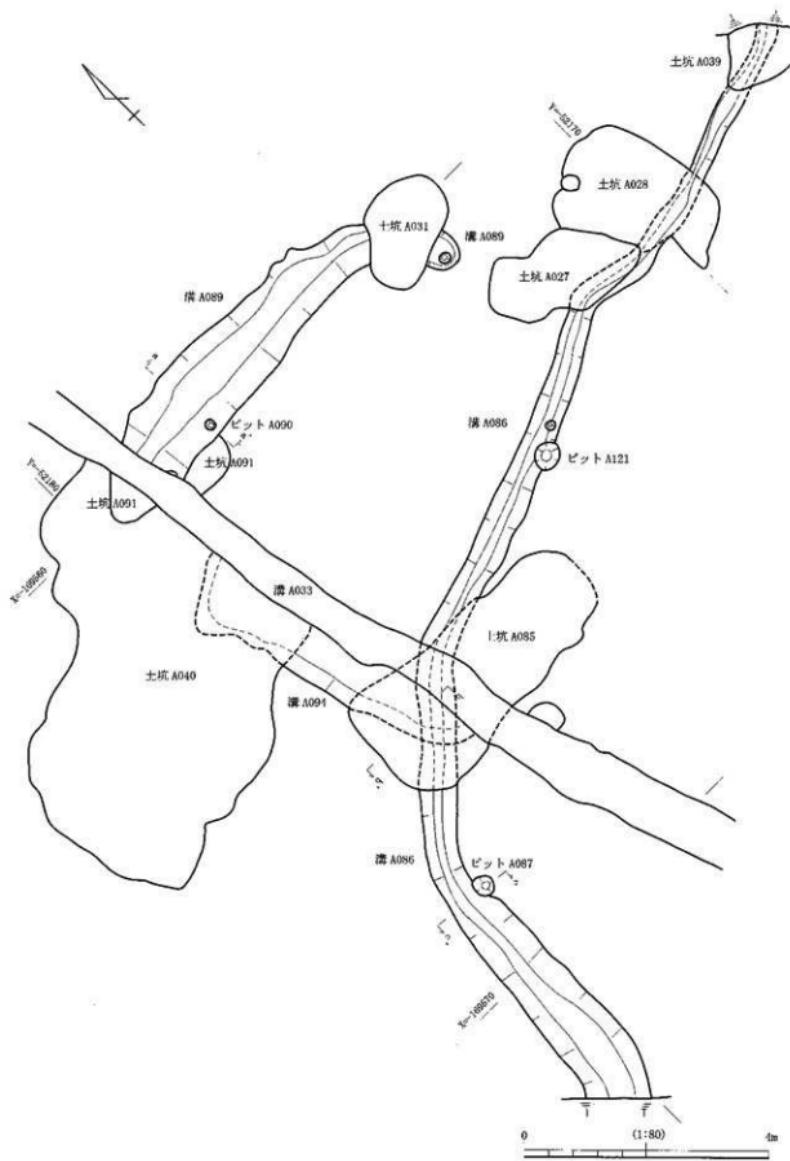
**溝 B017**(第 36 図) B 区南東部で検出した。両端とも調査区外となるが、確認できる範囲では、全長 1.7m 以上、幅 0.2 ~ 0.5m、深さ 0.05m で、東西にのびる。横断面形は U 字状を呈する。遺物は出土しなかった。

**溝 B018**(第 36 図) B 区南東部で検出した。両端とも調査区外となるが、確認できる範囲では、全長 1.1m 以上、幅 0.5m、深さ 0.1m で、北東から南西方向にのびる。北東よりの肩でピットを検出した。横断面形は U 字状を呈する。遺物は出土しなかった。

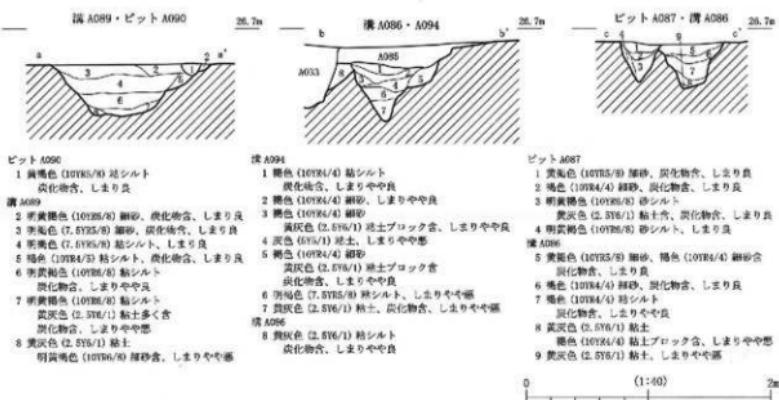
**溝 B019**(第 36 図) B 区南東部で検出した。両端とも調査区外となるが、確認できる範囲では、全長 1.1m 以上、幅 0.4m、深さ 0.15m で、北東から南西方向にのびる。横断面形は U 字状を呈する。遺物は出土しなかった。

**溝 B024**(第 37 図、図版 20—1) B 区南東部で検出した。竪穴住居 B026、溝 B025、B035 に埋土を掘削される。両端とも調査区外となるが、確認できる範囲では、全長 2.0m 以上、幅 0.8m、深さ 0.3m である。やや湾曲しながら東西にのびる。横断面形は U 字状を呈する。上流からゆるやかに流された土壌により埋没したものと考えられる。再掘削の痕跡はみとめられない。水の流れの方向は、地形から、東から西と考えられる。位置関係より、溝 A034 から連続する可能性もある。遺物は、弥生土器の底部などが出土したが、図化できる遺物はなかった。

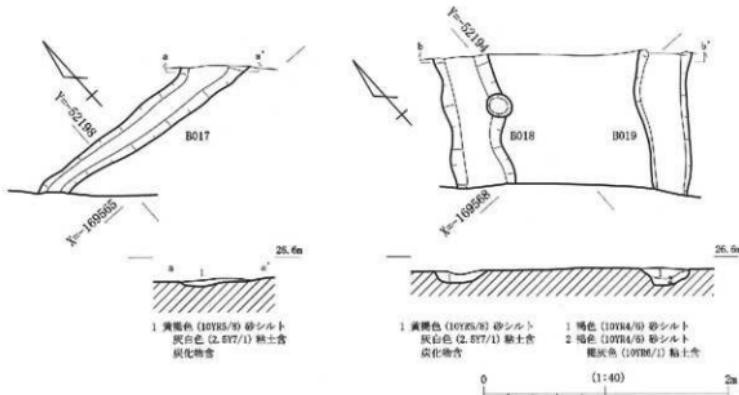
**溝 B025**(第 37 図、図版 20—2) B 区南東部で検出した。竪穴住居 B026、溝 B024 の埋土を掘削し、土坑 B023、溝 B035 に埋土を掘削される。両端とも調査区外となるが、確認できる範囲では、全長 1.0m 以上、幅 1.2m 以上、深さ 0.3 ~ 0.4m で、北東から南西方向にのびる。横断面形は U 字状を呈する。南北壁面の土層断面で、直径 0.1m の柱痕を確認した。上流からゆるやかに流された土壌により埋没したものと考えられる。水の流れの方向は、地形から、北東から南西と考えられる。位置関係より、溝 A086 から連続する可能性もある。遺物は、甕(99)などの弥生土器が出土した。出土遺物より、弥生時代中期後半に所属すると考えられる。なお、竪穴住居 B026 の項でも述べ



第34図 溝A086・A089・A094(1)



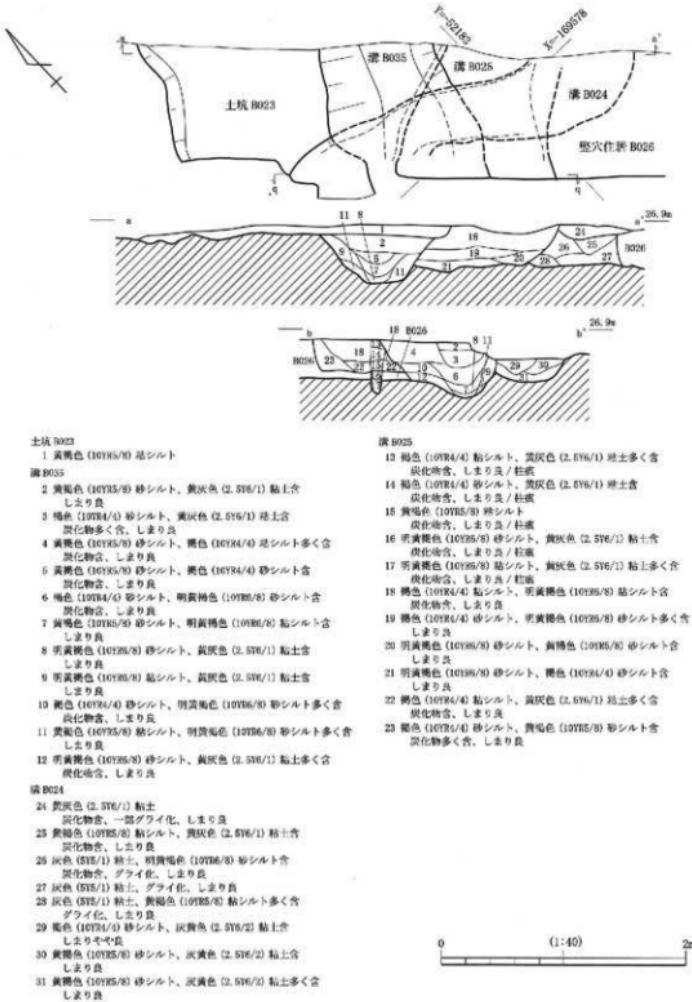
第35図 溝 A086・A089・A094(2)



第36図 溝 B017・B018・B019

たように、検出時点で B026、溝 B024、B035 と区別できなかったため、上層では他の遺構の遺物が混入している可能性がある。

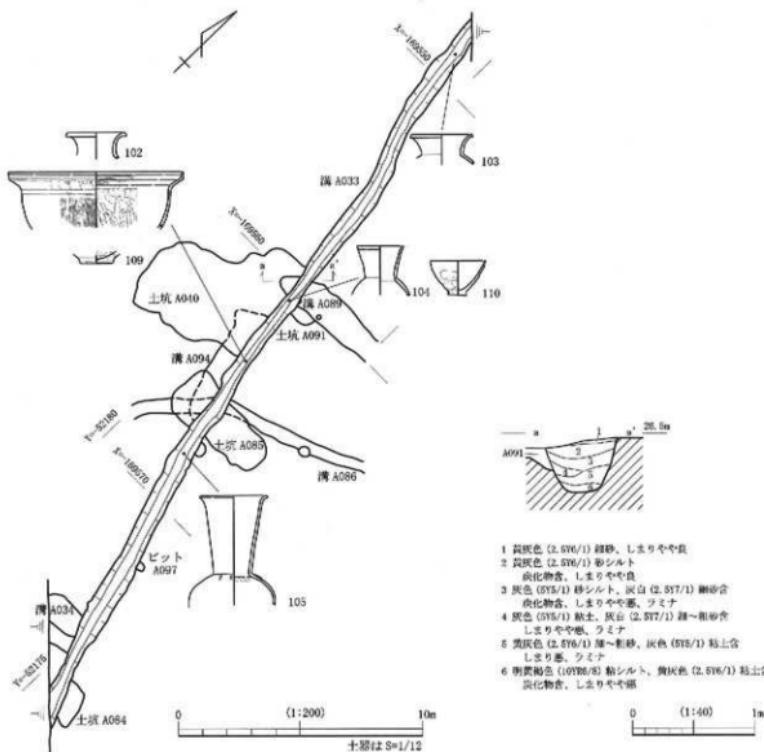
溝 B035(第37図、図版20-3・4) B区南東部で検出した。溝 B024、B025 の埋土を掘削し、上部に土坑 B023 の埋土が堆積する。両端とも調査区外となるが、確認できる範囲では、全長 1.0m 以上、幅 1.0~1.2m、深さ 0.4~0.45m で、北東から南西方向にのびる。横断面形は U字状を呈する。南西壁面の土層断面では 2 度、北東壁面の土層断面では 1 度の再掘削を行っているのが確認できる。上流からゆるやかに流された土による埋没と、埋没後の再掘削が繰り返されたものと考えられる。水の流れの方向は、地形から、北東から南西と考えられる。位置関係より、溝 A086 に連続する可能性もある。A086 では再掘削の痕跡がみとめられないが、B035 でも南北壁面と北東壁面で確認できる再掘削の回数が異なることから、可能性はあると考えられる。また、



第37図 溝B024・B025・B035

B023は、人為的に掘削された土坑ではなく、B035埋没過程での凹部への自然堆積である可能性もある。遺物は、弥生土器が出土したが、固化できる遺物はなかった。

溝A033(第38図、図版19) A区東部から南東部で検出した。土坑A040、A084、A085、A091、ピットA097、溝A034、A086、A089、A094の埋土を掘削する。両端とも調査区外へのびるが、確認できる範囲では、全長34m以上、幅0.6~1.0m、深さ0.45~0.55mである。A区内では南北に



第38図 溝A033

ほぼ直線的にのびるが、B区では検出されていないことから、南端付近で東へ屈曲するものと考えられる。横断面形はU字状を呈する。上流からゆるやかに流された土壌により埋没したものと考えられる。底面の標高は北側の方が0.1mほど高く、流れの方向は、北から南と考えられる。遺物は、甕、壺(102~107)、高杯(101)、鉢(109、110)などの弥生土器のほか、サヌカイト剥片が出土した。弥生時代中期後半に所属する高杯(101)のほかは、弥生時代後期中頃に所属するものである。また、いずれも最上層より出土しており、完形に近いものが多く含まれることから、ある程度埋没した段階で廃棄されたものと考えられる(図版19-4~7)。

**小結** 以上のように、第3面では、竪穴住居、土坑、ピット、溝を検出し、遺構内より、弥生時代中期後半および後期中頃の土器が出土した。竪穴住居3基のうち、特に、A048とB026の2基では、床面の張り直しを明瞭に確認することができた。また、3基すべてで、中央土坑の周辺を中心に薄い炭化物層を確認しており、植物性の敷物の痕跡である可能性も考えられる(正岡2008)。多数検出した土坑の機能については明らかにし得なかったが、土器や炭化物を含むも

のが多くみられる。炭化物は、腐食した有機物である可能性もあり、土坑の多くが最終的には廃棄土坑として用いられた可能性が考えられる。また、溝についても、環壕の可能性を指したA011の他は、堅穴住居より相対的に低い位置に設けられることから、排水の機能をもっていた可能性が考えられるが、断定はできない。

第3面で検出した遺構の時期についてみると、後期の土器が出上したのは溝A033のみで、切り合いから最も新しいと考えられる遺構である。また、第3面の遺構検出面の直上層である弥生時代中期から後期の包含層(基本層序第15・16層)から出土した土器の多くは中期後半に所属するものであり、後期に下るものは極めて少ない。さらに、溝A033の埋土は灰色系であるが、その他の遺構の埋土は黄褐色系である。以上より、出土遺物や切り合いから所属時期を確認できない遺構についても、溝A033以外の遺構はおむね中期後半に所属する可能性が高い。また、出土土器を概観すると、中期後半でも新しい段階のものが、比較的顕著である。したがって、調査区A区B区とも、南東側に、弥生時代中期後半の新しい段階を中心とした居住域が形成され、この時期の遺構の埋没後、後期中頃に溝A033の掘削が行われたと考えられる。また、溝A033はB区では検出されないこと、B区では包含層も含め弥生時代後期の土器が出土しなかったことより、後期の遺構はA区より北東側のみに存在したと考えられる。溝A033の機能は不明であるが、上流から流されてきたのではなく、廃棄された状態で土器が出土することから、近辺に後期中頃の居住域が存在することが推定できる。また、A区、B区とも、北東側ほど遺構が希薄となることから、水田など生産域である可能性が考えられた。そのため、生産域の有無を検討するため、B区で試料採取を行い、花粉・植物珪酸体分析および微細堆積層分析を実施した。こうした土地利用状況の検討については、分析結果と周辺遺跡の調査成果を踏まえて第6章で述べる。

## 第5節 下層確認調査(第6・39図、図版20—7・8)

基本層序第17層上面で検出した第3面の遺構は、調査区北東側ほど希薄になり、それとともに、第17層の粘性が強くなり、安定した面が確認できなくなった。このため、A区調査の際、全域にわたって第17層上面まで掘削する必要性の有無を判断するため、南東側で第3面の調査を終えた段階で、中央部に、下層の堆積状況と遺物の有無を確認するためのトレンチを設定した。この結果、第2面検出面である第14層は、弥生時代後期後半の遺物を含むものの、河川氾濫によって供給された堆積層であること、その直下に堆積する第17層以下の層は、砂礫を含み、面として安定せず、遺構はみられず遺物もほとんど含まないことが判明した。そのため、調査区北西部では、全域にわたる掘削は第2面遺構検出面である第14層上面までとし、以下については、部分的なトレンチ調査によって堆積状況および遺物の確認を行ふにとどめることとした。B区においても、同様の理由から、北西部では、全域にわたる掘削は第14層上面までの調査とし、南東側も含め、第14層以下の堆積状況および遺物の確認のためのトレンチ調査に切り替えて調査を進めることとした。

下層確認調査のトレーンチは、A区では、北西側に4箇所、B区では調査区全体に6箇所、計10箇所を設定した(第6図)。A区に設定したトレーンチをそれぞれA1T～A4T、B区に設定したトレーンチを

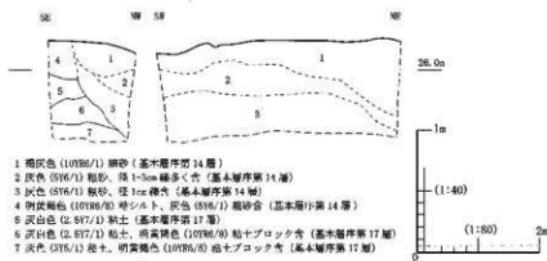
それぞれB1T～B6Tとする。ここでは、遺物を確認したトレーンチを中心に報告を行う。

A1TおよびA4Tでは、弥生土器が出土した。A1Tでは、シルト、細砂、粗砂からなる基本層序第14層0.2～0.8m、第17層0.5m以上が堆積する。第14層は、第17層を切り込み、南から北に向かって落ち込む(第39図)。A4Tでは、細砂、粗砂からなる第14層0.3～0.6m、灰色砂礫層および第17層0.5m以上が堆積する。第14層下面はほぼ水平である。遺物は、A1T、A4Tの第14層より、甕(128～130、u.i.5)、高杯(132、133)、鉢(131)、手縫(134)などの弥生土器が出土し、いずれも弥生時代後期後に位置づけられるものである。特に、第14層の中でも、灰色粗砂(第14c層)からの出土が多く、完形に近い状態で出土していることから、洪水堆積物と共に供給されたたるものと考えられる。

A2T、A3Tでは、粘土、細砂からなる第14層0.1～0.2m、第17層0.2～0.3m、第18層0.3m以上がほぼ水平に堆積する。B1TおよびB2Tでは、粘土、細砂からなる第14層0.2～0.4m、第17層0.5m以上がほぼ水平に堆積する。B3T、B4T、B5T、B6Tでは、第17層0.1～0.2m、第18層0.8m以上がほぼ水平に堆積する。遺物はA3Tの第14層およびB6Tの第17層より十器が出土したが、小片であり、時期は不明である。

以上より、A区の北西側では第14層が洪水堆積物からなることがわかる。また、現在も松尾川が流れる北西側からの堆積と考えられることから、旧河川からの堆積物と想定できる。したがって、弥生時代後期後に、北西側から河川氾濫がおこり、微地形に変化が引き起こされたものと考えられる。

なお、上層の基本層序第11層、第12層も、一連の洪水堆積物と考えられる。この2層は調査区中央部のやや西側に偏って堆積している。また、粘土層である第11層が調査区南北壁面、北東壁面とともにみとめられるのに対し、粗砂層である第12層は、南北壁面では明瞭でなく、北西側に偏って堆積する。したがって、第11層、第12層は、第14層、第17層とは異なり北方向から供給された堆積物であると考えられる。こうした堆積状況の確認は、寺田遺跡における土壤の形成過程と居住域の関係について考える重要な材料となる。これについては、土壤分析の結果もふまえ、第6章で述べる。



第39図 下層確認 A1T 土層図

## 第1節 土器

土器は、図化の可能なものから、遺構出土のものを優先的に選択し、出土遺構または包含層ごとに報告する。遺物番号は実測図掲載順の連番とし、写真のみ掲載したものについては、図版掲載順に「u. i.」を付した番号を連番で付す。法量、調整、色調、胎土などについては観察表で示し、ここでは特徴的なものを中心記載する。色調の表示にあたっては、『新版 標準土色帖』(小山・竹原 1997年版)を用いた。土器編年は、弥生時代中期については地村(1999)を参考とした。ここでは、地村の設定する第IV様式を中期後半と呼称し、第IV様式を細分した第1段階から第4段階の4区分を引用する。また、弥生時代後期後半から古墳時代前期については西村・池峯(2006)を、古墳時代中期から後期については田辺(1966)を、中世については中世上器研究会編(1995)を主に参考とした。

第1面検出遺構からは図化可能な遺物は出土しなかったため、第2面検出遺構出土土器から報告する。

## (1) 第2面検出遺構出土土器(第40図、図版21)

第2面検出の遺構からは、弥生土器と土師器が出土した。磨滅のため調整の不明なものが多い。

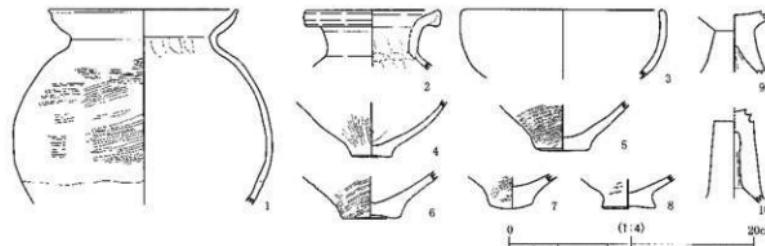
1は土坑A143から出土した。V様式系統の壺である。外面に右上がりのタタキを施し、体部下半に接合痕が明瞭にみとめられる。庄内式併行期に位置づけられる。

2～10、u. i. 1、u. i. 2は自然流路A142から出土した。9、10は上層から、他は下層からの出土である。2は広口短頸壺、3は高杯、4は壺の底部である。5～8は壺の底部で、外面に右上がりのタタキを施す。9、10は高杯である。u. i. 1、u. i. 2は口縁部の小片で、u. i. 1は複合口縁壺、u. i. 2は小型の壺である。2は弥生時代後期、5～9、u. i. 1、u. i. 2は弥生時代後期後半から庄内式併行期、10は古墳時代前期に位置づけられる。

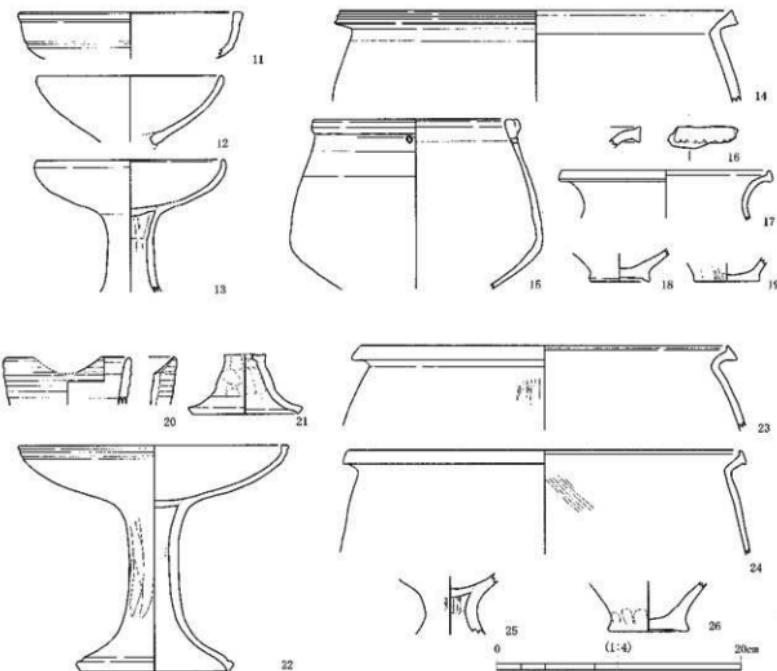
## (2) 第3面検出遺構出土土器

第3面検出の遺構からは、弥生土器が出土した。磨滅のため調整の不明なものが多い。

豊穴住居出土土器(第41図、図版22・23) 11～19、u. i. 3、u. i. 4は、豊穴住居A048から出土



第40図 土坑A143・自然流路A142出土土器



第41図 積穴住居A048・A015・B026出土土器

した。11および18は床上層より上層の埋上(第17図1層)から、16は床上層(第17図7層)から、u.i.3は中央上坑A206aから、12は溝A117から出土した。11～13は高杯である。11は、段状口縁壺に似た口縁部をもち、凹線文を施す。12、13は、円盤充填により成形する。14は大型の甕である。口縁端部は上下に肥厚し、端面に凹線文を施す。15は無頸壺である。貼り付けによる有段口縁をもち、口縁部に焼成前穿孔を施す。16は広口壺である。口縁下部に刻目を施す。17は広口短頸壺、18、19は底部である。u.i.3、u.i.4は口縁部の小片で、いずれも凹線文を施す。u.i.3は高杯、u.i.4は直口壺の可能性がある。18、19の詳細な時期比定は困難であるが、他は中期後半に位置づけられ、11、14は、第3段階以降と考えられる。

20～22は、積穴住居A015から出土した。20は水差で、口縁部に凹線文を施す。21は甕蓋で、裾部の内外面にススが付着する。22は高杯で、口縁部に凹線文を施す。円盤充填により成形する。21の詳細な時期比定は困難であるが、20、22は、中期後半の第2段階以降に位置づけられる。

23～26は、積穴住居B026から出土した。23、24は大型の甕で、口縁端部は上下に肥厚する。25は高杯で、円盤充填により成形する。26は底部である。23、24は、中期後半の第3段階以降に位置づけられる。

上坑出土上器(第42～45図、岡版24～27) 27～38は土坑A012から出土した。27は大型の鉢である。体部は明瞭に屈曲し、屈曲部に凹線文を施す。貼り付けによる有段口縁をもつ。28～34は甕である。29、33は大型、32、34は小型である。33は、口縁端部が上下に肥厚する。35は広口短頸壺で、頸部に櫛描直線文と櫛描波状文を施す。36は高杯で、円盤充填により成形する。37、38は底部である。38は、焼成後穿孔を施す。37、38の詳細な時期比定は困難であるが、他は32、35をのぞき中期後半に位置づけられ、33は、第3段階以降と考えられる。

39～45は土坑A016から出土した。42、44は、落ち込み内からの出土で、44は、土坑A012出土土器と接合した。39、40は底部である。41は鉢である。貼り付けによる有段口縁をもち、櫛描簾状文と櫛齒刺突文を施す。42～44は甕である。42、44は、口縁端部が上方にやや肥厚する。45は、広口短頸壺である。39、40の詳細な時期比定は困難であるが、他は中期後半に位置づけられる。

46は土坑A024から出土した。広口短頸壺である。磨滅が著しいが、口縁端部に櫛描簾状文と思われる痕跡がわずかにみとめられる。中期後半に位置づけられる。

47～49は、土坑A025から出土した。49は底部直上の出土である。47、48は広口短頸壺である。48は、口縁端部に櫛描簾状文と円形浮文を施す。頸部にも櫛描簾状文がみとめられるが、磨滅が著しく、不明瞭である。49は大型の甕で、口縁部端は上下に肥厚する。いずれも中期後半に位置づけられ、49は、第3段階以降と考えられる。

50、51は土坑A032から出土した。50は小型の甕、51は高杯の脚部である。両者とも中期後半に位置づけられる。

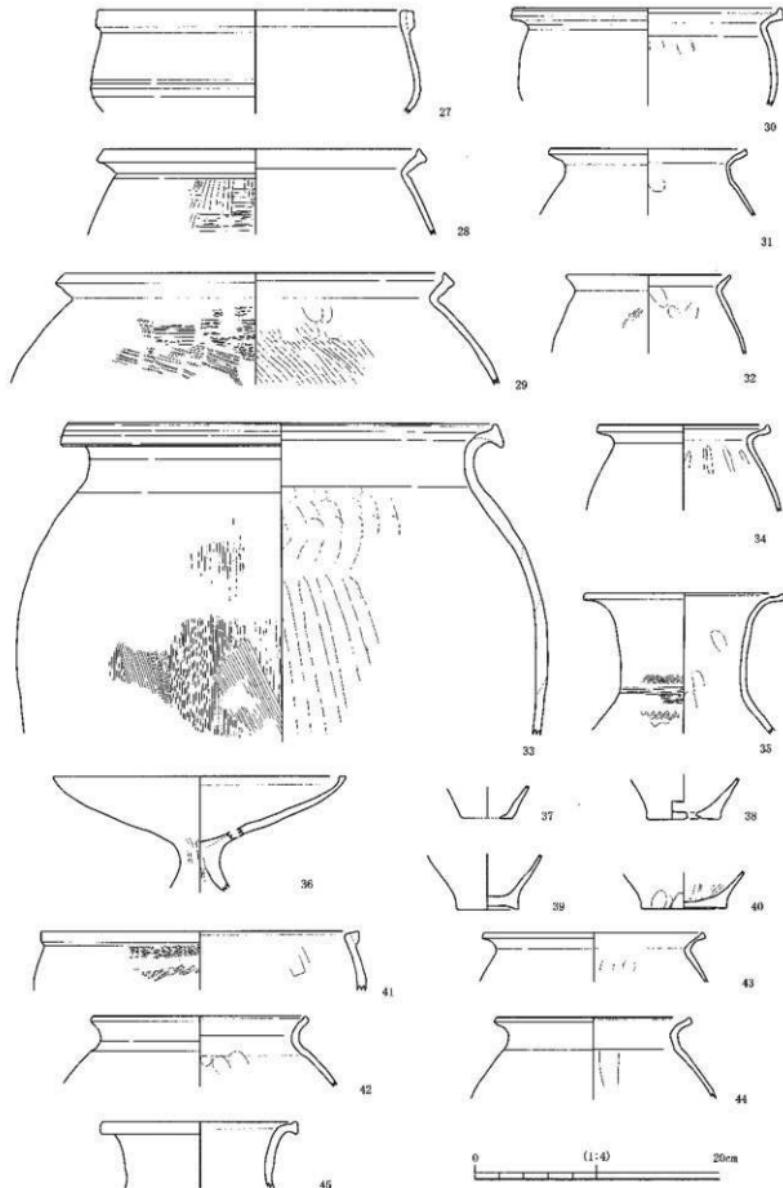
52～59は土坑A085から出土した。55、58、59は、底部直上の出土である。52～55は甕で、54、55は大型である。52～54は、口縁端部が上方に肥厚し、55は、口縁端部が上下に肥厚する。56、57は広口短頸壺である。58、59は高杯である。59は大型である。いずれも中期後半に位置づけられ、55は第3段階以降と考えられる。

60は、土坑A030から出土した。広口短頸壺である。中期後半に位置づけられる。

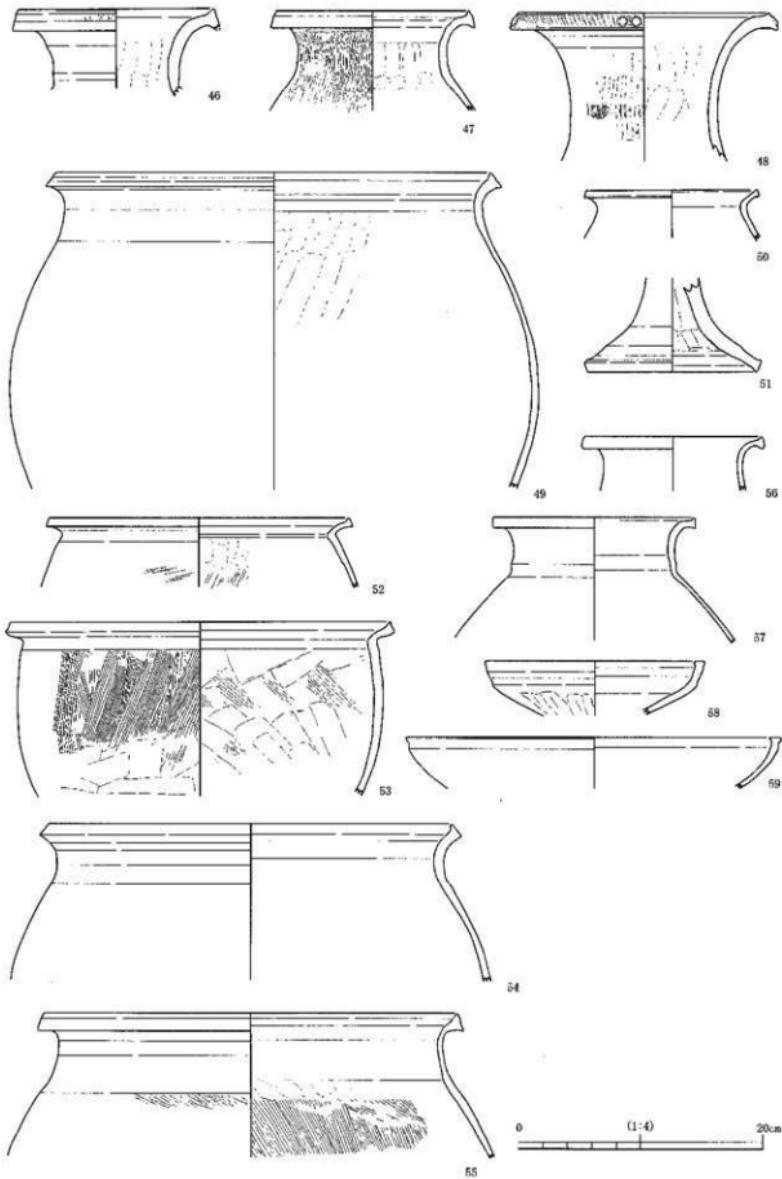
61～63は、土坑A031から出土した。61は、高杯である。口縁部に凹線文を施す。62、63は広口短頸壺で、口縁端部に凹線文を施す。いずれも中期後半に位置づけられ、62、63は第2段階以降と考えられる。

64～68は、土坑A035から出土した。64、65は甕である。64は生駒西麓産の胎土で、口縁端部が下方に伸びる。65は大型で、口縁端部は上下に肥厚する。66は高杯である。段状口縁壺に似た口縁部をもち、屈曲部に凹線文を施す。67は広口甕、68はミニチュアの甕である。68の詳細な時期比定は困難であるが、他は中期後半に位置づけられ、65、66は、第3段階以降と考えられる。

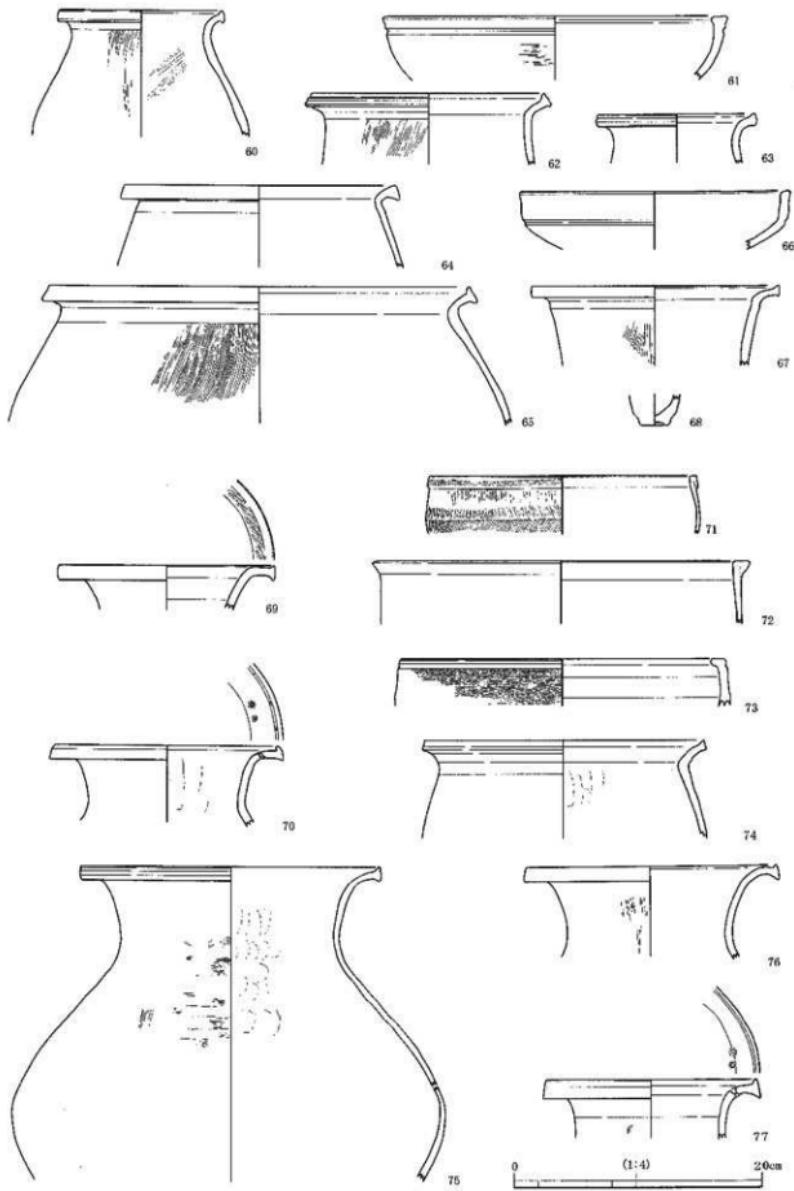
69～74は、土坑A040から出土した。69は、広口甕である。口縁部内面に櫛齒刺突文を施す。70は広口短頸壺で、口縁部に焼成前穿孔を施す。71、72は鉢である。71は、有段口縁をもち、



第42図 土坑A012・A016出土土器



第43図 土坑A024・A025・A032・A085出土土器



第44図 土坑A030・A031・A035・A040・A045・A049・A084出土土器

体部の屈曲はやや緩やかである。口縁部および屈曲部に櫛歯刺突文を施す。72は、断面三角形の有段口縁をもつ。73は、段状口縁壺である。口縁部に櫛描波状文を施す。74は甕である。いずれも中期後半に位置づけられる。

75は、土坑A045から出土した。広口短頸壺である。口縁端部に凹線文を施す。磨滅が著しいが、頸部から体部に櫛描波状文と櫛描直線文がみとめられる。中期後半に位置づけられる。

76は、土坑A049から出土した。広口短頸壺である。中期後半に位置づけられる。

77は、土坑A084から出土した。広口短頸壺である。口縁部に焼成前穿孔を施す。中期後半に位置づけられる。

78~82は、土坑A092から出土した。78、79は広口短頸壺である。79は口縁端部と頸部に櫛描簾状文を施す。80は甕で、口縁端部は上下に肥厚する。81、82は鉢である。81は、貼り付けによる有段口縁をもち、口縁下部に櫛描簾状文と櫛歯刺突文を施す。82は、断面三角形の有段口縁をもち、屈曲部に凹線文を施す。いずれも中期後半に位置づけられる。

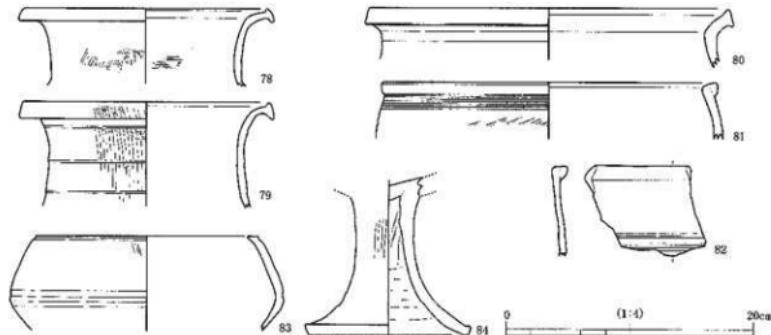
83は、土坑B027から出土した鉢である。口縁部と屈曲部に凹線文を施す。中期後半に位置づけられる。

ピット出土土器(第45図、図版27) 84はピットA059から出土した高杯脚部である。中期に位置づけられる。

溝出土土器(第46・47図、図版28~30) 85、86は、溝A011上層から出土した。85は広口壺で、生駒西麓産の胎土である。口縁端部は垂直に垂下し、櫛描簾状文と刺突文を施すが、磨滅が著しく不明瞭である。86は大型の高杯で、円盤充填により成形する。両者とも中期後半に位置づけられる。

87、88は、溝A034から出土した。87は大型の直口壺、88は大型の水差で、両者とも口縁部に凹線文を施す。両者とも中期後半第2段階以降に位置づけられる。

89~91は、溝A086から出土した。89は高杯の脚部である。90は小型の鉢で、ほぼ完形である。



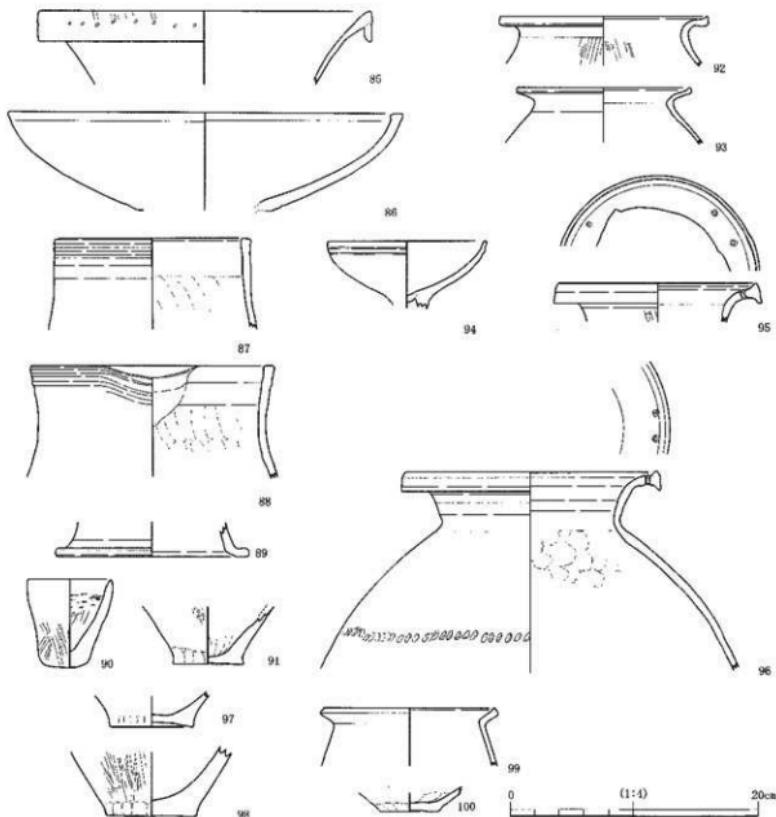
第45図 土坑A092・B027・ピットA059出土土器

91は甕の底部である。89は中期後半に位置づけられる。

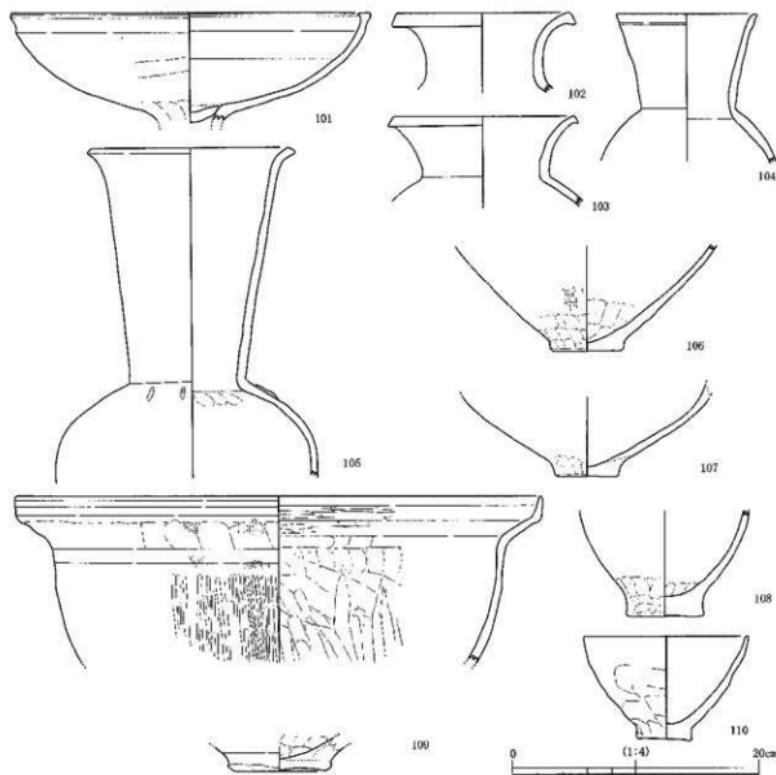
92～98は、溝A089から出土した。92、93は小型の甕で、口縁端部が上方へ肥厚する。94は、小型の高杯で、口縁部に凹線文を施す。円盤充填により成形する。95は広口甕、96は広口短頸甕である。95は、口縁部に2孔1組となる2組の焼成前穿孔を施す。96は、口縁部に焼成前穿孔2孔を、体部に列点文を施す。97、98は底部である。97、98の詳細な時期比定は困難であるが、他は中期後半に位置づけられる。

99、100は、溝B025から出土した。99は小型の甕である。100は底部で、生駒西麓産の胎土である。99は中期後半に位置づけられる。

101～110は、溝A033上層から出土した。101は大型の高杯である。円盤充填により成形する。102、103は広口短頸甕、104、105は長頸甕である。105は肩部に浮文を施す。106～108は、底部で、



第46図 溝A11・A034・A086・A089・B025出土土器

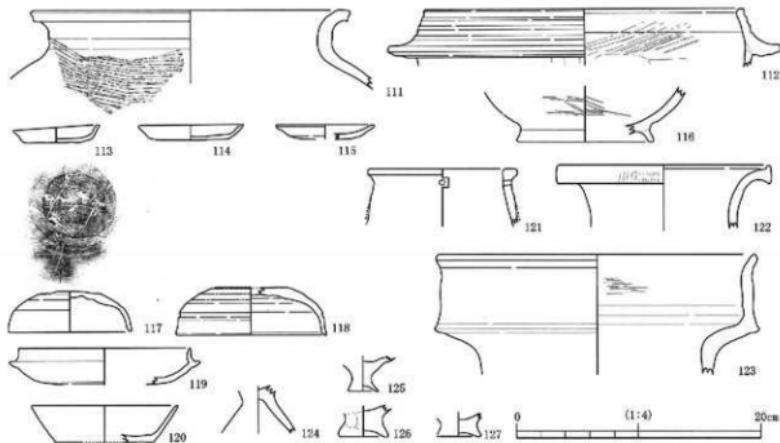


第47図 溝A033出土土器

106、107は大型の壺と考えられる。109は大型の鉢である。110は小型の鉢で、ほぼ完形である。101は中期後半に、その他は後期中頃に位置づけられる。

### (3) 包含層出土の遺物

**基本層序第6～8層出土土器(第48図、図版31-1)** 111～116は、基本層序第6層～第8層から出土した。111、112は瓦質土器である。111は甕で、口縁部の断面形は方形を呈する。112は釜で、口縁部は内傾し、頸部の段成形は凹線状である。外面にヘラケズリがみとめられる。113、114は土師質土器の皿である。115は瓦器皿、116は瓦器碗である。116は内外面にミガキがみとめられ、高台の断面形は方形である。116は12世紀、111は14世紀、112は15世紀に位置づけられる。なお、図化を行っていない基本層序第4層、第5層、第9層出土遺物も含め、基本層序第4層～第9層の出土遺物は、弥生土器や古墳時代の須恵器なども混入するが、12世紀から15世紀の土器を多く含む。したがって、基本層序第4層～第9層は中世、12世紀から15



第48図 包含層出土土器(1)

世紀を主体とする遺物包含層と考えられる。なお、層による時期差はみとめられない。

**基本層序第10層出土土器(第48図、図版31-2)** 117~120は、基本層序第10層から出土した。117、118は須恵器杯蓋である。117はヘラ記号がみとめられる。119、120は須恵器杯身である。118はTK43に、117、119はTK209~TK217に位置づけられる。120の詳細な時期比定は困難であるが、基本層序第10層は、古墳時代後期から飛鳥時代を主体とする遺物包含層と考えられる。

**基本層序第11~12層出土土器(第48図、図版31-2、図版33-1)** 121~127は基本層序第11層、第12層から出土した。121、122、126は第11層、123~125、127は第12層からの出土である。

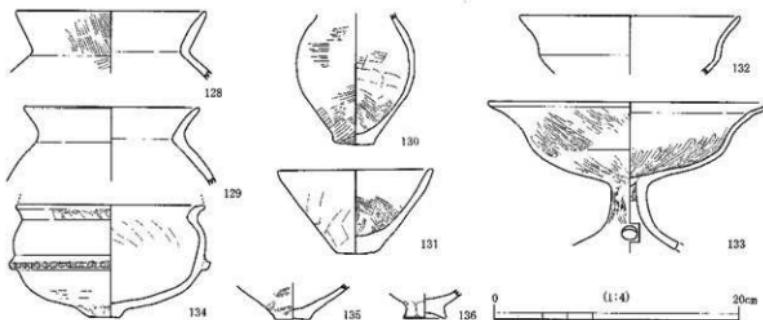
121、122は弥生土器である。121は無頸壺である。有段口縁をもち、口縁部に焼成前穿孔を施す。122は広口短頸壺である。磨滅により不明瞭であるが、口縁端部に、簾状文を施すようである。121、122とも、中期後半に位置づけられる。

123~127は土師器である。123は複合口縁壺、124は高杯脚部、125~127は製塙土器の脚台である。123~127の詳細な時期比定は困難であるが、庄内式並行期から古墳時代前期におさまるものと考えられる。

以上より、基本層序第11層、第12層は、弥生時代中期の土器も混入するものの、庄内式併行期から古墳時代前期を主体とする包含層と考えられる。

**基本層序第14層出土土器(第49図、図版32)** 128~136、u.i.5は、下層確認調査により、A1T、A4Tの基本層序第14層から出土した。いずれも弥生土器である。

128~130、u.i.5は甕である。130は非常に小型である。131は小型の鉢である。132、133は高杯である。133は透かし4孔を有し、相対する2孔を1組として異なる高さに施す。134は手

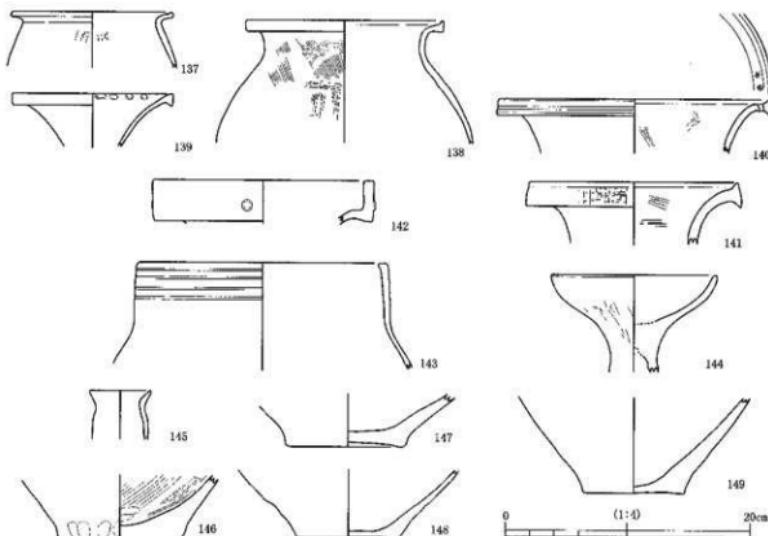


第49図 包含層出土土器(2)

焙である。口縁部の約60%に、覆い部の剥離痕がみとめられる。体部中央に突帯を貼り付け、刻目を施す。135、136は底部である。いずれも後期に位置づけられ、128～134は後期後半と考えられる。以上より、基本層序第14層は、弥生時代後期後半の遺物包含層と考えられる。

基本層序第15、16層出土土器(第50図、図版33) 137～149は、基本層序第15層、第16層から出土した。138～140、142、144～146、149は第15層から、137、141、143、147、148は第16層からの出土で、いずれも弥生土器である。

137、138は、甕である。137は小型である。138は口縁端部が上方へ肥厚する。139は広口壺で、



第50図 包含層出土土器(3)

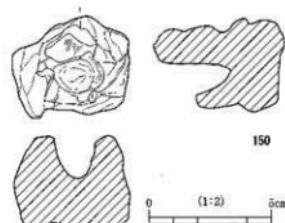
生駒西麓産の胎土である。口縁端部はやや垂下し、内面に円形浮文を施す。140、141は広口短頸壺である。140は口縁部に焼成前穿孔を有し、141は口縁端部に櫛描簾状文を施す。142は段状口縁壺で、口縁部に円形浮文を施す。143は直口壺で、口縁部に凹線文を施す。144は小型の高杯、145はミニチュアの鉢、146～149は底部である。145～149の詳細な時期比定は困難であるが、他は中期後半に位置づけられる。また、図示できなかったが、弥生時代後期に位置づけられる土器も、少量ながら出土している。以上より、基本層序第15層、第16層は、弥生時代中期後半から後期の包含層と考えられる。

## 第2節 粘土塊(第51図、図版34—1)

粘土塊は、小片も含めると計49点が、包含層および第3面遺構内から出土した。ここでは、黒色化しており被熱を受けたと考えられるものや、加工の痕跡がみとめられるものなど特徴的なもの、遺構から出土したものを中心と報告する。遺物の番号は、土器と同様、実測図順の連番、または図版掲載順に「u.i.」を付した連番を土器番号に連続して付す。法量、色調については観察表で示す。

150、u.i.10～u.i.13は基本層序第16層から、u.i.6は、基本層序第6層～第8層から、u.i.7は、基本層序第15層から、u.i.8は土坑A085から、u.i.9は竪穴住居A048内の土坑A103から出土した。150は、図の上面に擦痕がみとめられ、深さ1.7cmの窪みをもつ。窪みの法量、形状より、指跡の可能性が考えられる。u.i.6は、一部黒色化し、幅0.6cmの断面形がU字状の溝1条がみとめられる。u.i.7は、出土した粘土塊の中で最大的もので、やや湾曲し、内側の面が黒色化する。u.i.10は、全体に黒色化する。u.i.11は、2面が平滑になり、他の粘土塊と比べて軟質である。u.i.12は、一部黒色化する。u.i.13は、ナデによる幅2.5cmの凹みがみとめられる。

以上9点のほかは、u.i.6と共に基本層序第6層～第8層から出土した3点を除くと、いずれも基本層序第15層または第16層からの出土である。したがって、中世の遺物包含層に混入したものもあるものの、粘土塊の所属時期は、おおむね弥生時代中期から後期に位置づけてよいと考えられる。また、u.i.7と同様、やや湾曲し、その内側の面が黒色化するものが報告外のものに2点みとめられる。粘土塊の性格については断定できないが、ナデや凹みなどが確認されるものについては、上器製作などに関わるものである可能性が考えられる。黒色化したものについても、人為的に焼かれた可能性がある。



第51図 粘土塊

## 第3節 石器(第52～54図、図版34—2、図版35～38)

石器は、打製石鎌、スクレイパーなどの打製石器や、石庖丁、磨製石斧などの磨製石器、敲石、

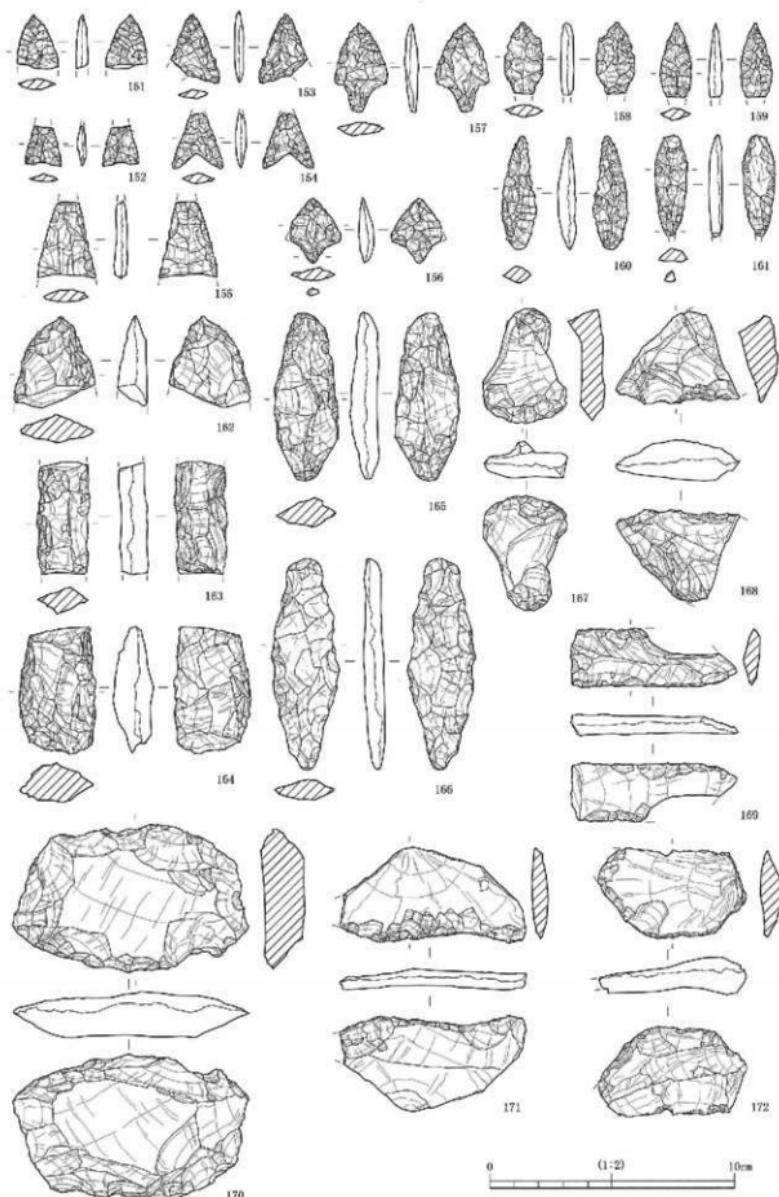
砥石などが出土した。また、サヌカイト剥片も出土している。いずれも包含層および第3面遺構内からの出土である。このうち、加工や使用の明らかな35点を図化したほか、サヌカイトを素材とする楔、RF、剥片などについては写真のみ示す。遺物の番号は、土器、粘土塊と同様、実測図順の連番、または図版掲載順に「u. i.」を付した連番を粘土塊の番号に連続して付す。色調、法量は観察表で示す。なお、便宜的に、図の左面または上面を表面、図の右面または下面を裏面と呼称する場合がある。

151～160は打製石鎌である。いずれもサヌカイトを素材とする。151は基部を欠損する。調整剥離は基部側から先端部側の順に施す。土坑A092から出土した。152は先端部を欠損する。凹基無茎で、基部の抉りは浅い。裏面の調整剥離はやや粗い。基部の調整剥離を最後に施す。基本層序第15層からの出土である。法量および形態より、縄文時代に所属する可能性がある。153は基部の一端を欠損する。凹基無茎で、基部の抉りは深い。側縁は鋸歯状である。土坑A035から出土した。154は、先端部を欠損する。凹基無茎で、基部の抉りはやや深い。基部の調整剥離を最後に施す。基本層序第6～8層から出土した。155は先端部、基部を欠損する。両面の右側縁の他は、調整剥離が粗い。竪穴住居A048の床上層(第17図7層)から出土した。156は側縁の一方を欠損する。有茎で、有舌尖頭器に似た形状である。左右はやや非対象でいびつな形状であり、再加工が施された可能性もある。全体に風化が激しく、淡灰色を呈する。風化度合いおよび形状より、縄文時代に所属すると考えられ、草創期のものである可能性もある。竪穴住居A048の床上層(第17図7層)から出土した。157は完形、有茎である。基部の調整剥離を最後に施す。竪穴住居A048内の土坑A206Aから出土した。158は基部を欠損する。有茎である。左右はやや非対象で、調整剥離はやや粗い。竪穴住居A048内の溝A100から出土した。159は基部を欠損する。凸基と考えられる。調整剥離は、概ね基部側から先端部側の順に施す。基本層序第15層から出土した。160は完形、凸基である。左右は非対象であるが、調整剥離は比較的細かい。竪穴住居A048の床上層を覆う埋土(第17図1層)から出土した。

161は打製石錐である。サヌカイトを素材とする。先端部を欠損する。表面に細かい調整剥離を施す。使用痕は確認できない。風化はやや著しい。基本層序第11層から出土した。

162～164は打製石剣である。いずれもサヌカイトを素材とする。162は基部を欠損する。左右はやや非対称で、調整剥離は粗い。未成品の可能性も考えられる。土坑A040から出土した。163は先端部、基部を欠損する。幅が狭く、小型と考えられる。両面の左側縁の他は、調整剥離が粗い。基本層序第10層から出土した。164は先端部、基部を欠損する。両端とも折損しており、未成品の可能性が高い。土坑A016の落ち込み内から出土した。

165、166は打製石器の未成品と考えられるものである。サヌカイトを素材とする。165は、欠損はみとめられないが、先端部が尖っていない。小型打製尖頭器の未成品と考えられる。基本層序第15層から出土した。166は磨滅が著しいが、欠損はみとめられない。調整剥離は非常に粗く、未成品の可能性が高い。打製尖頭器の可能性があるが、断定はできない。風化が激しく、淡灰色



第52図 石器(1)

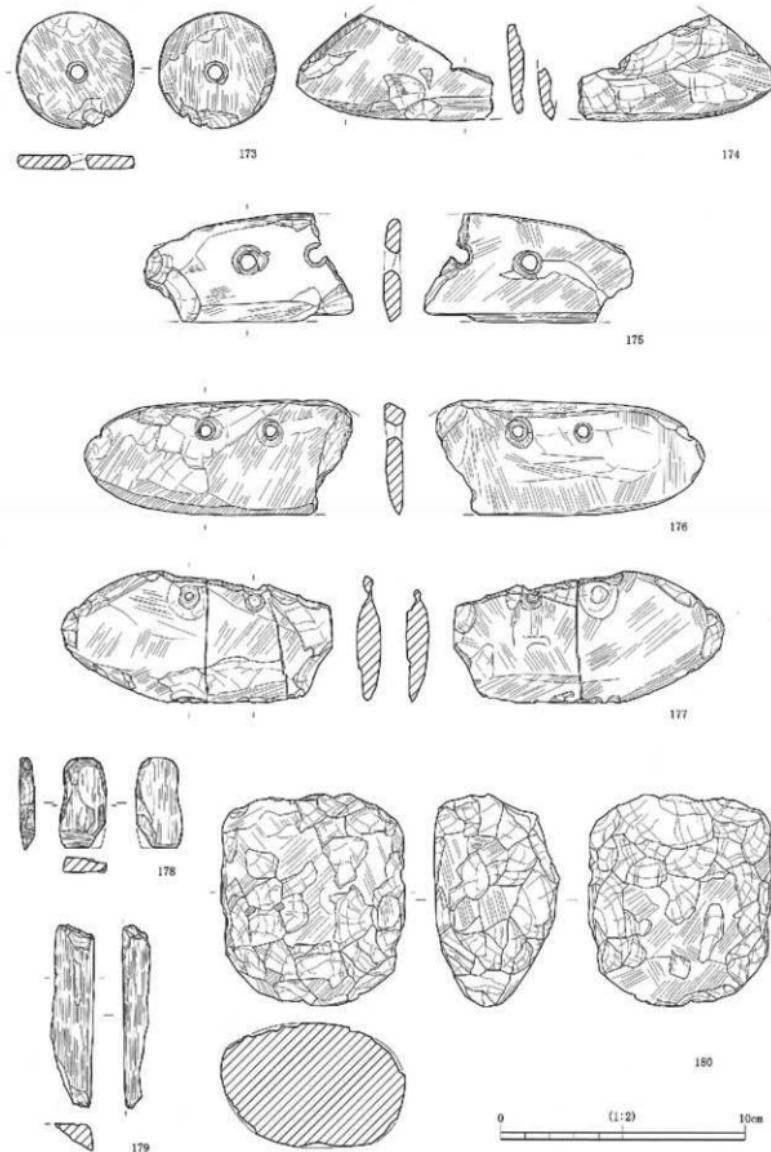
を呈する。土坑 A092 から出土した。全体に著しくローリングを受けているが、同一遺構から出土した他の遺物にはローリングがみとめられないことから、埋没以前に受けたものと考えられる。風化の度合いから縄文時代に所属する可能性も考えられる。

167～172 はスクレイパーである。いずれもサヌカイトを素材とする。167 は右側面が折れ面であるが、完形の可能性がある。背部に自然面が残存する。下側縁に粗い調整剥離を施し、刃状となるためスクレイパーとしたが、上下端に潰れがみとめられることから、楔の可能性もある。土坑 A092 から出土した。168 は一端を欠損する。刃部と背部に粗い調整剥離を施し、背部に自然面が残存する。明確な使用痕は確認できない。竪穴住居 A048 の床上層を覆う埋土(第 17 図 1 層)から出土した。169 は一部欠損する。刃部と背部に調整剥離を施し、主剥離面を大きく残す。側面に自然面が残存する。明確な使用痕は確認できない。基本層序第 10 層から出土した。170 は、完形である。全局に粗い調整剥離を施す。明確な使用痕は確認できない。厚みが大きく、刃部の角度も大きいことから、未成品の可能性もある。土坑 A032 から出土した。171 は一端を欠損する。自然面を打面とする剥片を素材とし、刃部のみ調整剥離を施す。主剥離面を大きく残し、背部に自然面が残存する。明確な使用痕は確認できない。溝 A011 上層から出土した。172 は一端を欠損する。自然面を打面とする剥片を素材とし、刃部と背部の一部に調整剥離を施す。背部に自然面が残存する。刃部の微細剥離は使用痕の可能性もある。竪穴住居 A048 の床上層を覆う埋土(第 17 図 1 層)から出土した。

173 は磨製紡錘車である。片岩を素材とする。一部を欠損する。研磨を施さない箇所があり、一部に調整剥離痕が残存する。側面は全体に研磨を施す。穿孔は両面からの回転穿孔による。明確な使用痕は確認できない。竪穴住居 A048 の床上層(第 17 図第 7 層)から出土した。

174～177 は磨製石庖丁である。いずれも片岩を素材とする。174、175 は直線刃半月形、176、177 は杏仁形である。174 は、2/3 を欠損し、端部のみである。凹部は研磨を施さない箇所があり、調整剥離痕が残存する。刃部は、中央側の欠損部付近では両刃となり、使用により部分的に内湾しているのが確認できる。端部側では刃部を形成せず、平坦面となる。基本層序第 16 層から出土した。175 は、1/2 を欠損する。全面に研磨を施し、刃部は両刃である。穿孔は両面からの回転穿孔によっており、孔周辺に紐ずれによる擦痕がみとめられる。土坑 A040 から出土した。176 は、1/4 を欠損する。研磨を施す範囲が部分的で、自然面や剥離面が残存する。刃部は片刃であるが、裏面にもわずかに刃がつけられる。穿孔は両面からの回転穿孔によっており、孔周辺に紐ずれによる擦痕がみとめられる。基本層序第 15 層から出土した。177 は、研磨を施す範囲が部分的で、凹部や刃部、背部の一部には調整剥離痕が残存する。刃部は両刃である。穿孔は両面からの回転穿孔によるが、2 孔とも貫通していない。未成品と考えられる。基本層序第 10 層から出土した。

178～180 は磨製石斧である。178 は、小型の扁平片刃石斧である。片岩を素材とする。刃部の一部を欠損する。凹部は研磨を施さない箇所があり、調整剥離痕が残存する。竪穴住居 A048 の床上層を覆う埋土(第 17 図 1 層)から出土した。179 は、柱状片刃石斧である。片岩を素材と

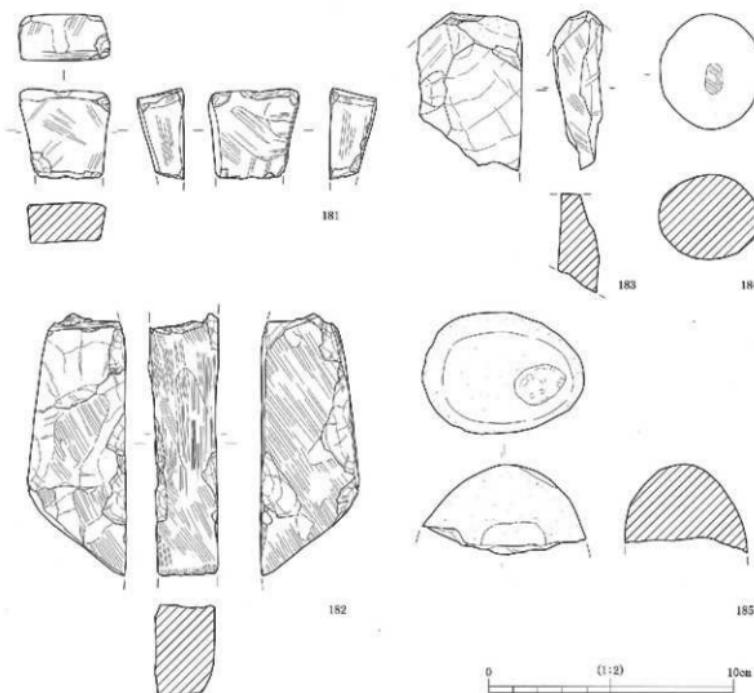


第53図 石器(2)

する。刃部、基部とも欠損する小片である。全面に研磨を施す。土坑 A016 から出土した。180 は、大型蛤刀石斧である。閃綠岩を素材とする。刃部、基部とも欠損する。風化により表面の剥離が著しいが、全面に研磨を施していたようである。欠損部は両端ともやや平らになり、不明瞭だが擦痕がみとめられる。欠損部を磨石などに転用した可能性が考えられる。竪穴住居 A015 内のピット A134 から出土した。

なお、石庵丁(174～177)、扁平片刃石斧(178)については、肉眼観察のみでなく、実体顕微鏡と金属顕微鏡による観察も行ったが、刃部に線状痕や光沢を確認することはできなかった。174～176 では、刃部の内湾や孔部の紐ずれ痕が肉眼でも確認できることから、未使用ではなく、片岩という石材の特性により確認できなかったものと考えられる。

181～183 は砥石である。181 は細粒の砂岩を素材とする。一端を欠損する。形状は平たい直方体で、残存するすべての面、計 5 面を砥面として使用する。断面形が V 字状となる線状痕がみとめられる。基本層序第 6 層～第 8 層から出土した。中世の包含層から出土していること、細粒砂岩であること、直方体を呈することより、中世に所属する可能性が高い。182 は、片岩を素材



第 54 図 石器(3)

とする。両端を欠損する。形状はややいびつな直方体である。残存する4面のうち、3面に擦痕がみとめられる。図の中央の面では全体に擦痕がみとめられ、断面形がU字形の浅い溝もあることから、砥面として使用したと考えられる。左右の面では擦痕が部分的で、方向も面に対して斜め方向となり、面が外側に湾曲する。したがって、左右の面は砥面ではなく、擦痕は研磨加工を施した痕跡と考えられる。形状、石材より、柱状片刃石斧またはその未成品を砥石に転用した可能性が考えられる。基本層序第15層から出土した。183は、中粒の砂岩を素材とする。左右両端と下端の面を欠損する。上面に擦痕がみとめられ、砥面として使用したと考えられる。下面もやや滑らかになるが、明確な擦痕はみとめられない。自然面が残存する。土坑A012から出土した。

184は、完形の磨石である。中粒の砂岩を素材とする。上面中央部が滑らかとなり、わずかに擦痕がみとめられる。全体に球状を呈することから、他の部分も使用された可能性があるが、表面の剥離が著しく、明確な使用痕は確認できない。竪穴住居A048内の溝A117から出土した。185は、敲石である。火山岩を素材とする。一端を欠損する。上端部に敲打痕がみとめられ、敲石として使用されたと考えられる。上面の一部にも滑らかになる部分がみとめられる。擦痕は確認できないが、磨石としても使用した可能性が考えられる。基本層序第10層から出土した。

u.i.14～u.i.24は、いずれもサヌカイトを素材とする剥片またはRFである。サヌカイト剥片は、ここで報告したもの以外に計226点、総重量738.4gが出土した。ここでは、加工または使用の痕跡がみとめられるもの、第3面検出遺構から出土したものを中心に、11点を報告する。

u.i.23は、明確な加工、使用痕跡がみとめられないが、他10点は何らかの加工を施されたものまたは使用されたと考えられるものである。u.i.14は基本層序第10層から、u.i.15、u.i.19、u.i.22、u.i.24は基本層序第15層から出土した。u.i.16～u.i.18、u.i.23は竪穴住居A048出上で、u.i.16は床上層(第17図7層)、u.i.23は土坑A206aからの出土である。u.i.20は土坑A016の落ち込み内、u.i.21は土坑A025から出土した。

u.i.14、u.i.19、u.i.20、u.i.23、u.i.24は自然面が残存する。u.i.15、u.i.17、u.i.18、u.i.21、u.i.22は、一端または両端に潰れがみとめられ、u.i.21は階段状剥離が顕著である。したがって、楔として使用された可能性が考えられる。u.i.14、u.i.16、u.i.19、u.i.20、u.i.24は、縁辺の一部に連続する調整剥離を施す。

以上のうち、縄文時代に所属する打製石器(152、156)、中世に所属する砥石(181)をのぞくと、いずれも弥生時代に所属すると考えて差し支えないものである。特に、打製石器のうち有茎のもの(157、158)、凸基のもの(159、160)については、中期に位置づけられる。したがって、詳細な時期決定の困難なものも含め、第3面検出遺構の多くが所属する弥生時代中期後半のものである可能性が高い。

## はじめに

松尾川右岸に位置する寺田遺跡調査区では弥生時代中期から後期の遺構面が確認されているが、調査区中央部の凹地の領域では遺構が確認されないため、当時の土地利用状況について不明な点が多い。そこで、今回の分析調査では、調査区中央部の弥生時代中期から後期の土地利用状況に関する情報を得ることを目的として、X線写真・土壤薄片による堆積物微細形態学的検討を行い、同時に花粉・植物珪酸体分析を実施する。なお、考古遺跡における堆積物・土壤の形成過程、特に遺構の形成・埋没過程の検討では内眼観察では確認できない情報も多く、X線写真を用いたメソスケールの堆積物の構造記載や、土壤薄片を用いたマクロスケールでの堆積物の観察記載を行うことの有用性が指摘されている(Baraham 1995; Courty et al. 1989)。

## 1 試料

調査地点の堆積層の累重状況を第55図に示す。分析試料は発掘調査担当者により、図中の層準から不搅乱柱状試料として採取された(図版20—5)。上記の調査目的を考慮して、不搅乱柱状試料全点について軟X線写真、10層下部から18層にかけて土壤薄片作製鑑定、15層から18層について花粉・植物珪酸体分析を実施する。なお、調査試料の肉眼による層相観察結果については、軟X線写真の記載と合わせて後述する。

## 2 分析方法

## (1) 軟X線写真撮影観察

採取した不搅乱試料は、厚さ1cmまで板状に成形し、温潤状態のまま、管電圧50kvp、電流3mA、照射時間270秒のX線強度条件において軟X線写真撮影を実施した。撮影は元興寺文化財研



第55図 調査地点の層序および試料採取位置

究所の協力を得た。X線写真の記載は、堆積物については宮田ほか(1990)、土壤については佐藤(1990a; 1990b)、森ほか(1992)、成岡(1993)などを参考とする。

## (2) 土壤薄片作製鑑定

土壤薄片作成試料は、80°Cで1日間乾燥した後、樹脂(ペトロポキシおよびシアノボンド)で固化を行い、片面の研磨を実施した。固化および研磨済み試料は、スーパーセメダインにより研磨面をスライドガラスに接着する。その後、反対側の面について厚さ70μm程度まで研磨を

行い、カナダパルサムによりカバーガラスを接着した。土壤薄片の記載は、久馬・八木訳監修(1989)『土壤薄片記載ハンドブック』を参考とする。

### (3) 花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛：比重 2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸 9、濃硫酸 1 の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、産出する全ての化石について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

### (4) 植物珪酸体分析

各試料について、分析試料の乾燥重量を秤量後、過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタンゲステン酸ナトリウム、比重 2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2004)の分類に基づいて同定・計数し、堆積物 1gあたりの植物珪酸体含量密度を求める。

結果は、植物珪酸体含量一覧表と層位分布として示す。含量密度は、100 個 / g 以下は「<100」で表示する。各分類群の含量密度は 10 の位で丸め(100 単位にする)、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。

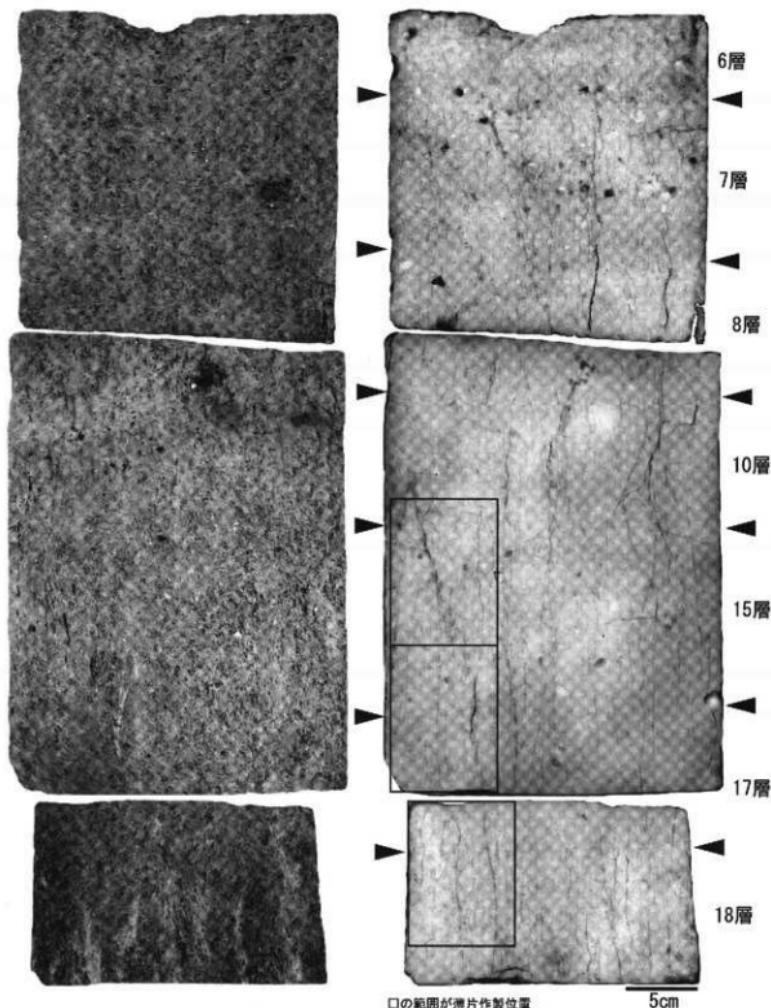
## 3 結果

### (1) 軟 X 線写真観察結果

試料および軟 X 線写真を第 56 図に示す。X 線写真的明るい部分はより高い密度の物質(ここではおもにシルトと砂・礫、酸化鉄や炭酸鉄)からなり、暗い部分は低密度の物質(水分の多い粘土、細粒のシルト、植物性の炭片、植物遺体、孔隙など)からなる。撮影基準である 6 層から 18 層までの、試料および軟 X 線写真の観察結果について以下に記載する。

6 層 褐灰色細礫・粗砂混じり極細粒砂質泥、1 cm 以下の亜角から角塊状をなす細粒砂質泥の偽礫からなり、根系などの生物擾乱が著しく、初生の堆積構造は不明瞭となっている。偽礫や細礫などの配置は不規則である。植物根痕は上位層準から垂直方向に連続する幅 1 mm 以下の微細なものが大部分を占める。偽礫は下位の 7 層に由来するものが含まれる。軟 X 線写真で明色に写っている部分が相当する。これらのことから、本層準は人為的に攪拌された堆積物と判断される。

7層 暗灰色細礫・粗砂混じり細粒砂質泥からなり、根系などの生物擾乱により著しく乱れてい。る。軟X線写真では密度の違いによる色調の違いが確認される。上位層準から連続する垂直方向に伸びる幅1mm以下の微細な植物根痕が多数確認される。6層との層理面は凹凸が著しいが、これは6層形成期の人為的攪拌によるものと判断される。以上の層相から、本層も人為的に攪拌された堆積物と判断される。



第56図 試料および軟X線写真

8層 塊状をなす灰色極細粒砂質泥からなる。上位層準から連続する垂直方向に伸びる幅1mm以下の微細な植物根痕が多数確認される。上部は7層形成期の擾乱の影響により凹凸が生じている。

10層 灰色極細粒砂質泥からなる。上位層準から連続する垂直方向に伸びる幅1mm以下の微細な植物根痕が多数確認される。軟X線写真では植物根痕は8層のように暗色ではなく明色であるが、これは植物根痕ないし周囲に酸化鉄が沈着していることによる。下位の15層準の凹凸を充填するように堆積する。

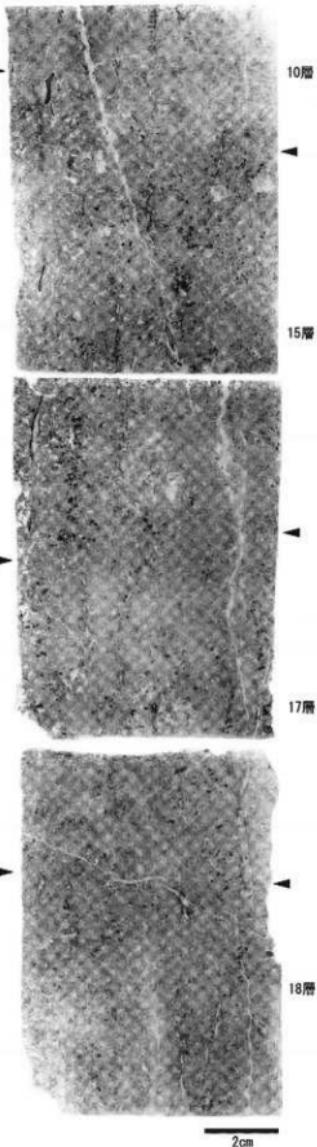
15層 黄褐色を呈する細礫・中粒～粗粒砂まじり泥質極細粒砂からなり、著しく擾乱されており、初生の堆積構造は不明瞭である。上位層準から連続する垂直方向に伸びる幅1mm以下の微細な植物根痕と本層準より発達する植物痕も多数確認される。軟X線写真では、色調がまだらで明暗の色調が存在し、細礫や粗粒砂が散在する状況が確認される。

17層 灰色泥からなり、上位層準から連続する微細な植物根痕により著しく擾乱されている。

18層 灰白～灰色を呈する泥質細粒～極細粒砂からなり、上位層準から連続する微細な植物根痕により著しく擾乱されている。軟X線写真では全体的に明色を呈するが、これは粒径密度の違いのほか、鉄分の沈着の影響も含まれる。

## (2)薄片観察結果

薄片写真を第57図に示す。最下部の18層からその上位の17層、15層では、根痕が発達し、生物擾乱が著しい。根痕については、堆積物で充填されているものが多い。この他、薄片画像で明瞭に観察される直線状の孔隙も、根痕に由来すると判断される。特に生物擾乱が著しいのは、15層の上部から最上部である。微細構造については、壁状をなし、粒団発達や葉理が認められない。孔隙については、上記した直線状の孔隙以外に、チャンネル状のものが存在



第57図 薄片写真

する。孔隙壁には、粘土被覆が認められる場合がある。粒度については、18層から15層に向かって上方粗粒化する。特に15層では砂粒の混入が顕著である。ただし、15層中の砂粒は配向性や水平方向への連続性などの構造が観察されず、散在的な分布状況を示す。また、堆積物中には炭化物片や植物遺体片がほとんど含まれない。全体的に酸化鉄の沈着が著しく顕著である。

これに対し、10層では葉理が観察され、粒度は15層に比べ細粒となる。層内には下位の堆積

第1表 花粉分析結果

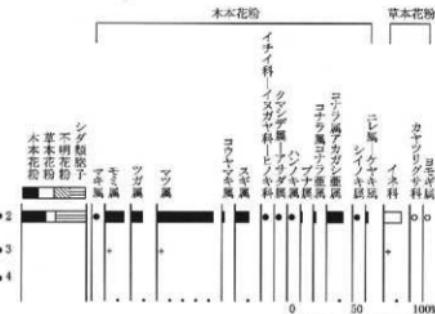
分類群	試料番号		
	2	3	4
木本花粉			
マキ属	2	-	-
モミ属	35	1	-
ツガ属	21	-	-
マツ属(複数管束樹属)	26	1	-
マツ属(不明)	77	-	-
コウヤマキ属	4	-	-
スギ属	25	-	-
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	2	-	-
クマシダ属—サザ属	1	-	-
ハンノキ属	1	-	-
ブナ属	3	-	-
コナラ属コナラ属	5	-	-
コナラ属カガシ属	30	-	-
シイノキ属	1	-	-
ニレ属—ケヤキ属	5	-	-
草本花粉			
イネ科	84	2	-
カヤツリグサ科	3	-	-
ヨモギ属	3	-	-
不明花粉	-	-	-
シダ類胞子			
イノモトウ属	8	-	-
他のシダ類胞子	291	145	25
合計			
木本花粉	238	2	0
草本花粉	90	2	0
不明花粉	0	0	0
シダ類胞子	299	145	25
総計(不明を除く)	627	149	25

層と同様炭化物片や植物遺体片がほとんど含まれない。孔隙は、チャンネル状のものその他、水平方向に伸びる直線状の孔隙が存在する。

### (3) 花粉分析

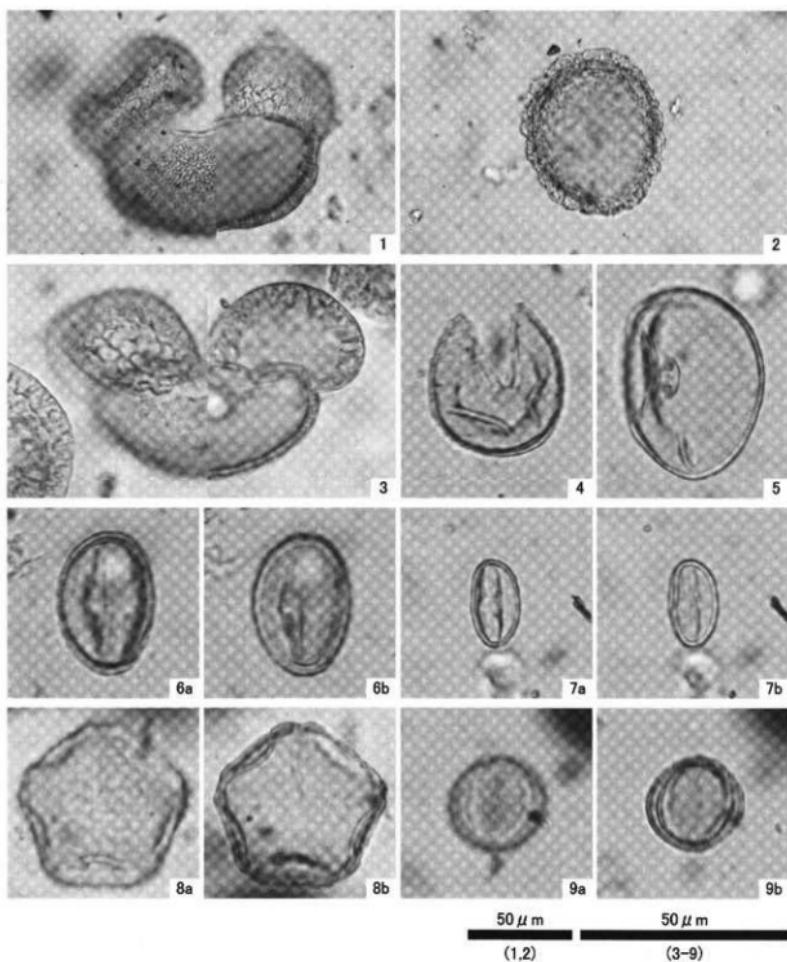
結果を第1表、第58図、第59図に示す。花粉化石が産出した試料は15層(試料2)のみで、他の試料からはほとんど見られない。残渣量はいずれも少なく、いずれもプレパラートが1枚作成できる程度である。17層・18層(試料3・4)では、シダ類胞子が産出するものの、花粉化石はほとんど見られない。残渣は、フッ化水素酸で処理しきれなかった鉱物粒を除けば、微粒炭が若干産出する程度である。

15層(試料2)では、全体の構成比はシダ類胞子の割合が高い。花粉の保存



第58図 花粉化石群集の層位変化

状態は、個体により違いが見られるが、針葉樹やイネ科花粉を中心に比較的保存状態の良い花粉が多い。木本花粉ではマツ属が多く、次いでモミ属、ツガ属、スギ属、アカガシ亜属が検出され、針葉樹の割合が高い。草本類は種類数が少なく、草本花粉の大部分をイネ科が占める。



- |                   |                       |
|-------------------|-----------------------|
| 1 モミ属(試料番号2:15層)  | 2 ツガ属(試料番号2:15層)      |
| 3 マツ属(試料番号2:15層)  | 4 スギ属(試料番号2:15層)      |
| 5 イネ科(試料番号2:15層)  | 6 アカガシ亜属(試料番号2:15層)   |
| 7 シノキ属(試料番号2:15層) | 8 ニレ属—ケヤキ属(試料番号2:15層) |
| 9 ヨモギ属(試料番号2:15層) |                       |

第59図 花粉化石写真

#### (4) 植物珪酸体分析

結果を第2表、第60図、第61図に示す。各試料からは植物珪酸体が産出するものの、全般に保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。

調査層準では、上位に向かって植物珪酸体含量密度が低下傾向を示す。18層(試料4)では約1.2万個/g、17層(試料3)で約1.1万個/g、15層(試料2)で約0.6万個/gとなる。いずれの層準も群集組成は、ネザサ節を含むタケア科の産出が目立ち、ヨシ属やイチゴツナギ亞科などを作り。また、栽培植物のイネ属は17層・15層から産出する。17層では、機動細胞珪酸体、15層では短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体の双方が産出する。イネ属の機動細胞珪酸体含量密度は、

第2表 植物珪酸体分析結果

分類群	試料番号		
	2	3	4
<b>イネ科葉部短細胞珪酸体</b>			
イネ族イネ属	<100	-	-
タケ穂科ネザサ節	100	600	600
タケ亜科	2,300	3,600	3,600
ヨシ属	200	300	400
ウシクサ族コブナグサ属	<100	-	-
ウシクサ族スキ属	<100	<100	-
イチゴツナギ亞科	<100	<100	200
不明キビ型	400	500	200
不明ヒゲシバ型	<100	400	200
不明ダンチク型	200	500	200
<b>イネ科葉身機動細胞珪酸体</b>			
イネ族イネ属	200	<100	-
タケ亜科ネザサ節	200	500	900
タケ亞科	1,000	2,400	3,000
ヨシ属	300	200	600
ウシクサ族	<100	-	-
不明	1,200	1,500	1,700
合計	3,400	5,900	5,400
イネ科葉部短細胞珪酸体	3,000	4,600	6,300
イネ科葉身機動細胞珪酸体	6,400	10,600	11,700

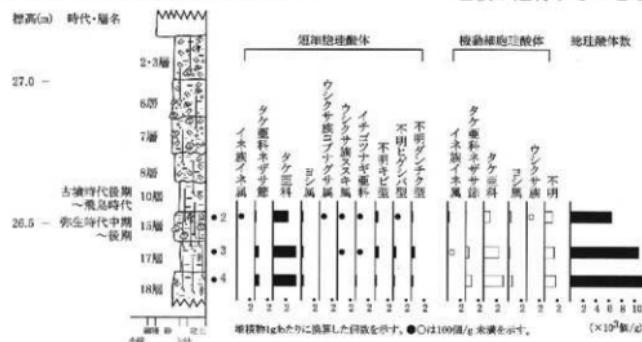
数字は含量密度(個/g)を示す。含量密度は、10の位で丸めて表示する。合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。(100個/g未満を示す。

17層で100個/g未満、15層で短細胞珪酸体が100個/g未満、機動細胞珪酸体が200個/g程度である。

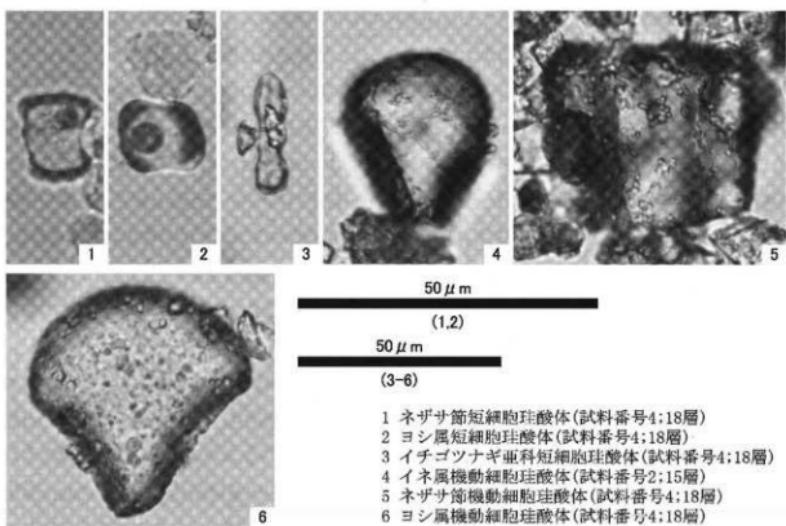
#### 4 考察

##### (1) 層相解析

18層、17層、15層では根痕が発達しており、顕著な土壤発達を受けていることが確認される。遺跡立地および粒度組成からは、これらの堆積層が、河川氾濫によって供給されたと考えられる。河川堆積作用によって累重した18層、17層、15層は、その堆積後、埋積が進行することなく、安定



第60図 植物珪酸体含量の層位変化



第61図 植物珪酸体写真

した地表環境において、継続的な土壤発達が進行したと考えられる。弥生時代中期から後期の居住域が形成された時期に対比される15層上部から最上部では、特に土壤発達程度が顕著である。このことから、15層上面では、弥生時代中期から後期にわたって、安定的に植生に覆われた地表面を構成し、土壤発達が進行していたと考えられる。軟X線写真および土壤薄片観察結果から、15層では、草本起源と思われる幅5mm程度までの直線状の根痕がおもに分布しており、木本類と考えられる根痕の存在が確認されない。このことから、15層で構成される弥生時代中期から後期の地表面では、草本植生が卓越していたと考えられる。

この15層では、下位に比べ砂粒の混入が顕著となり粗粒化する。砂粒に配向性や葉理が認められないが、これは、本層での土壤発達に基因する。このように初生的な堆積構造は、土壤発達により破壊されており、層相にもとづき15層での砂粒の堆積蓄力推定することが不可能である。分析地点は、弥生時代中期～後期の居住域に隣接している。一般的に居住域内では、その周囲に比べ草地や裸地の分布面積が相対的に増大すると考えられる。裸地では、雨食や風食によって、周囲へ地表物質である砂粒や懸濁物質の泥を供給する。分析地点は居住域よりも相対的に低い場所に存在する。分析地点の立地と当該期の遺構分布とそれにもとづく人間活動をふまえると、15層に含まれる砂粒は、居住域内の裸地から雨水によって洗い出されたものが、水ないし風によって供給されたものと推察される。したがって、15層の粗粒化は、調査地内で居住域を中心と展開した人間活動に対応する変化とみなされる。

なお、分析地点は居住域よりも一段低いという場所であり、水田ないし畑の生産域の存在が立

地的観点から予測された。水を媒質とした人為的な堆積物擾乱によって形成される水田土壤と大気下での人為的な堆積物擾乱による畑土壤については、遺跡の調査事例として、水田について松田(2006)、畑について松田・別所(1997)、松田(2004)、須永・平山(2005)などの土壤微細形態の記載と考察が存在している。また、松田・辻(2007)では、現世および埋没した遺跡の古水田土壤の微細形態の比較検討を行っている。今回の観察からは、18層、17層、15層では、いずれも上記で報告された水田ないし畑の特徴を示す微細構造が確認されない。このことから、これらの堆積層では耕作を目的とした人為的擾乱を受けていない可能性が高いことが示唆される。ただし、18層、17層、15層は、上記のように根痕による擾乱が著しく、それ以外の微細構造がほとんど失われており、耕作の有無を判断することが非常に困難な状況となっていることに留意しておく必要がある。

本調査区では土壤微細構造観察に基づく人間活動の検討が難しい状態であることを踏まえつつ、以上の観察から、弥生時代中期～後期に耕作の可能性が予測された本分析地点は、その可能性が低く、積極的な土地利用の及ばない、明るく開けた草地からなる空閑地であったと推定される。ただし、15層上面では凹凸が著しく、人為的擾乱が及んでいる可能性もある。なお、弥生時代中期の15層から栽培種のイネ属珪酸体が産出しているが、15層に含まれる砂粒の由来をふまえると、このイネ属については、居住域からの再堆積と解釈される。さらに、植物珪酸体分析では、後述するように湿潤な場所を好むヨシ属の産出が少なく、乾いた場所を好むネザザ節を含むタケヌク科やススキ属を多産する結果も得られている。土壤微細構造では、滞水した状況はまったく認められず、好気的で乾燥した土壤環境が推定される。したがって、15層から産出した植物珪酸体群集は、土壤微細形態や、さらに遺跡の立地環境とも調和的と解釈される。これらの分析結果をふまえると、調査区では、弥生時代中期や後期に、ネザザ節やススキ属といったイネ科を中心に、明るく開けた場所に生育する、いわゆる「人里植物」に分類される中生～乾生の草本が分布する草地が広がっていたと考えられる。

弥生時代中期から後期に地表面となり植生に覆われ土壤発達していた15層では、分析地点の堆積層の累重状況から、弥生時代後期以降もあまり埋積されることなく、古墳時代後期から飛鳥時代の10層が累重する時期まで、ほぼ同一層準において土壤発達が進行していたことがうかがわれる。15層とその下位の17層、18層での顕著な土壤化は、この15層形成期である弥生時代中期から古墳時代後期に至る長期間の土壤化の影響によるものと解釈される。15層は古墳時代後期から飛鳥時代に10層により埋積される。10層は葉理構造が確認される微細形態から、洪水堆積物と判断される。この10層の累重は、調査区周辺での何らかの河川活動の変化により当該期に調査地点の凹地内へ氾濫堆積物が流入するようになったことを示唆している。調査区内の全体的な堆積層の累重状況をふまえると、調査区では、古墳時代前期頃以降に、それまでの安定した土壤環境から河川堆積作用の影響を受けるような場所へと変化した可能性がある。ただし、この時期の堆積層の累重は顕著でなく、粒径も細粒であり、それほど大きな堆積環境の変遷でなかったと推

測されるが、調査区周辺の土地利用に影響を及ぼす微地形の変化はあったと予測される。この点については、遺跡周辺の地形復原や遺跡形成過程をふまえ、今後検証していく課題と認識される。

## (2) 調査区周辺の植生について

今回の調査地点では、弥生時代中期の遺物が出土する15層から統計的に扱える花粉化石が産出したが、その下位層準の17層や18層からは花粉化石がほとんど産出しなかった。花粉化石は好気的環境下での風化に弱いことから(中村 1967など)、17層・18層では花粉化石が分解、消失している可能性がある。また15層も分類群数が極端に少なく、組成がシダ類胞子や針葉樹花粉に偏る傾向にある。針葉樹花粉やシダ類胞子が多く見られるのは、これらが広葉樹化石に比べて風化に対する耐性が強いためと考えられる(徳永・山内 1971; 三宅・中越 1998など)。これより、今回得られた花粉化石群集は風化に耐性のある種類や本来の堆積物中に多量に含まれていた種類から構成されている可能性が高く、この点を考慮しながら、当時の古植生について検討する。

弥生時代中期から後期の15層では、針葉樹のマツ属花粉が卓越する。針葉樹花粉は上記したように風化に強いことから、産出率が過大評価されている可能性がある。産出分類群の生態性をみると、マツ属は瘦地でも育ち、成長が早いことから、伐採地などに先駆的に侵入し、二次林を構成する代表的な樹種である。モミ属・ツガ属・スギ属は温帯性針葉樹のモミ・ツガ・スギに由来すると判断される分類群であり、これらは扇状地や地滑り地など鉱質土壤からなる場所を生育適地とする樹種である。また、広葉樹の分類群で産出が目立つアカガシ亜属は、シノキ属などとともに極相林である暖温帶性常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)の主要構成要素である。これらの植物が弥生時代頃の調査区周辺の森林植生を構成する要素であったことが推定される。

ところで、本遺跡周辺では、軽部西遺跡、伏尾遺跡、池上曾根遺跡など、比較的多くの遺跡で花粉分析が実施されている(川崎地質株式会社 1987; 1992; 渡辺・古谷 1990)。これらの分析成果を概観すると、各遺跡で確認されている花粉化石群集の層位分布は、遺跡間で多少異なっていることが特徴として認識される。弥生時代の層準についてみると、いずれの遺跡でも常緑広葉樹のアカガシ亜属の産状が目立っている点で類似するが、伏尾遺跡ではマツ属が、軽部西遺跡ではコナラ亜属がアカガシ亜属と同等に産状を示している。また、池上曾根遺跡ではエノキ属・ムクノキ属・ニレ属・ケヤキ属といった河畔林要素がアカガシ亜属を上回る産状を示している。このように遺跡での花粉化石群集の差異については、花粉化石群集が局所的な植生の影響を強く反映していることを示唆する。この点を考慮すると、今回の15層の結果も調査区近辺の植生を反映している可能性があり、分解による針葉樹花粉の相対的増加を考慮に入れても、マツ属の割合が高く、弥生時代中期から後期の調査区周辺の植生が人為的植生攪乱を受けた、二次林のような植生であったことが示唆される。

また、草本花粉で大部分を占めたイネ科も周辺植生に由来すると思われる。大阪湾岸地域の花粉分析結果において、イネ科などの草本花粉の増加は、人間活動が活発になる弥生時代以降に増加する地点が多い。ここでのイネ科植物については、植物珪酸体の産状からネザサ節やヨシ属、

イチゴツナギ並科などが含まれていたことが推定される。なお、今回の15層の結果ではマツ属やイネ科を中心とする花粉化石の保存状態が良い点、堆積層の層厚が薄く、著しく擾乱されていることを考慮すると、擾乱の影響により後代の堆積層中の花粉化石が混入している可能性がある。

### (3) 調査区の古環境について

上述した栽培植物であるイネ属は、弥生時代の遺物が出土する15層とその直下の17層から産出した。イネ属機動細胞珪酸体含量密度は、17層で100個/g未満、弥生時代中期から後期の遺物が出土する15層で200個/g程度を示した。稻作が行われた水田跡の土壤では、イネ属の機動細胞珪酸体が5,000個/g程度産出することが多く、安定した水田稻作が行われたことを推定する目安となっている(杉山2000)。今回の結果は、この目安となる含量より少ない結果となっている。遺跡における植物珪酸体分析事例では、畦畔などが検出されている遺構検出面からほとんどイネ属珪酸体が検出されなかった事例(パリノ・サーヴェイ2001; 2002)、水田による稻作が行われたと判断される層準を覆う自然堆積層や隣接する遺構埋土からイネ属珪酸体が大量に検出された事例(パリノ・サーヴェイ1996a; 辻ほか2004)、水田遺構だけでなく明らかな皇跡遺構やそれらが存在する層準からイネ属珪酸体が多産する事例(パリノ・サーヴェイ1996b)などがある。また、水田面におけるイネ属珪酸体の空間的な産状については、地点によってバラツキがある事例も確認されており(辻本2001; 辻本・辻2002; 辻本ほか2003)、水田面のイネ属珪酸体の検出数や量が耕作地の微地形およびそれを構成する堆積物の粒度組成や一筆単位の水田面積の違いと関連することが指摘されている(外山2002)。一方、植物珪酸体の堆積物中での保存については、pH値の高い場所や、乾湿を繰り返す場所で風化しやすいこと(江口1994; 1996)、種類によって溶解性に違いが認められること(近藤・佐瀬1986)も確認されている。これらの事例を踏まえると、遺跡土壤ないし堆積物の植物珪酸体結果の解釈にあたっては、タフォノミー(植物珪酸体や花粉化石など植物化石の多くは、生育場所から何らかの効力を受けて別の場所へ運搬され、遺跡を構成する堆積物や土壤中にマトリクスとして堆積し、その後には様々な統成作用を受ける)を考慮する必要がある(辻2000)。

今回の調査地点は、上述した層相解析結果からみて、弥生時代中期～後期の15層から産出したイネ属については、居住域からの再堆積と解釈されるが、弥生時代中期に調査区周辺において稻作が行われていたことが示唆される。

### 引用文献

- Barham, A. J., 1995. Methodological approaches to Archaeological context recording. *Archaeological Sediments and Soils: Analysis, Interpretation and Management.*
- Courty, M. A., Goldberg, P. and Macphail, R. I., 1989. *Soils And Micromorphology in Archaeology.* Cambridge: Cambridge University Press, 344.
- 江口誠一 1994「沿岸域における植物珪酸体の分布 千葉県小櫃川河口域を例にして」『植生誌研

- 江口誠一 1996「沿岸域における植物珪酸体の風化と堆積物のpH値」『ペドロジスト』40  
81-84
- 川崎地質株式会社 1987「花粉分析・珪藻分析結果報告」(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書  
第11集『都市計画道路・府道磯之上山直線建設に伴う輕部池西遺跡発掘調査報告書』(財)大阪  
府埋蔵文化財協会 159-169
- 川崎地質株式会社 1992「第2節 伏尾遺跡発掘調査に伴う花粉・珪藻分析 陶邑・伏尾IIA地  
区』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書No.72 75-89
- 久馬一剛・八木久義試監修 1989『土壤薄片記載ハンドブック』博友社 176
- 近藤鍊三 2004「植物珪酸体研究」『ペドロジスト』48 46-64
- 近藤鍊三・佐瀬隆 1986「植物珪酸体分析 その特性と応用」『第四紀研究』25 31-64
- 佐藤幸一 1990a「八郎潟干拓地重粘土水田土の粗間隙の発達とその意義」『農業土木学会誌』60  
25-30
- 佐藤幸一 1990b「八郎潟干拓地における畑地と草地土壤の粗間隙の発達とその意義」『農業土木  
学会誌』60 287-292
- 杉山真二 2000「植物珪酸体(プラント・オパール)」辻誠一郎編著『考古学と自然科学3 考古学  
と植物学』同成社
- 須永薰子・平山良二 2005「浅間山噴火(1783年)による埋没表層土の土壤構造に認められる埋没  
前の植生・土地利用の影響」『筑波実験植物園研報』24 99-105
- 辻誠一郎 2000「植物と植物遺体」辻誠一郎編著『考古学と自然科学3 考古学と植物』同成社  
23-41
- 辻康男・辻本裕也・田中義文・馬場健司・松元美由紀 2004「付章 前田遺跡の自然科学分析」「前  
田遺跡(第20地点)発掘調査概要報告書—弥生前期水田跡の構造と水利動態—」芦屋市教育委員  
会 1-36
- 辻本裕也 2001「IFJ97-3調査区の花粉・植物珪酸体分析」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要XX  
VII—IFJ97-3調査区の概要ー』(財)大阪府文化財調査研究センター 120-131
- 辻本裕也・辻康男 2002「池島・福万寺遺跡の占環境復元」『池島・福万寺遺跡2(福万寺Ⅰ期地区)  
一級河川恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書—分析・考察編』(財)大阪府文化財センタ  
ー 361-410
- 辻本裕也・辻康男・田中義文・馬場健司 2003「自然科学分析の成果」「勝部遺跡 大阪国際空港  
周辺緑地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」(財)大阪府文化財調査研究センター  
151-192
- 徳永重元・山内輝子 1971「花粉・胞子」『化石の研究法』共立出版株式会社 50-73
- 外山秀一 2002「池島・福万寺遺跡の立地と環境」『池島・福万寺遺跡2(福万寺Ⅰ期地区)一級河

川恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書—分析・考察編』(財)大阪府文化財センター  
411-429

中村純 1967『花粉分析』古今書院 232

成岡市 1993「土壤粒間隙の形態とその測定法 土壤の不均一性と物質移動の研究前線」『日本土壤肥料科学雑誌』64-1 90-97

パリノ・サーヴェイ 1996a「珪藻化石・植物化石・樹種による古環境復元」『北島遺跡の耕作地と古環境—裏屋川南部流域植付ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第1次発掘調査報告書』(財)東大阪市文化財協会 71-130

パリノ・サーヴェイ 1996b『自然科学分析』『上千葉遺跡葛飾区西亀有1丁目12番地地点発掘調査報告書』葛飾区遺跡調査会 242-275 189-213

パリノ・サーヴェイ 2001「亀里平塚遺跡の自然科学分析」『亀里平塚遺跡 主要地方道前橋・長瀬線改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 343-353

パリノ・サーヴェイ 2002「横手南川端遺跡・横手湯田遺跡の自然科学分析」『横手南川端遺跡・横手湯田遺跡北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11集』第1分冊(本文編) (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 133-155

松田順一郎 2004「古墳時代と江戸時代の畠地堆積物堆積構造の比較—大阪府久宝寺遺跡、京都府山崎遺跡の事例—」『日本文化財科学会第21回大会研究発表要旨』日本文化財科学会 62-63

松田順一郎 2006「流路・氾濫原堆積物から推測される約3100～1200年前の登呂遺跡における環境変化」『特別史跡登呂遺跡再発掘調査報告書(自然科学分析・総括編)』静岡市教育委員会 1-27

松田順一郎・辻康男 2007「埋没および現世水田にみられる土壤微細形態の比較—静岡県登呂遺跡の事例を中心として—」『日本文化財科学会第24回大会研究発表要旨』日本文化財科学会 166-167

松田順一郎・別所秀高 1997「大阪府北島遺跡における畠地形成と地形発達」『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨』日本文化財科学会 70-71

三宅尚・中越信和 1998「森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植生史研究』6(1), 15-30

宮田雄一郎・山村恒夫・鍋谷淳・岩田尊夫・八幡雅之・結城智也・徳橋秀一 1990「淡水成 deltaの形成過程—琵琶湖愛知川河口部を例として— 2 地質構成と堆積相」『地質学雑誌』96 839-858

森也寸志・滋賀撰子・岩間憲治・渡辺紹裕・丸山利輔 1992「土地利用による土壤間隙構造の差異—軟X線による観察を中心として—」『土壤の物理性』No.66 19-27

渡辺正巳・古谷正和 1990「花粉・珪藻・火山灰分析」『史跡池上曾根遺跡発掘調査概要・松ノ浜曾根線建設に伴う発掘調査』大阪府教育委員会 71-82

## 第1節 中世の寺田遺跡

今回の調査で検出した中世の遺構は溝のみで、いずれも鈎溝、区画溝など中世の耕作に関わるものと推定できた。また、第5章の報告のとおり、軟X線写真撮影観察より、中世の包含層である基本層序第6層、第7層が人為的に攪拌された堆積物と判断された。第3層から第8層についても、肉眼観察では類似した堆積状況を示している。また、これらの層からの出土遺物は、12世紀から15世紀の遺物が多く、層による出土遺物の時期差はみとめられない。したがって、12世紀から15世紀にわたって、調査区の全域にわたって耕作が行われていたと想定できる。また、検出した溝の方向より、当地域の条里地割が中世までは遡ることも確認できた。

寺田遺跡では、平成16年度の調査でも、溝など中世の遺構が検出されている。今年度の調査地区とは約100m離れる地点であるが、試掘調査でもほぼ全地点で中世の遺物包含層を確認していることから、寺田遺跡のほぼ全域に中世の遺物包含層が存在している可能性が高い。

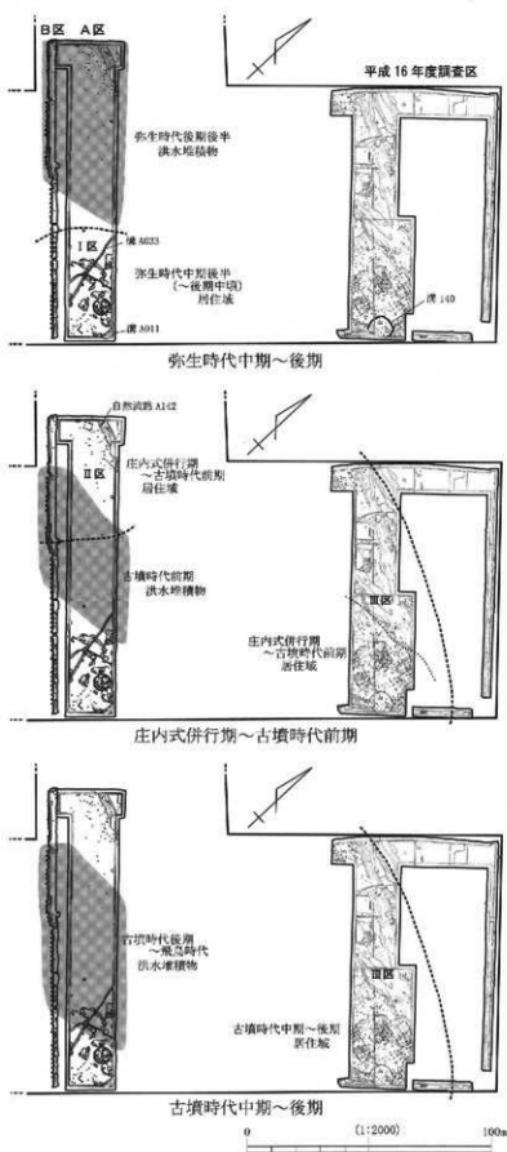
また、周辺の遺跡をみると、北側の和気遺跡では、中世から近世の水田区画や、中世の建物跡が検出されている(和気遺跡調査会1979; 久米1985)。したがって、寺田遺跡の中世における耕作域は、和気遺跡まで広がる可能性が考えられる。また、寺田遺跡の南西側の段丘崖下には摩湯北遺跡が位置しており、中世以降水田として開発されたことがわかっている(藤澤2001)。したがって、寺田遺跡でみとめられる中世の耕作域は、松尾川へ向かって段丘崖をさがった地点へも広がっていると想定できる。

以上のように、寺田遺跡で検出した中世の耕作域は、北西側は和気遺跡、南西側は摩湯北遺跡へと広がる可能性が高い。一方で、寺田遺跡においては、近世の遺物はほとんどみられないこと、和気遺跡ほど明確な区画溝は確認できないことなど、異なる状況も呈している。各時期における条里遺構の分布域や居住域との関係について、今後検討していく必要がある。

## 第2節 弥生時代から古墳時代の寺田遺跡

今回の調査では、弥生時代中期から後期中頃、庄内式併行期から古墳時代前期の集落跡を検出した。また、河川氾濫による堆積と想定できる弥生時代後期後半の遺物包含層、古墳時代の遺物包含層も検出している。ここでは、平成16年度の調査成果や、自然科学分析の成果とあわせ、弥生時代から古墳時代までの寺田遺跡の集落域の変遷についてまとめる。

第62図は、寺田遺跡における集落域の変遷を、河川氾濫による堆積物のみとめられる範囲とあわせて示したものである。弥生時代中期後半には、A区およびB区の南東部(I区)において、竪穴住居3基、土坑、溝などからなる集落域が形成される。この時期の集落域は、遺構の検出状況より、北東および南西へさらに展開することが予測できる。また、北東端で検出した溝A011は、集落域の端を示す環濠である可能性がある。また、この時期の遺構が検出されないA区、B区の



第 62 図 寺田遺跡における居住域の変遷

北西部については、生産域である可能性を考えた。しかし、自然科学分析の結果、その可能性は低く、草地からなる空閑地であったと判断された。ただし、周辺において稻作が行なわれていた可能性は示唆されていることから、今回の調査範囲外に、弥生時代の生産域が存在する可能性が考えられる。なお、南西側の段丘崖下の摩湯北遺跡では、古墳時代頃まで居住域として利用されていなかったことがわかっている。したがって、集落域は段丘崖下へは広がらないと想定できる。

弥生時代後期には、後期中頃に埋没する溝 A033があるが、この溝の他には、該期に位置づけられる明確な遺構はみとめられない。後期の土器は包含層からも出土していることから、近辺に居住していたと想定できるが、居住域は明確でない。溝 A033は B 区には伸びず、また、B 区では後期の土器がまったく出土していないことから、少なくとも B 区側に後期の居住域が存在する可能性は低い。

なお、平成 16 年度の調査区の南東端で検出された溝 140 は、円形竪穴住居の壁溝である可能性がある。この溝からではないものの、調査区内からは弥

生時代の遺物が出土していることから、竪穴住居であれば、形状より弥生時代のものと想定できる。明確な時期については判断できないが、寺田遺跡の東部にも弥生時代の居住域が展開していた可能性がある。一方、A区、B区の北東部では、後期後半に河川氾濫によって供給された堆積がみとめられることから、後期後半には居住域に適さない、不安定な環境にあったと想定できる。河川活動の変化によるこうした環境の変化が、居住域を移す一因である可能性が考えられる。

庄内式併行期から古墳時代前期には、A区、B区の北西部(II区)に、この弥生時代後期後半の洪水堆積層をベース層として、掘立柱建物や土坑などからなる集落域が形成される。遺物が少なく存続時期を明確にできないが、古墳時代前期のうちに、廃絶するものと思われる。北端では、同時期の遺物を含む自然流路 A142 が検出されており、掘立柱建物に近接してこうした流路が形成されるような河川活動の変化があったことが想定できる。さらに、A区、B区の中央部でも、古墳時代前期の河川氾濫による堆積がみとめられる。こうした河川活動の変化が、古墳時代前期で居住域が廃絶した要因である可能性が考えられる。また、この時期には、平成 16 年度の調査区においても、南部から南西側(III区)にかけて、居住域が確認されている。III区の多数の遺構のすべてについて詳細な時期を明らかにすることは困難であるが、古墳時代中期に竪穴住居から掘立柱建物へと居住形態が変化すると考えられること、竪穴住居は南端へ偏ってみとめられることから、前期以前の居住域は、III区の中でも南側を中心としていたと想定できる。

古墳時代中期から後期には、引き続きIII区で集落域が展開する。竪穴住居が南端に偏るのに対し、掘立柱建物は南部から南西部に広く分布することから、より広い範囲へと集落が展開していくことが想定できる。また、III区より北側では極端に遺構が少なくており、河川が集落域の北端を画するものと考えられている。後期初頭には埋没河川の上に遺構が検出されていることから、より北西側へと居住域を拡大または移動していく様相がみてとれる。III区の居住域は、後期前半をもって廃絶する。一方、A区、B区の中央部では、古墳時代後期から飛鳥時代にかけて、河川氾濫による堆積がみとめられており、遺跡の西側では安定しない環境にあったと考えられる。

このように、寺田遺跡においては、弥生時代中期後半から古墳時代にかけて、I区、II区、III区と居住域を移していく様相が確認できる。また、弥生時代後期前葉および後期後葉には遺構の空白期がみとめられること、I区からII区へ、II区からIII区への移動の間には河川氾濫がおこっていることが指摘できた。ただし、前述のように、III区においては、弥生時代にも集落が展開していた可能性も考えられる。III区において、居住域の拡大や移動が明確にみとめられるのかも含め、今後の調査成果をあわせて検討する必要がある。

では、こうした寺田遺跡における居住域の変遷は、和泉地域における弥生時代社会の中でどのような位置づけが可能であろうか。第2章第2節で概観した大津川流域を中心に、周辺遺跡のあり方と比較する。

まず、中期後半に竪穴住居をはじめとした集落遺構がみとめられる様相は、集落遺跡の増加と中位段丘上への展開という大局的な状況に合致しており、近辺でも、和氣遺跡で遺物、遺構がみ

とめられる時期である。また、後期前葉の遺構がみとめられない点も、中期の集落の多くが衰退に向かう様相に一致しており、後期に集落域の立地が大きく変化することが、寺田遺跡においても裏付けられる。また、寺田遺跡の東方丘陵上には、後期の高地性集落である観音寺山遺跡が位置し、直線距離で 500m と近接した位置関係にある。居住域を観音寺山遺跡へと移した可能性も十分に考えられよう。一方で、I 区では、後期中頃に溝 A033 のみが築かれ、その後再び遺構の空白期間となる。溝 A033 の性格については明らかにし得ず、後期中頃に再び寺田遺跡に居住域が移されたかは判断し難い。しかし、A 区、B 区の広い範囲で後期後半の河川氾濫堆積がみとめられることから、後期中頃に I 区周辺に居住域が設けられたとしても、継続的なものではなかったとする方が、現状では妥当性が高いだろう。また、観音寺山遺跡では 117 基の竪穴住居が検出されており、同時期存在の住戸数は最も多い後期前葉で 15~30 基で、後葉には半減すると想定されている(辰巳編 1999)。このことは、寺田遺跡からの移動があったとしても、それが他の中小集落と集住するようなあり方であったことを示していよう。また、観音寺山遺跡が衰退に向かう後期後葉以降、府中遺跡などこの時期の居住域がみとめられる他の集落の動きとあわせて関連を検討する必要がある。

庄内式併行期には、寺田遺跡の II 区および III 区に居住域が形成される。この時期の居住域は、和氣遺跡でもみとめられており、再び居住域が中位段丘面へとおり、集落が分散して存在する様相の一例と捉えることができよう。また、寺田遺跡では、前期のうちに II 区の居住域は廃絶し、III 区のみに集落が営まれるが、他の集落ではこうした動きは顕著ではないようである。したがって、寺田遺跡におけるこの時期の居住域の移動は、河川氾濫による微地形の変化に起因するものと想定できる。

古墳時代中期以降、寺田遺跡では引き続き III 区に居住域が営まれる。こうした状況は、和氣遺跡や府中遺跡などでもみとめられ、古墳時代を通して、大規模ではないものの、比較的安定して集落が展開される社会状況であったと考えられる。寺田遺跡の集落は、古墳時代後期前半をもって廃絶するようであるが、これも他遺跡の動向と共通した現象と言える。

以上のように、寺田遺跡は、弥生時代中期後半以降、この地域で中小集落のひとつとして典型的な展開をみせたものと位置づけることができる。古墳時代前期以降は、遺跡の東側において比較的規模の大きな集落として発展した可能性も考えられるが、これについては、III 区の西側の状況が明らかとなったうえで、あらためて検討する必要がある。また、寺田遺跡内での居住域の移動という視点でみると、河川活動の影響を受けて、居住域を移動している状況が窺える。不安定な環境となった居住域を放棄し、あるいは、河川氾濫による堆積上に再び居住域を設けるといった現象は、当時の土地利用のあり方を考える上で興味深い。今回はおおまかな検討に留まっているが、今後、より詳細な微地形の変動に着目し、寺田遺跡における土地利用状況について検討を進めていく必要がある。

土器調査表

図 番 号	器 種	遺 物 番 号	種 別	器 種	口 径 (底径 (底深 (cm)	高 度 (cm)	高 度 (底存 高 (cm)	調整 内面/外面	色 調	胎 土	燒 成	口縁部 残存率 (底部 残存率)	出土位置	備考
40	21	1	弥生 土器	壺	15.40	(15.90)	(4.60)	ナデ・茹痕 / タタ キ	(内)7.5YR8/4 淡黄橙 (外)7.5YR8/4 淡黄橙	粗	やや 不良	60%	土坑 A143	V型式系統
40	21	2	弥生 土器	壺	11.00	(4.60)	(4.60)	ヨコナデ・和田 ノヨコナデ	(内)7.5YR8/2 灰白 (外)7.5YR8/2 灰白	粗	良	50%	自然流路 A142 下層	広口短頸壺
40	21	3	上師 器	高杯	16.00	(5.70)	(5.70)	ナデ / ナデ	(内)7.5YR7/4 にぶい楕 (外)7.5YR7/4 にぶい楕	粗	やや 軟	20%	自然流路 A142 下層	外面に黒斑
40	21	4	弥生 土器	壺底部	(3.50)	(4.50)	(4.50)	板ナデ? / ミガキ	(内)10YR5/1 極灰 (外)10YR8/3 浅黄橙	粗	良	(100%)	自然流路 A142 下層	
40	21	5	弥生 土器	壺底部	(4.40)	(3.70)	(3.70)	磨滅 / タタキ	(内)2.5Y/4 2 壁環 (外)10YR5/3 にぶい楕	粗	良	(100%)	自然流路 A142 下層	外面にスス
40	21	6	弥生 土器	壺底部	(4.20)	(3.40)	(3.40)	板ナデ? / タタキ	(内)10YR8/3 浅黄橙 (外)10YR8/2 灰白	粗	良	(100%)	自然流路 A142 下層	外面に黒斑
40	21	7	弥生 土器	壺底部	(3.40)	(2.60)	(2.60)	磨滅 / タタキ	(内)2.5Y/6 2 灰白 (外)2.5Y/6 明瞭楕	粗	良	(100%)	自然流路 A142 下層	内面に黒斑
40	21	8	弥生 土器	壺底部	(4.00)	(2.40)	(2.40)	板ナデ? / タタキ	(内)10YR8/4 浅黄橙 (外)10YR6/1 極灰	粗	良	(100%)	自然流路 A142 下層	
40	21	9	弥生 土器	高杯		(4.50)		磨滅・シボリ痕 / 磨滅	(内)2.5Y/8/2 灰白 (外)10YR7/4 にぶい楕	粗	良		自然流路 A142 上層	
40	21	10	上師 器	高杯		(6.40)		磨滅・シボリ痕 / 磨滅	(内)10YR7/3 にぶい楕 (外)7.5YR6/6 槌	粗	良		自然流路 A142 上層	
41	22	11	弥生 土器	高杯	18.00	(3.80)	(3.80)	磨滅 / 磨滅	(内)10YR7/2 にぶい楕 (外)2.5Y/8/2 灰白	粗	良	10% 未満	堅穴住居 AO48	堅状口縁壺 状のV字縫 部、凹縫文
41	22	12	弥生 土器	高杯	15.00	(5.40)	(5.40)	磨滅 / 磨滅	(内)7.5YR8/3 浅黄橙 (外)10YR8/3 浅黄橙	やや 密	良	15%	堅穴住居 AO48 内溝 A117	円窓充填、 外側に黒斑
41	22	13	弥生 土器	高杯	15.20	(10.80)	(10.80)	磨滅・シボリ痕 / 磨滅	(内)10YR8/3 浅黄橙 (外)10YR8/3 浅黄橙	粗	良	30%	堅穴住居 AO48	岡上彌元、 山麓窓壺、 凹縫文
41	22	14	弥生 土器	壺	32.00	(7.40)	(7.40)	ヨコナデ・磨滅 / ヨコナデ・磨滅	(内)10YR8/2 灰白 (外)10YR8/2 灰白	やや 粗	良	10%	堅穴住居 AO48	大型、凹縫文
41	22	15	弥生 土器	壺	16.50	(13.80)	(13.80)	磨滅・磨滅・ヘラ ケズリ?	(内)2.5YR7/8 椎 (外)2.5YR7/8 椎	粗	やや 良	20%	堅穴住居 AO48	岡上彌元、 無窓壺、 焼成跡孔
41	22	16	弥生 土器	壺		(2.00)		ヨコナデ / ヨコナ デ	(内)7.5YR7/3 にぶい楕 (外)7.5YR7/3 にぶい楕	密	良	10% 未満	堅穴住居 AO48 壁上 A048 壁上	壁上V字縫
41	22	17	弥生 土器	壺	17.00	(3.90)	(3.90)	ヨコナデ・磨滅 / ヨコナデ・磨滅	(内)10YR8/3 浅黄橙 (外)10YR8/3 浅黄橙	やや 密	良	15%	堅穴住居 AO48	堅V字縫壺
41	22	18	弥生 土器	底部	(4.75)	(2.30)	(2.30)	磨滅・磨滅・底面: ナデ	(内)2.5Y/8/3 淡黃 (外)10YR7/4 にぶい楕	やや 密	良	(100%)	堅穴住居 AO48	外側にコゲ
41	22	19	弥生 土器	底部	(5.20)	(1.50)	(1.50)	磨滅・磨滅	(内)10YR7/2 にぶい楕 (外)10YR7/2 にぶい楕	密	良	(100%)	堅穴住居 AO48	
41	23	20	弥生 土器	水差	10.00	(3.80)	(3.80)	磨滅・ヨコナデ	(内)7.5YR8/2 灰白 (外)5YR8/4 淡楕	やや 密	良	40%	堅穴住居 AO15	門縫文
41	23	21	弥生 土器	壺盖	(9.40)	4.90	(4.90)	指オサエ・ヨコナ デ・指オサエ・ヨ コナデ	(内)10YR3/1 黑鳴 (外)10YR4/1 極灰	やや 粗	良	側部 30%	堅穴住居 AO15	竪部内外面 にスス付
41	23	22	弥生 土器	高杯	22.20	18.40	(18.40)	ヨコナデ・ナデ・ ヘラナデ / ヨコナ デ・ナデ	(内)10YR8/3 浅黄橙 (外)10YR8/2 淡楕	やや 密	良	60%	堅穴住居 AO15	凹縫文、丙 型窓、外 面に黒斑
41	23	23	弥生 土器	壺	30.00	(6.90)	(6.90)	ヨコナデ・磨滅 / ヨコナデ・ハケ	(内)10YR6/2 灰黃 (外)10YR4/2 淡黃	やや 密	良	10% 未満	堅穴住居 BO26	大型
41	23	24	弥生 土器	壺	32.20	(8.50)	(8.50)	ヨコナデ・ハケ / ヨコナデ・磨滅	(内)10YR8/2 灰白 (外)10YR8/2 灰白	やや 粗	良	10% 未満	堅穴住居 BO26	大型
41	23	25	弥生 土器	高杯		(5.00)		ナデ・シボリ痕 / 磨滅	(内)2.5Y/8/1 灰白 (外)2.5Y/8/1 灰白	密	良		堅穴住居 BO26	凹縫充填
41	26	26	弥生 土器	底部	(6.00)	(4.00)	(4.00)	指オサエ・指オサ エ	(内)7.5YR8/3 極 (外)7.5YR8/1 灰白	密	良	(45%)	堅穴住居 BO26	
42	24	27	弥生 土器	鉢	26.00	(8.40)	(8.40)	磨滅・磨滅	(内)10YR8/2 灰白 (外)10YR8/3 浅黄橙	粗	良	25%	土坑 A012	大型、凹縫 文
42	28	28	弥生 土器	壺	27.00	(7.00)	(7.00)	ヨコナデ・磨滅 / ヨコナデ・ハケ	(内)7.5YR7/3 にぶい楕 (外)7.5YR8/3 浅黄橙	粗	良	30%	土坑 A012	
42	24	29	弥生 土器	壺	32.40	(9.00)	(9.00)	ヨコナデ・供痕 / ヨコナデ	(内)10YR8/2 灰白 (外)10YR8/3 浅黄橙	やや 密	良	10% 未満	土坑 A012	大型、外 面にスス
42	24	30	弥生 土器	壺	22.40	(8.00)	(8.00)	ヨコナデ・供痕 / ヨコナデ	(内)7.5YR4/1 極 (外)7.5YR7/4 にぶい楕	やや 粗	良	10%	土坑 A012	外面にスス

段落号	区分番号	遺物番号	種別	縦幅	側高(横径)(cm)	側高(横径)(cm)	調整内面/外面	色調	胎土	焼成	口縁部残存率(底部残存率)	出土位置	備考
42	31	弥生土器	甕	16.00	(5.40)	(5.40)	ヨコナデ・脂痕・ ヨコナデ・崩滅	(内)5YR7/6 棕 (外)5YR7/6 棕	粗	良	10%	土坑 A012	
42	32	弥生土器	甕	13.60	(6.40)	(6.40)	ヨコナデ・脂痕 ヨコナデ・ハケ	(内)10YR7/2 に赤い黄橙 (外)10YR5/2 黄褐	やや粗	良	20%	土坑 A012	小型、外側にスズ
42	24	33	弥生土器	甕	35.00	25.30	ヨコナデ・脂痕・ ナデ・ヨコナデ・ ハケ	(内)10YR7/1 灰白 (外)7.5YR8/2 灰白	やや粗	良	30%	土坑 A012	大型
42	34	弥生土器	甕	14.00	(7.00)	(7.00)	ヨコナデ・工具痕 ヨコナデ・磨滅	(内)7.5YR4/1 塗灰 (外)7.5YR5/1 塗灰	密	良	40%	土坑 A012	小型、内面にコケ、外 面にスズ
42	24	35	弥生土器	甕	16.00	(11.50)	ヨコナデ・脂ナデ ヨコナデ・崩滅	(内)2.5YR7/1 灰白 (外)2.5YR8/1 灰白	やや粗	良	10%	土坑 A012	広口短颈 縦・横指掌状文、横指 掌状文
42	36	弥生土器	高杯	24.00	(9.60)	(9.60)	ヨコナデ・シリ ク / ヨコナデ・工 具痕	(内)2.5YR8/2 灰白 (外)10YR7/3 に赤い黄橙	密	良	10% 未満	土坑 A012	円錐充填
42	37	弥生土器	底部	(4.20)	(2.60)	(2.60)	崩滅・磨滅	(内)5YR7/6 棕 (外)7.5YR8/4 浅黄橙	密	良	(10%)	土坑 A012	
42	38	弥生土器	底部	(6.00)	(3.40)	(3.40)	磨滅・磨滅	(内)7.5YR6/6 棕 (外)10YR5/2 浅黄橙	密	良	(95%)	土坑 A012	外側にス ズ、焼成後 穿孔
42	39	弥生土器	底部	(5.00)	(4.40)	(4.40)	磨滅・磨滅・底部 ナデ	(内)10YR8/2 灰白 (外)10YR7/3 に赤い 脂痕	やや粗	良	(100%)	土坑 A016	
42	40	弥生土器	底部	(7.00)	(3.00)	(3.00)	工具痕・脂ナデ・ 脂オサエ・脂オサ エ	(内)10YR8/2 灰白 (外)10YR8/2 灰白	やや粗	良	(100%)	土坑 A016	外側に脂斑
42	24	41	弥生土器	鉢	26.20	(4.80)	ヨコナデ・板ナ デ? / ヨコナデ	(内)10YR8/2 灰白 (外)5YR7/3 に赤い 脂	やや粗	良	10%	土坑 A016	柳指掌状 文、横指斜 突文、内外 面にスズ
42	42	弥生土器	甕	17.60	(5.60)	(5.60)	ヨコナデ・脂痕 ヨコナデ・磨滅	(内)7.5YR8/3 浅黄橙 (外)7.5YR8/4 浅黄橙	密	良	20%	土坑 A016	底ち込み内
42	43	弥生土器	甕	18.00	(4.00)	(4.00)	ヨコナデ・脂痕 ヨコナデ・磨滅	(内)7.5YR8/4 浅黄 橙 (外)7.5YR8/4 浅黄 橙	密	良	10%	土坑 A016	
42	24	44	弥生土器	甕	18.00	(6.70)	ヨコナデ・軟ナデ? ヨコナデ・磨滅	(内)7.5YR7/2 明瞭灰 (外)5YR7/6 棕	密	良	50%	土坑 A012・ A016 亂ち 込み内	
42	24	45	弥生土器	甕	16.00	(5.40)	磨滅・磨滅	(内)5YR7/6 棕 (外)5YR7/6 棕	密	良	35%	土坑 A016	広口短颈 縦・横指掌 状文
43	25	46	弥生土器	甕	16.00	(6.50)	脂痕? / 磨滅	(内)10YR8/4 浅黄 橙 (外)10YR8/4 浅黄 橙	やや粗	良	20%	土坑 A024	広口短颈 縦・横指掌 状文、内面 にスズ
43	25	47	弥生土器	甕	15.60	(8.20)	ヨコナデ・脂痕 ヨコナデ・ミガキ	(内)7.5YR8/2 灰白 (外)7.5YR8/3 浅黄 橙	やや粗	良	70%	土坑 A025	広口短颈 縦・横指掌 状文、外側に スズ
43	25	48	弥生土器	甕	20.60	(12.20)	ヨコナデ・脂痕? ヨコナデ・磨滅	(内)10YR8/2 灰白 (外)10YR8/2 灰白	やや粗	良	50%	土坑 A025	広口短颈 縦・横指掌 状文、円形 穿孔
43	25	49	弥生土器	甕	35.50	(25.70)	ヨコナデ・脂痕 ヨコナデ・磨滅	(内)2.5YR7/4 淡赤 橙 (外)10YR6/6 赤 橙	やや粗	良	25%	土坑 A025 底面部上	网上復元 大型
43	50	弥生土器	甕	14.00	(3.90)	(3.90)	ヨコナデ・磨滅 ヨコナデ・磨滅	(内)7.5YR7/3 に赤い 脂 (外)7.5YR7/3 に赤い 脂	やや粗	良	15%	土坑 A032	小型
43	25	51	弥生土器	高杯脚 鉢	(13.80)	(7.70)	工具ナデ・ケツリ ヨコナデ・ナデ・ ヨコナデ	(内)10YR2/1 黒 (外)10YR5/2 浅黄 橙	やや粗	良	脚部 40%	壁端部にス ズ	
43	52	弥生土器	甕	24.60	(5.60)	(5.60)	脂痕・ハケ/ハ ケ	(内)2.5YR8/3 に赤い 脂 (外)2.5YR7/4 浅黄 橙	やや粗	良	25%	土坑 A085	
43	25	53	弥生土器	甕	31.00	(14.30)	ヨコナデ・ハケ→ 板ナデ? / ヨコナデ・ ハケ→板ナデ?	(内)10YR8/1 灰白 (外)10YR8/1 灰白	やや粗	良	15%	土坑 A085	
43	25	54	弥生土器	甕	33.00	(12.70)	磨滅・ヨコナデ・ 磨滅	(内)10YR8/3 浅黄 橙 (外)10YR6/8 赤 橙	やや粗	良	25%	土坑 A085	大型
43	25	55	弥生土器	甕	34.00	(11.70)	ヨコナデ・脂痕・ ハケ / ヨコナデ・ ハケ	(内)7.5YR8/3 浅黄 橙 (外)10YR6/6 棕	やや粗	良	25%	土坑 A085 底面部上	大型
43	25	56	弥生土器	甕	14.60	(4.40)	磨滅・磨滅	(内)10YR8/6 赤 橙 (外)10YR8/6 赤 橙	やや粗	良	25%	土坑 A085	広口短颈

図版 番号	出版 番号	遺物 番号	種別	器種	口径 (直径) (cm)	諸高 (残存 高) (cm)	調整 内面/外面	色調	胎上	焼成 度	L.I.緑部 焼成率 (底部 焼付率)	出土位置	備考
43	25	57	弥生 土器	壺	16.50	(10.00)	磨滅/磨滅	(内)10YR7/1 灰白 (外)10YR6/6 赤褐色	やや 粗	やや 軟	40%	土坑 A085	広口短頸壺
43	25	58	弥生 土器	高杯	18.00	(4.40)	ヨコナデ/ヨコナ デ・ヘラゲズリ	(内)7.5YR8/2 灰白 (外)2.5YR7/6 棕褐色	やや 密	やや 良	40%	土坑 A085	底面部上
43	25	59	弥生 土器	高杯	30.80	(4.10)	ヨコナデ/磨滅 /ヨコナデ・磨滅	(内)7.5YR8/3 浅黃褐色 (外)7.5YR8/3 浅黃褐色	やや 粗	良	15%	土坑 A085	底面部上
44	26	60	弥生 土器	高杯	13.20	(10.30)	ヨコナデ/ハケ /ヨコナデ・ハケ	(内)10YR6/2 灰黃褐色 (外)2.5YR7/6 棕褐色	粗	良	20%	土坑 A030	広口短頸壺
44	26	61	弥生 土器	高杯	27.60	(5.20)	ヨコナデ/磨滅 /ヨコナデ・ミガキ?	(内)10YR8/2 灰白 (外)10YR7/2 にぶい黃褐色	やや 粗	良	10%未満	土坑 A031	円錐文、外 面にスヌ
44	26	62	弥生 土器	壺	18.80	(5.80)	ヨコナデ/磨滅 /ヨコナデ・ハケ	(内)10YR8/2 灰白 (外)7.5YR7/4 にぶい褐色	やや 粗	良	30%	土坑 A031	広口短頸壺、四線文
44	63	63	弥生 土器	壺	12.50	(4.00)	磨滅/磨滅	(内)7.5YR7/4 にぶい褐色 (外)7.5YR7/4 にぶい褐色	やや 粗	良	35%	土坑 A031	広口短頸壺、四線文
44	26	64	弥生 土器	壺	22.00	(6.70)	ヨコナデ/磨滅 /ヨコナデ・磨滅	(内)10YR4/6 棕褐色 (外)10YR4/6 棕褐色	粗	良	10%未満	土坑 A035	生駒西窪底
44	27	65	弥生 土器	壺	34.00	(11.10)	ヨコナデ/磨滅 /ヨコナデ・ハケ	(内)10YR7/2 にぶい黃褐色 (外)10YR7/2 にぶい黃褐色	やや 粗	良	20%	土坑 A035	大型
44	27	66	弥生 土器	高杯	21.80	(4.70)	ヨコナデ/磨滅 /ヨコナデ・磨滅	(内)7.5YR7/3 にぶい黃褐色 (外)2.5YR5/6 明褐色	やや 粗	良	25%	土坑 A035	範状L線文 状の口縁部、凹線文
44	67	67	弥生 土器	壺	20.00	(6.50)	ヨコナデ/磨滅 /ヨコナデ・ハケ	(内)7.5YR8/4 浅黃褐色 (外)7.5YR8/4 浅黃褐色	やや 密	良	10%	土坑 A035	広口壺
44	26	68	弥生 土器	三 二 チャウ 底部	(2.00)	(2.50)	磨滅/磨滅	(内)2.5YR1/1 灰白 (外)2.5YR1/1 灰白	密	軟	(45%)	土坑 A035	
44	26	69	弥生 土器	壺	17.40	(3.60)	ヨコナデ/磨滅	(内)7.5Y5/3 にぶい褐色 (外)7.5YR8/2 灰白	やや 粗	良	20%	土坑 A040	広口壺、櫛 齒跡突出文
44	70	70	弥生 土器	壺	18.00	(6.20)	ヨコナデ・ナデ? ヨコナデ・磨滅	(内)10YR8/1 灰白 (外)2.5YR7/4 淡黃褐色	やや 粗	軟	15%	七坑 A040	広口短 頸壺、燒成前 穿孔
44	27	71	弥生 土器	鉢	21.70	(4.70)	ナデ/磨滅	(内)10YR4/2 灰黃褐色 (外)10YR6/2 灰黃褐色	やや 密	良	20%	土坑 A040	細曲輪突文
44	72	72	弥生 土器	鉢	30.20	(5.20)	ヨコナデ/磨滅 /ヨコナデ・磨滅	(内)7.5YR7/6 淡褐色 (外)7.5YR7/4 にぶい褐色	やや 粗	良	10%	土坑 A040	
44	27	73	弥生 土器	壺	26.40	(3.80)	ヨコナデ/ヨコナ デ	(内)10YR8/2 灰白 (外)NS3/0 軸輪	やや 密	軟	10%	土坑 A040	範状L線文 状、櫛擦波 状文
44	74	74	弥生 土器	壺	22.80	(8.00)	磨滅/指痕/磨滅	(内)10YR8/1 灰白 (外)7.5YR8/3 浅黃褐色	やや 粗	軟	15%	土坑 A040	外面に麻斑
44	27	75	弥生 土器	壺	24.00	(26.00)	磨滅/指痕/磨滅、 ハケ?	(内)10YR6/1 塚灰 (外)5YR8/4 淡褐色	やや 粗	軟	15%	土坑 A045	広口短頸 壺、凹線文、 櫛擦波狀文、櫛擦 痕突文
44	26	76	弥生 土器	壺	20.10	(7.30)	ヨコナデ/磨滅 /ヨコナデ・ハケ	(内)10YR7/3 にぶい黃褐色 (外)10YR7/3 にぶい黃褐色	やや 密	良	35%	土坑 A049	広口短頸壺
44	27	77	弥生 土器	壺	17.00	(4.70)	ヨコナデ/磨滅 /ヨコナデ・ハケ?	(内)7.5YR8/2 淡黃褐色 (外)10YR8/2 灰白	やや 粗	良	35%	土坑 A084	広口短頸 壺、燒成前 穿孔
45	27	78	弥生 土器	壺	20.00	(6.20)	ヨコナデ/ハケ /ヨコナデ・ハケ	(内)10YR8/2 灰白 (外)5YR6/6 棕褐色	粗	良	40%	土坑 A092	広口短頸 壺
45	26	79	弥生 土器	壺	20.00	(8.50)	ヨコナデ/磨滅 /ヨコナデ・磨滅	(内)10YR8/2 灰白 (外)10YR8/2 灰白	やや 粗	良	20%	土坑 A092	広口短頸 壺、櫛擦波 状文
45	27	80	弥生 土器	壺	29.00	(4.20)	ヨコナデ/磨滅 /ヨコナデ・磨滅	(内)10YR8/2 灰白 (外)10YR8/2 灰白	粗	良	10%	土坑 A092	
45	27	81	弥生 土器	鉢	27.00	(4.60)	ヨコナデ/ヨコナ デ	(内)12.5Y7/2 黄褐色 (外)2.5Y8/1	やや 密	良	15%	土坑 A092	櫛擦波狀文、 櫛削削突文
45	26	82	弥生 土器	鉢		(7.25)	ナデ/工具痕/磨 滅	(内)10YR8/1 灰白 (外)7.5YR5/3 にぶい褐色	やや 密	良	10%未満	土坑 A092	凹線文
45	26	83	弥生 土器	鉢	18.00	(7.70)	磨滅/ハケ?	(内)10YR8/2 灰白 (外)10YR8/2 灰白	密	良	20%	土坑 B027	凹線文、外 面に黒斑
45	27	84	弥生 土器	高杯脚 底部	(12.80)	12.30	シボリ痕・ハラケ ズリ・ヨコナデ /ミガキ	(内)10YR3/1 黑褐色 (外)10YR3/1 黑褐色	粗	良	100%	ピット A059 底部	凹壁内塊、 内面にコ ゲ、外面上 スヌ

岡 岡 番 番号	出 版 番 番号	遺 物 番 番号	種 別	器種	上径 (底径) (cm)	器高 (残存 高) (cm)	調整 内面/外面	色調	胎土	焼成	口縁部 残存率 (底部 残存率)	出土位置	備考
46	29	85	弥生 土器	甕	27.00	(6.00)	磨滅/ヨコナデ・ 磨滅	(内)10YR5/3に赤い黄褐 (外)10YR5/4に赤い黄褐	密	良	50%	溝 A011 上 肩	広口甕、牛 頭四脚彫、 帶輪状文、刻文文
46	29	86	弥生 土器	甕杯	32.00	(8.00)	ヨコナデ・磨滅	(内)2.5YB/1灰白 (外)7.5YR8/2灰白	やや 粗	良	20%	溝 A011 上 肩	大型、凹盤 充填
46	28	87	弥生 土器	甕	16.20	(7.40)	ヨコナデ・指紋	(内)2.5YR7/6橙 (外)2.5YR7/6橙	やや 粗	數	30%	溝 A034	直口甕、大 型、凹盤文
46	28	88	弥生 土器	水差	19.60	(9.00)	ヨコナデ・指痕	(内)10YR8/3浅黄褐 (外)5YR7/6橙	やや 粗	數	50%	溝 A034	大型、凹盤文
46		89	弥生 土器	高杯側 土器部	(15.90)	(2.80)	磨滅・ヨコナデ 磨滅・ヨコナデ	(内)7.5YR5/2灰褐 (外)7.5YR5/2灰褐	やや 粗	數	胎部 10%	溝 A086	
46	28	90	弥生 土器	鉢	6.40	7.20	ナデ・ケズリ/ミ ガボン	(内)2.5YB/2灰白 (外)2.5YB/2灰白	密	ぼぼ 光形	溝 A086	小型、外面 に黒斑	
46	29	91	弥生 土器	腹底部	(5.80)	(4.70)	磨滅・指ナデ/ナデ 指オサエ	(内)2.5Y3/1 黑褐 (外)7.5YR4/2灰褐	やや 粗	良	(100%)	溝 A086	外面にスス
46	29	92	弥生 土器	甕	16.70	(3.80)	ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ハケ	(内)2.5YB/2灰白 (外)ヨコナデ・ハケ (内)10YR8/3浅黄褐	やや 粗	良	15%	溝 A089	小型
46		93	弥生 土器	甕	14.00	(4.50)	ヨコナデ・磨滅 ヨコナデ・磨滅	(内)10YR8/2/7/1灰白 (外)5YR7/6橙	やや 粗	良	15%	溝 A089	小型
46	28	94	弥生 土器	高杯	12.80	(5.50)	ヨコナデ・磨滅 ヨコナデ・磨滅	(内)10YR8/2灰白 (外)10YR8/1灰白	密	良	90%	溝 A089	小型、凹盤文、 円錐光環、外面上 に黒斑
46	28	95	弥生 土器	甕	16.00	(3.20)	ヨコナデ・磨滅	(内)7.5YR8/3浅黄褐 (外)5YR8/4淡橙	やや 粗	數	40%	溝 A089	広口甕、焼 成前削孔
46	28	96	弥生 土器	甕	20.30	(16.10)	ヨコナデ・指痕 ヨコナデ・磨滅	(内)10YR8/1灰白 (外)5YR8/3淡橙	やや 粗	良	30%	溝 A089	圓上復元、 広口切削痕 青、列点文、 燒成前削孔
46		97	弥生 土器	底部	(6.70)	(2.50)	磨滅/指オサエ	(内)2.5YB/2灰白 (外)10YR5/2灰黃褐	粗	良	(100%)	溝 A089	
46	28	98	弥生 土器	底部	(7.40)	(5.20)	磨滅/ヘラヶズリ/ 指オサエ	(内)10YR6/1灰白 (外)10YR6/2灰黃褐	やや 粗	良	(100%)	溝 A089	外面にスス
46		99	弥生 土器	甕	14.00	(4.70)	ヨコナデ・ナデ?/ ヨコナデ・磨滅	(内)2.5YB/1灰白 (外)5YR5/6明赤褐	やや 粗	良	10%	溝 B025	小型
46	29	100	弥生 土器	底部	(4.80)	(1.50)	指ナデ/指オサエ	(内)10YR5/2灰黃褐 (外)2.5YR4/2灰赤	やや 粗	良	(90%)	溝 B025	牛胸西體 蓋、内面に ゴケ
47	30	101	弥生 土器	高杯	29.40	(8.80)	ヨコナデ・磨滅 ヨコナデ・ナデ	(内)10YR8/2灰白 (外)10YR8/2灰白	やや 粗	良	50%	溝 A033 上 肩	大型、凹盤 充填
47	30	102	弥生 土器	甕	13.80	(6.60)	磨滅/磨滅	(内)2.5YR6/6橙 (外)2.5YR6/6橙	粗	良	100%	溝 A033 上 肩	山口短縫蓋
47	30	103	弥生 土器	甕	14.50	(7.50)	ナデ・指オサエ ナデ	(内)5YR7/6橙 (外)5YR6/6橙	粗	良	70%	溝 A033 上 肩	止口短縫
47	30	104	弥生 土器	甕	11.30	(12.10)	ナデ/ナデ	(内)2.5YR5/6橙 (外)10YR5/6赤	粗	良	90%	溝 A033 上 肩	長縫蓋
47	30	105	冰化 土器	甕	15.80	(27.10)	ヨコナデ・指ナデ ナデ/ナデ	(内)2.5YB/1灰白 (外)10YR8/1灰白	板	良	90%	溝 A033 上 肩	長縫蓋、浮 文
47	29	106	弥生 土器	腹底部	(5.60)	(8.60)	磨滅/ナデ/ナデ/ 指ナデ	(内)10YR7/2に赤い黄褐 (外)10YR7/2に赤い黄褐	やや 粗	數	(70%)	溝 A033 上 肩	
47	29	107	弥生 土器	底部	(5.20)	(6.50)	磨滅/磨滅・指ナ デ	(内)N2/1 黑 (外)10YR6/6赤褐	やや 粗	良	(100%)	溝 A033 上 肩	
47	30	108	弥生 土器	底部	(6.30)	(8.70)	ナデ/ナデ・指ナデ/ 指ナデ	(内)10YR8/1灰白 (外)2.5YB/1灰白	密	良	(100%)	溝 A033 上 肩	外面に黒斑
47	29	109	弥生 土器	鉢	42.60	(13.70)	ヨコナデ・ミガキ 指痕・ナデ+ミガ キ/ヨコナデ・ハ ケ+ナラナデ・ミ ガキ・ナデ	(内)2.5Y7/1灰白 (外)2.5YB/1灰白	やや 密	やや 數	15% (25%)	溝 A033 上 肩	岡上復元、 人型
47	30	110	弥生 土器	鉢	13.20	8.40	ナデ/ナデ・指 サエ	(内)2.5Y5/1 黑 (外)2.5Y6/1 黑	やや 粗	良	95%	溝 A033 上 肩	小型、外面 にスス
48	31	111	反貫 土器	甕	26.20	(6.45)	ヨコナデ・ヨコナ デ・タタキ	(内)2.5Y8/2灰白 (外)2.5Y8/2灰白	密	良	20%	B 区 5 区 6-8 肩	
48	31	112	反貫 土器	甕	26.30	(4.60)	ヨコナデ・ハケ ナデ/ヨコナデ・ ハケ+カゼリ	(内)N2/0 黑 (外)N2/0 黑	やや 粗	良	10%	A3-a3-III 区 6-8 肩	
48	31	113	反貫 土器	皿	7.00	1.50	ヨコナデ・ナデ ナデ/ヨコナデ・ ナデオサ・エナナデ	(内)10YR8/3浅黄褐 (外)10YR7/3に赤い黄褐	やや 粗	良	85%	A2 f10-II 区 6-8 肩	

岡 井 番 号	岡井 番号	遺物 番号	種別	器種	口径 (底径) (cm)	器高 (残存 高) (cm)	調整 内面/外面	色調	胎土	焼成	口縁部 残存率 (底部 残存率)	出土位置	備考
48	31	114	土師 質上 器	皿	8.40	1.30	ヨコナデ・ナデ /ヨコナデ・振オサ エーナデ	(内)10YR7/2にぶい黄橙 (外)10YR7/2にぶい黄橙	密	良	85%	A2-h8 III区 6-8層	
48	31	115	瓦體	皿	7.80	1.20	ヨコナデ・唐滅 /ヨコナデ・ナデ	(内)N3/暗灰 (外)N3/暗灰	密	良	30%	A3-c1 IV 6-8層	
48	31	116	瓦體	碗	(11.00)	(4.50)	ミガキ / ミガキ	(内)5PB4/1暗青灰 (外)5PB4/1暗青灰	密	良	20%	A2-e9 和田 6-8層	
48	31	117	須恵 器	杯蓋	10.00	3.35	圓輪ナデ / 圓輪ヘ ラケズリ・回転ナ デ・火舟部・ヘラ羽 リ	(内)N6/灰 (外)N6/灰	密	良	100%	A3-c2-III区 10層	ヘラ記号
48		118	須恵 器	杯蓋	12.40	3.90	回転ナデ・當て具 底座 / 圓輪ナデ・ 回転ヘラケズリ	(内)N6/0灰 (外)N1/0灰	密	良	25%	A2-f9 III区 10層	
48		119	須恵 器	杯身	14.00	3.40	圓輪ナデ / 圓輪ナ デ・回転ヘラケズリ	(内)N7/灰白 (外)N6/灰	密	良	10%	A2-f10-III区 10層	
48		120	須恵 器	杯身	12.00	3.00	圓輪ナデ / 圓輪ナ デ・(内)N6/0灰 (外)N6/0灰	密	良	20%	A2-e10-III区 10層		
48	33	121	弥生 土器	壺	12.00	(4.70)	ヨコナデ・板ナデ?	(内)7.5YR8/1灰白 (外)7.5YR8/1灰白	やや 粗	良	10%	A2-f8-IV区 11層	瓶頭壺、袋 形前孔
48		122	弥生 土器	壺	17.35	(5.20)	唐滅 / 唐滅	(内)10YR8/3西黃橙 (外)10YR8/3浅黃橙	やや 粗	良	25%	A2-e10-II区 11層	肩平頭 壺、腹状文
48	31	123	土師 器	壺	25.80	(9.80)	唐滅・ハケ / 唐滅	(内)5YR5/6明赤褐 (外)SYR5/6明赤褐	やや 粗	良	15%	A3-c2-II区 12層	複合II型壺
48	31	124	土師 器	高脚 部		(3.90)	唐滅 / 唐滅	(内)7.5YR7/4にぶい橙 (外)7.5YR7/4にぶい橙	密	軟		A3-c3-1 IV区 12層	
48	31	125	土師 器	製塙土 器脚台	(2.40)	(2.85)	唐滅 / 唐滅	(内)7.5YR8/2灰白 (外)7.5YR8/2灰白	やや 粗	良	(90%)	A3-c3-III区 12層	
48	31	126	土師 器	製塙土 器脚台	(3.90)	(2.60)	唐滅 / 指オサエ	(内)12.5YR7/4淡赤橙 (外)12.5YR7/4淡赤橙	密	やや 軟	(100%)	A2-e9-II区 11層	
48	31	127	土師 器	製塙土 器脚台	(3.60)	(1.90)	唐滅 / 唐滅	(内)10YR8/3浅黃橙 (外)10YR8/3浅黃橙	やや 粗	良	(80%)	A3-c2-IV区 12層	
49	32	128	弥生 土器	壺	15.40	(5.10)	ナデ・ハケ・タタ キ	(内)7.5YR8/3浅黃橙 (外)7.5YR7/4にぶい橙	やや 粗	良	15%	A1T14c 層	
49	32	129	弥生 土器	壺	14.20	(6.10)	唐滅 / 唐滅	(内)5YR6/6橙 (外)5YR6/6橙	粗	良	20%	A4T14c 層	
49	32	130	弥生 土器	壺	(3.40)	(10.70)	ハケ / タタキ	(内)5YR6/6橙 (外)5YR6/6橙	密	良	(100%)	A4T14c 層	小型、外面 にスス
49	32	131	弥生 土器	鉢	12.60	7.40	ヨコナデ・ハケ /ヨコナデ・工具痕、 底面:ナデ	(内)7.5YR7/6橙 (外)7.5YR5/6明褐	密	良	90%	A4T14c 層	小型、外面 に黒痕
49	32	132	弥生 土器	高杯	18.00	(4.80)	ナデ / ナデ	(内)10YR8/2灰白 (外)10YR8/2灰白	密	良	10%	A1T14c 層	有柄高杯
49	32	133	弥生 土器	高杯	23.00	(12.00)	ヨコナデ・ミガキ ・シリボ・垂・ヨコナ デ・ヨコナデ・ミ ガキ	(内)5YR6/6橙 (外)7.5YR7/3にぶい橙	やや 密	良	95%	A1T14c 層	
49	32	134	弥生 土器	手焙	15.30	(9.10)	ナデ・指オサエ・ ヘラケズリ	(内)7.5YR7/3にぶい橙 (外)10YR7/4にぶい黄橙	やや 密	良	70%	A4T14c 層	覆い部欠 損、外面に スス
49	32	135	弥生 土器	底部	(2.80)	(2.90)	ナデ / タタキ	(内)10YR3/1褐色 (外)2.5YR5/6明赤褐	やや 粗	良	(100%)	A4T14c 層	
49	32	136	弥生 土器	底部	(3.30)	(2.00)	ナデ・指オサエ、 底面:ナデ	(内)12.5YR7/2灰黃 (外)12.5YR7/2灰黃	密	良	(60%)	A1T14c 層	
50	33	137	弥生 土器	壺	13.00	(4.50)	唐滅 / ハケ / 唐滅 ・ハケ	(内)10YR8/3浅黃橙 (外)10YR8/3浅黃橙	やや 粗	良	20%	A2-h7-IV区 16層	小型
50	33	138	弥生 土器	壺	16.00	(10.00)	ヨコナデ・ナデ /ヨコナデ・ハケ	(内)10YR8/1灰白 (外)10YR8/1灰白	やや 粗	良	40%	A2-g10 IV 15層	外曲面にスス
50	33	139	弥生 土器	壺	13.20	(4.40)	ヨコナデ・唐滅 /ヨコナデ・唐滅	(内)7.5YR5/3にぶい褐 (外)7.5YR5/2灰黃褐	やや 密	良	20%	A2-h6 IV 15層	広口形浮 文、生 物西藏處
50	33	140	弥生 土器	壺	22.00	(4.40)	ヨコナデ・ハケ /ヨコナデ・ナデ?	(内)10YR8/1灰白 (外)10YR7/3にぶい黃橙	やや 粗	良	20%	A2-f8-III区 15層	広口追頭 壺、燒成前 空孔
50	33	141	弥生 土器	壺	17.00	(5.00)	ヨコナデ・ハケ /ヨコナデ・唐滅	(内)7.5YR8/2灰白 (外)7.5YR8/2灰白	やや 粗	良	25%	A2-g9-I 区 16層	広口短頸 壺、猫耳 状文

図 番 号	開 拓 番 号	遺 物 番 号	種 別	器種	全 径 (底 径) (cm)	高 (底 高 (cm))	調 整 内面/外面	色 調	胎 上	燒 成	土壤部 残存率 (底部 残存率)	出土位置	備 考
50	33	142	弥生 土器	壺	18.00	(3.80)	ヨコナデ / ヨコナ デ	(内)5YR8/3 黄 (外)10YR8/2 白	密	良	10% 未満	B 区 4 区 15 層	段状口縁 袋、円形浮 文
50		143	弥生 土器	壺	20.20	(8.50)	磨滅 / 磨滅	(内)10YR8/2 黄褐 (外)10YR7/4 に赤い黄 褐	やや 粗	良	25%	A2-f10-II + IV 区 16 層	直口壺、凹 鏡文
50		144	弥生 土器	高杯	13.40	(7.90)	磨滅 / ケズリ	(内)10YR7/2 に赤い黄 褐 (外)10YR7/2 に赤い黄 褐	やや 粗	良	25%	A2-g9 区 15 層	小壺、内面 にコゲ、外 面にスス
50	33	145	弥生 土器	ミニ チャウ	4.80	(4.00)	磨滅 / ヨコナデ + 磨滅	(内)7.5YR8/1 灰白 (外)7.5YR8/1 灰白	やや 粗	良	20%	A2-f10-III 区 15 層	
50	33	146	弥生 土器	底盤	(9.80)	(5.20)	ハケ・指オサエ + ナデ・指オサエ	(内)2.5Y7/1 灰白 (外)2.5Y8/2 灰白	やや 粗	良	(100%)	B 区 5 区 15 層	
50		147	弥生 土器	底盤	(9.60)	(4.30)	磨滅 / 磨滅	(内)2.5YR/1 灰白 (外)5YR7/6 琉	やや 粗	やや 粗	(100%)	A2-g9-II 区 16 層	
50		148	弥生 土器	底盤	(8.00)	(5.55)	磨滅 / 磨滅	(内)10YR8/3 黄褐 (外)10YR8/3 黄褐	やや 粗	やや 粗	(100%)	A2-f10-III + IV 区 16 層	外面に黒斑
50	33	149	弥生 土器	底盤	(8.10)	(7.80)	磨滅 / 磨滅	(内)2.5Y8/3 黄 (外)2.5Y8/3 黄	粗	良	(100%)	A2-g7 II 区 15 層	外面に黒斑
21	u1.1	弥生 土器	壺			(7.30)	磨滅 / 磨滅	(内)10YR8/1 灰 (外)2.5Y6/6 琉	密	良	10% 未満	自然道路 A142 下層	複合口縁壺
21	u1.2	弥生 土器	壺			(4.90)	磨滅 / タタキ	(内)10YR7/3 に赤い黄 (外)10YR4/2 灰青	密	良	10% 未満	自然道路 A142 下層	小壺、外 面にスス
22	u1.3	弥生 土器	高杯?			(4.40)	磨滅 / 磨滅	(内)10YR8/3 黄褐 (外)10YR4/1 灰白	やや 密	やや 粗	10% 未満	壁穴住居 A048 内土 坑 A206a	凹彎文
22	u1.4	弥生 土器	壺?			(3.60)	磨滅 / 磨滅	(内)2.5YR8/1 灰 (外)10YR3/1 灰	やや 粗	やや 粗	10% 未満	壁穴住居 A048	直口壺? 凹彎文
32	u1.5	弥生 土器	壺			12.20	ナデ・ハケ / タチ ハケ・タタキ	(内)10YR8/2 灰白 (外)5YR8/4 に赤い	やや 粗	良	10% 未満	A4T14 番	外面にスス

### 粘土塊観察表

図 番 号	開 拓 番 号	遺 物 番 号	全 長 (cm)	幅 (cm)	厚 さ(cm)	色 調	出土位置		備 考
51	34	150	4.20	4.80	5.40	7.5YR7/4 に赤い	A2-h7-I 区 基本層序 16 層		密度、斑状構造
	34	u1.6	9.20	4.20	6.50	5YR7/6 粗	A2-h7-I 区 基本層序 6-8 層		一部黒色化、U 字状溝
	34	u1.7	11.90	8.30	4.80	5YR7/6 粗	A2-g9-III 区 基本層序 15 層		U 字状溝、内面黒色化
	34	u1.8	3.00	3.00	2.00	2.5Y6/6 粗	上坑 A085		
	34	u1.9	3.00	2.80	2.20	7.5YR8/1 灰白	壁穴住居 A048 内土坑 A103		
	34	u1.10	4.20	2.50	3.50	5YR7/4 に赤い	B 区 3 区 基本層序 16 層		全体に黒色化
	34	u1.11	5.70	4.30	2.80	7.5YR8/3 浅黄	A2-h7 I 区 基本層序 16 層		2 面削平、軟質
	34	u1.12	7.00	5.00	3.50	2.5Y7/6 粗	A2-h7-II 区 基本層序 16 層		一部黒色化
	34	u1.13	8.20	5.10	2.50	5YR8/4 深紫	A2-h7 III 区 基本層序 16 層		ナデによる凹み

石器観察表

器 器番号	図版 番号	遺物 番号	器種	石材	色調	全長 (横×長) (cm)	幅 (最大幅) (cm)	厚さ (最大厚) (cm)	重量 (g)	出土位置	備考
52	35	151	打製石器	サヌカイト	淡灰色	(2.25)	1.65	0.50	1.5	十坑 A092	基部欠損
52	35	152	打製石器	サヌカイト	灰色	(1.65)	1.45	0.35	0.6	A2-g9-I区 15層	先端部欠損
52	35	153	打製石器	サヌカイト	灰色	(2.90)	2.00	0.35	1.4	十坑 A035 上層	基部・端欠損
52	35	154	打製石器	サヌカイト	灰色	(2.25)	1.05	0.45	1.4	A2-d10-I区 6-8層	先端部欠損
52	35	155	打製石器	サヌカイト	灰色	(3.15)	2.35	0.55	3.9	壁穴住居 A048 床上層	先端部基部欠損
52	35	156	打製石器	サヌカイト	淡灰色	(2.65)	(2.10)	0.65	2.3	壁穴住居 A048 床上層	一側縫欠損
52	35	157	打製石器	サヌカイト	灰色	3.65	2.15	0.55	3.2	壁穴住居 A048 床上層	先形
52	35	158	打製石器	サヌカイト	灰色	(2.90)	1.60	0.55	2.5	壁穴住居 A048 内溝 A100	基部欠損
52	35	159	打製石器	サヌカイト	灰色	(3.05)	1.25	0.55	1.9	A2-g8-I区 15層	基部欠損
52	35	160	打製石器	サヌカイト	灰色	4.65	1.40	0.75	3.5	壁穴住居 A048	完形
52	35	161	打製石器	サヌカイト	灰色	(4.10)	1.30	0.55	3.1	A2-f10-I区 11層	先端部欠損
52	34	162	打製石器	サヌカイト	灰色	(3.70)	3.30	1.20	11.2	十坑 A040	先端部基部・未成品か
52	34	163	打製石器	サヌカイト	墨灰色	(4.55)	2.20	1.20	15.0	A2-g9 区 10層	先端部基部・未成品か
52	34	164	打製石器	サヌカイト	灰色	(5.20)	3.15	1.60	25.2	十坑 A016 落ち込み内溝	先端部基部・未成品か
52	34	165	打製尖頭器	サヌカイト	灰色	6.85	2.60	1.20	19.9	A2-g8-I区 15層	未成品か
52	36	166	打製尖頭器	サヌカイト	淡灰色	8.65	2.80	0.90	21.5	土坑 A092	未成品か
52	36	167	スクレイバーカー?	サヌカイト	淡灰色	4.65	3.45	1.50	18.7	土坑 A092	先形?・楔か
52	36	168	スクレイバーカー?	サヌカイト	灰色	(5.05)	3.75	1.70	21.8	壁穴住居 A048	一端欠損
52	36	169	スクレイバーカー?	サヌカイト	灰色	6.85	2.35	0.85	12.8	A2-g8-I区 10層	一部欠損
52	36	170	スクレイバーカー?	サヌカイト	灰色	9.70	6.00	1.85	120.4	土坑 A032	先形・未成品か
52	36	171	スクレイバーカー?	サヌカイト	灰色	(7.65)	3.90	0.70	22.8	溝 A011 上層	一端欠損
52	36	172	スクレイバーカー?	サヌカイト	灰色	(6.05)	3.70	1.50	25.4	壁穴住居 A048	端欠損
53	38	173	筋縫車	片岩	淡緑色	4.80			0.55	壁穴住居 A048 床上層	一端欠損
53	38	174	石磨丁	片岩	淡緑灰色	(8.05)	(4.35)	0.75	30.0	A2-h7-II区 16層	2/3欠損
53	38	175	石磨丁	片岩	淡緑色	(8.55)	4.45	0.80	39.3	土坑 A040	1/2欠損
53	38	176	石磨丁	片岩	淡緑色	(10.95)	4.70	0.80	60.7	A2-f9-III区 15層	1/4欠損
53	38	177	石磨丁	片岩	淡緑色	11.10	5.35	1.00	79.6	A2-f10-III区 10層	未成品
53	38	178	礫半片刃石刀	片岩	綠色	3.70	1.90	0.60	7.6	壁穴住居 A048	刃部一部欠損
53	38	179	柱状片刃石刀	片岩	綠灰色	(7.40)	(1.80)	(1.10)	17.0	土坑 A016	刃部基部欠損、小片
53	37	180	太型蛤刃石刀	閃緑岩	綠色	(8.55)	7.55	5.10	557.5	壁穴住居 A015 内ビザ ト A134	刃部基部欠損
54	37	181	砥石	砂岩	淡灰色	(3.65)	3.70	1.90	31.8	O3-j4 区 6-8層	一端欠損
54	37	182	砥石	砂岩	淡緑灰色	(10.70)	2.85	4.00	174.5	A2-h8 区 15層	両端欠損
54	37	183	砥石	砂岩	淡灰色	(6.40)	(2.00)	(4.00)	51.8	土坑 A012	両端欠損
54	37	184	砥石	砂岩	灰白色	4.75	4.10	3.50	83.1	壁穴住居 A048 内溝 A117	完形
54	37	185	敲石	火山岩	淡褐色	(3.70)	(6.60)	5.00	115.4	A2-f8-III区 10層	一端欠損
37	w.114	RF	サヌカイト	灰色	4.05	1.80	0.75	6.5	A2-f10-III区 10層	自然面あり、両端に調整削離	
37	w.115	楔?	サヌカイト	灰色	4.05	2.20	0.70	4.3	A2-g8-I区 15層	一端折損、一端に潰れか	
37	w.116	RF	サヌカイト	淡灰色	2.55	1.80	0.70	2.9	壁穴住居 A048 床上層		
37	w.117	楔?	サヌカイト	灰色	3.70	1.20	1.10	3.6	壁穴住居 A048	一端に潰れ	
37	w.118	楔?	サヌカイト	灰色	2.70	2.45	0.80	5.4	壁穴住居 A048	両端に潰れ	
37	w.119	RF	サヌカイト	灰色	6.10	3.85	1.30	29.1	A2-g7-II区 15層	自然面あり	
37	w.120	RF	サヌカイト	灰色	5.75	3.70	1.80	31.4	土坑 A016 落ち込み内溝	自然面あり	
37	w.121	楔?	サヌカイト	灰色	3.80	3.00	1.15	14.9	土坑 A025	両端に潰れ、階段状削離	
37	w.122	楔?	サヌカイト	灰色	4.20	3.05	1.30	12.2	A2-f10-III区 15層	3辺に潰れ	
37	w.123	剥片	サヌカイト	灰色	7.40	5.20	1.20	34.1	壁穴住居 A048 内土坑 A206a	自然面あり	
37	w.124	RF	サヌカイト	灰色	8.30	6.90	3.00	118.7	A2-g7-II区 15層	自然面あり	

## 参考文献

- 池峯龍彦 2006「和泉北部地域における弥生時代集落の動向」『みずほ』第40号 100-118
- 和泉市教育委員会 1993『和泉市の文化財』
- 久米雅雄 1985『和気遺跡発掘調査概要報告書—都市計画道路大阪岸和田南海線建設地内—』大阪府教育委員会
- 小山正忠・竹原秀雄 『新版 標準土色帖』1997年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修  
財団法人日本色彩研究所色票監修
- 杉本清美・藤沢真依・小山田宏一 2007『寺田遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告 2006-7 大阪府教育委員会
- 辰巳和弘編 1999『觀音寺山遺跡発掘調査報告書』同志社大学歴史資料館調査報告第2冊 同志社大学歴史資料館
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園
- 地村邦夫 1999『和泉地域第Ⅲ・Ⅳ様式の編年—97年度調査出土土器の検討—』『池上曾根遺跡—拠点集落東方の墓域の調査—』大阪府埋蔵文化財調査報告 1998-1 大阪府教育委員会 88-110
- 中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 西村歩ほか 1996『下町遺跡—都市計画道路常磐浜寺線建設に伴う発掘調査報告書—』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第18集
- 西村歩・池峯龍彦 2006『古式土師器編年集成 和泉地域』『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター 145-175
- 樋口吉文 1990『和泉地域』『弥生土器の様式と編年—近畿編Ⅱ—』木耳社 3-76
- 藤澤真依 2001『六尾遺跡・六尾南遺跡・馬場笠ヶ遺跡・摩湯北遺跡』大阪府教育委員会
- 正岡大実 2008『建物内部施設—中央土坑とその周辺—』『研究調査報告』第6集 (財)大阪府文化財センター 131-134
- 三木弘 2007『大町遺跡—府営久米町第二住宅建て替えに伴う発掘調査—』大阪府埋蔵文化財調査報告 2006-2 大阪府教育委員会
- 森本徹・廣瀬時習・島崎久恵・市村慎太郎 2007『摂河泉古墳時代集落の基礎研究』『研究調査報告』第5集 (財)大阪府文化財センター 115-231
- 和氣遺跡調査会 1979『和氣 和気遺跡発掘調査報告書』

# 図 版

図版一 遠景・全景



1 寺田遺跡遠景(西から観音寺山遺跡を望む)



2 B区全景(北西から)



3 B区全景(南東から)

図版二  
全景



1 A区第2面全景(垂直)

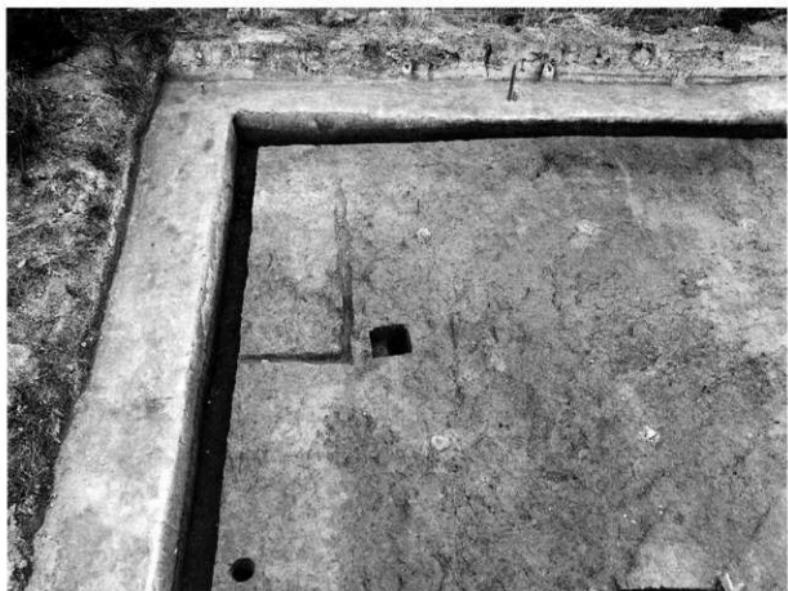


2 A区第3面全景(垂直)

図版三 第一面遺構



1 A区第1面全景(南西から)



2 溝A136(南東から)

図版四 第一面遺構



1 B区第1面全景(北東から)



2 溝A138検出状況(北東から)



3 溝A138完掘状況(北東から)

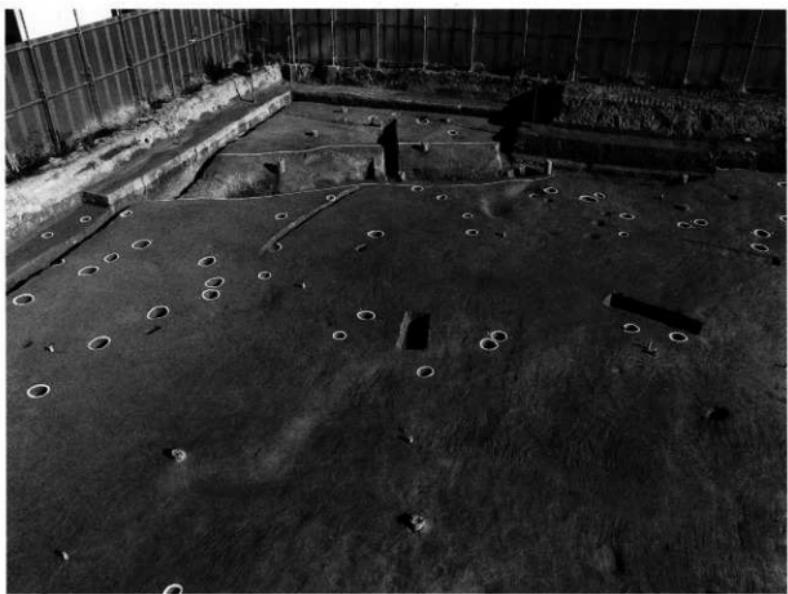


4 溝A138土層断面(南東から)



5 溝A136土層断面(南東から)

図版五 第二面遺構



1 A区第2面全景(南から)



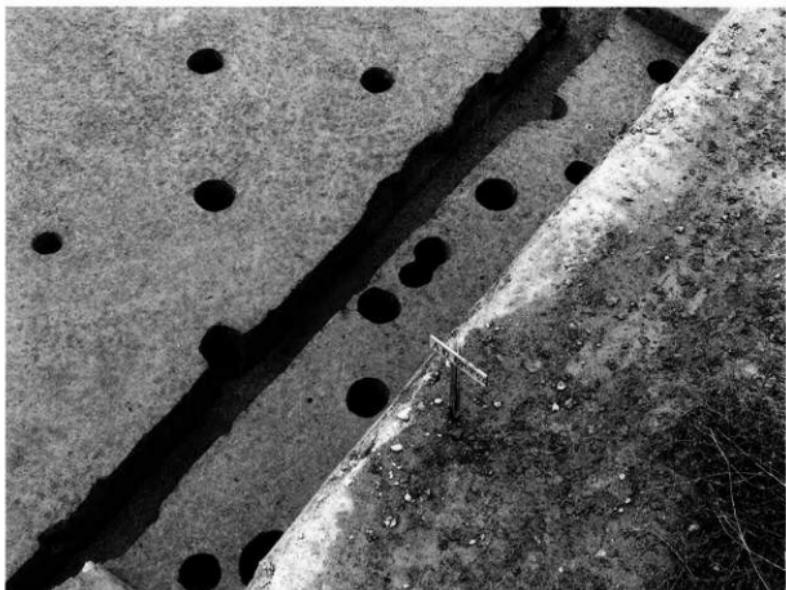
2 B区第2面全景(南東から)



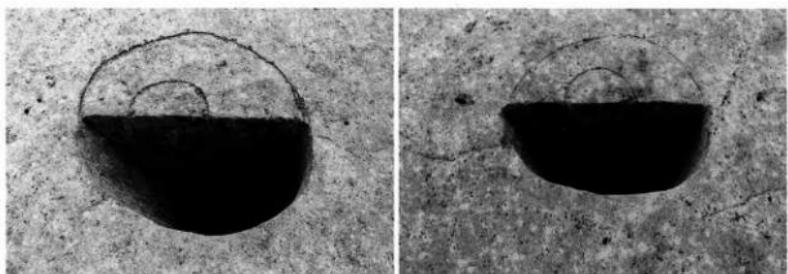
3 B区第2面全景(北西から)



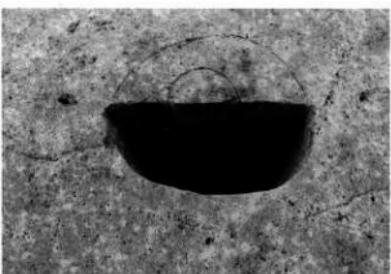
1 挖立柱建物 1 完掘状況(南から)



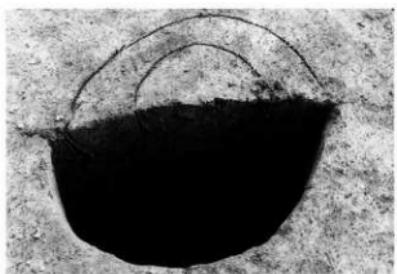
2 挖立柱建物 2 完掘状況(東から)



1 柱穴 A141-1 土層断面(北西から)



2 柱穴 A141-2 土層断面(北西から)



3 柱穴 A146-3 土層断面(北から)



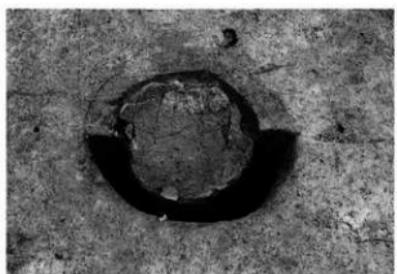
4 柱穴 A146-4 土層断面(北から)



5 土坑 A143 土器出土状況(北西から)



6 土坑 A143 土器出土状況(北東から)



7 ピット A139 土器出土状況(北東から)

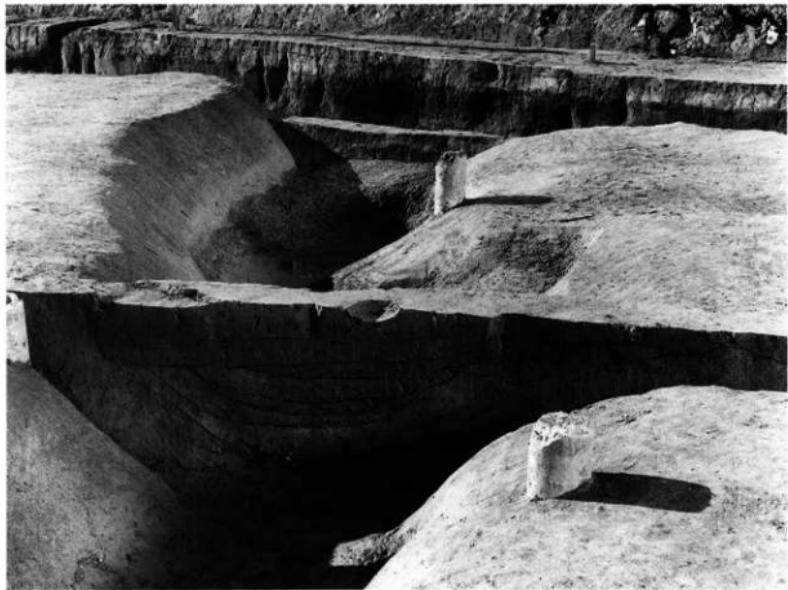


8 溝 B016 土層断面(南東から)

図版八 第二面遺構



1 自然流路 A142 完掘状況(東から)



2 自然流路 A142 土層断面(東から)

図版九 第三面遺構



1 A区第3面全景(北から)



2 A区第3面全景(北東から)

図版一〇 第三面遺構



1 B区第3面(北西から)



2 B区第3面(北西から)



3 B区第3面(南東から)



1 壺穴住居 A015 完掘状況(北から)



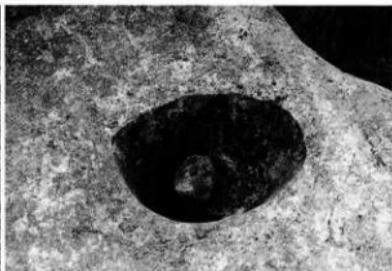
2 壺穴住居 A015 土層断面(北西から)



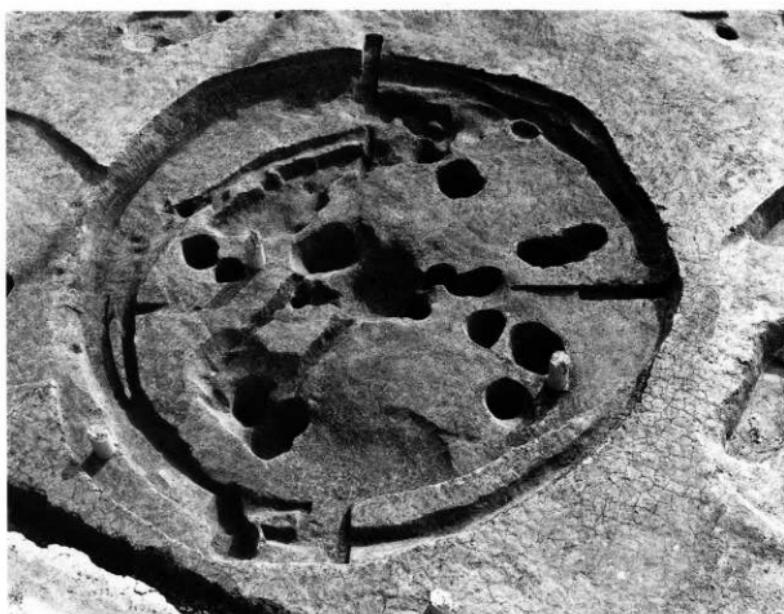
3 中央土坑 A133 土層断面(北東から)



4 壺穴住居 A015 土器出土状況(北から)



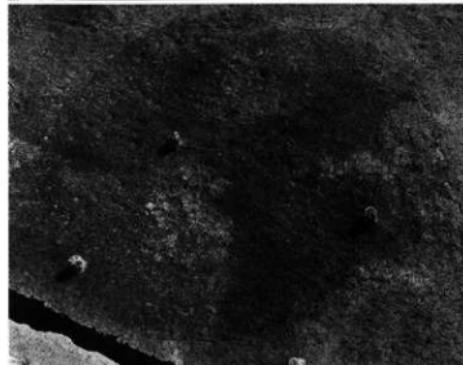
5 ピット A134 石斧出土状況(北東から)



1 積穴住居 A048 完掘状況  
(北から)



2 積穴住居 A048 完掘状況  
(北西から)



3 積穴住居 A048 検出状況  
(北から)

図版一三 第三面遺構



1 整穴住居 A048 土層断面(南東から)



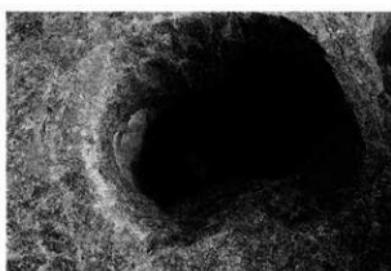
2 溝 A117・A118 土層断面(南から)



3 中央土坑 A206 完掘状況(北東から)



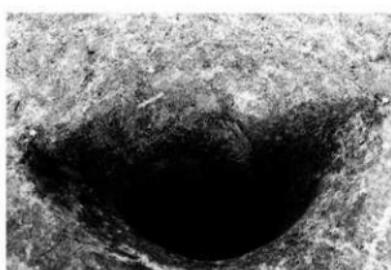
4 中央土坑 A206 土層断面(北から)



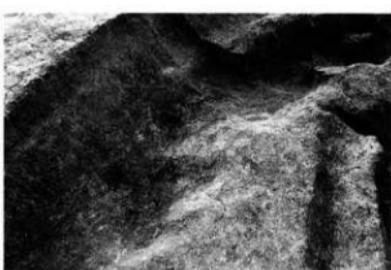
5 柱穴 A111 完掘状況(西から)



6 中央土坑 A104 土層断面(北西から)



7 柱穴 A101 土層断面(南西から)



8 土坑 A126 完掘状況(北東から)

図版一四 第三面遺構



1 穫穴住居 B026 完掘状況(北西から)



2 中央土坑 B041 完掘状況(南から)



3 溝 B044・B045 土層断面(西から)



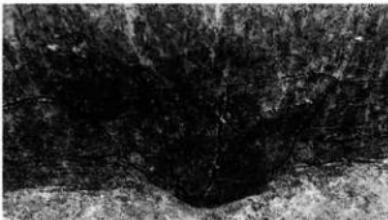
4 穫穴住居 B026 土層断面(北から)



5 穫穴住居 B026 土層断面(東から)

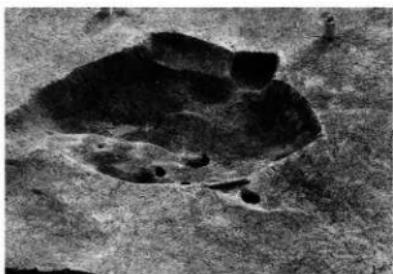


6 中央土坑 B042 土層断面(北東から)

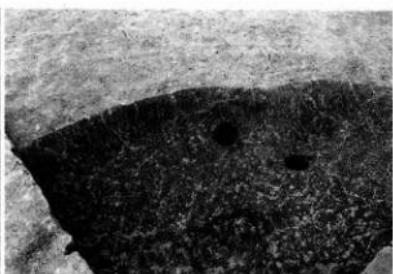


7 柱穴 B039 土層断面(北東から)

図版一五  
第三面遺構



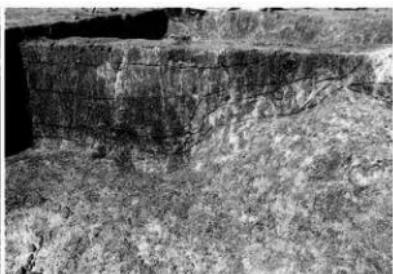
1 土坑 A012 完掘状況(北東から)



2 土坑 A012 完掘状況(南西から)



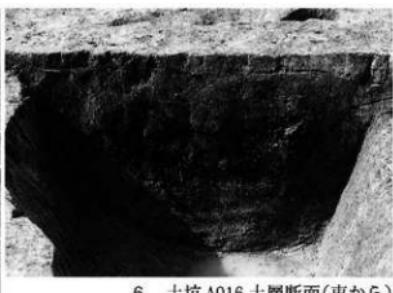
3 土坑 A012 土層断面(北東から)



4 土坑 A012 土層断面(南東から)



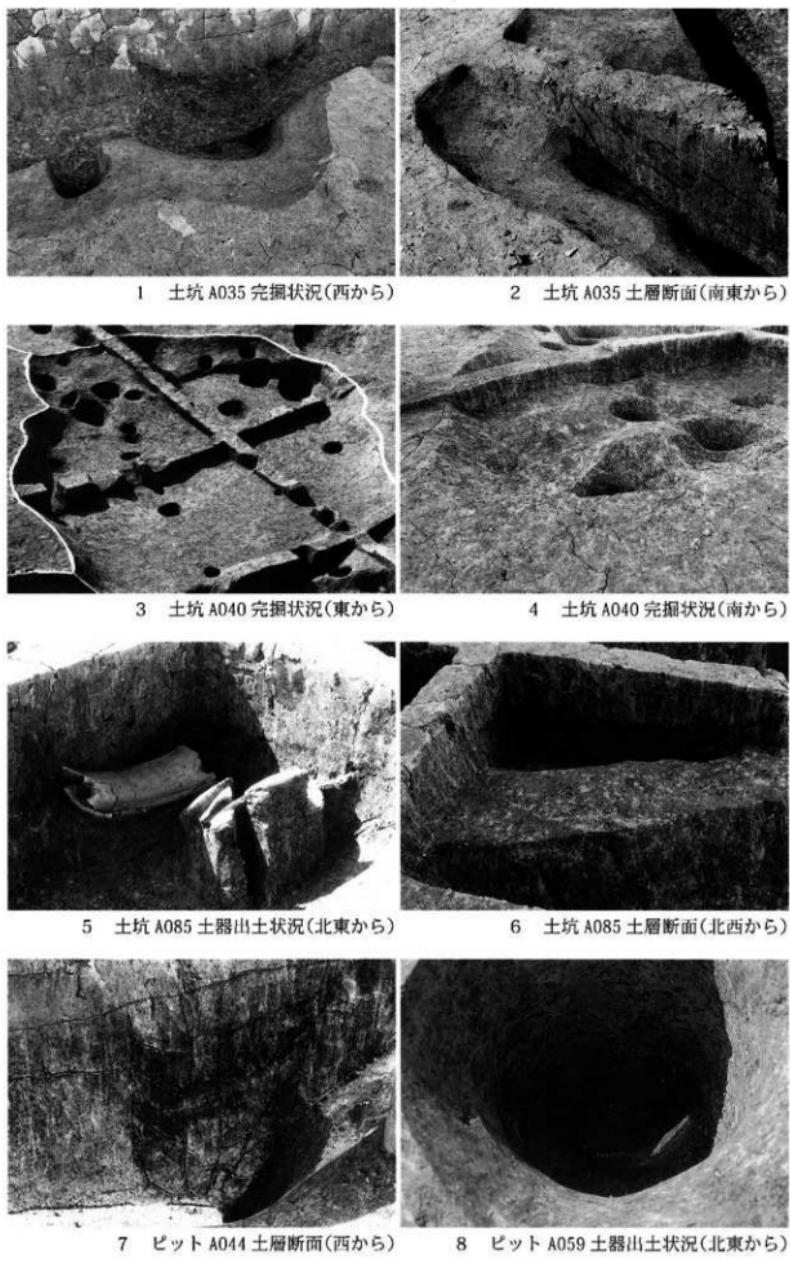
5 土坑 A016 完掘状況(北東から)



6 土坑 A016 土層断面(東から)



7 土坑 A016 土層断面(南東から)



図版一七 第三面遺構



1 溝 A011 完掘状況(北から)



2 溝 A011 土層断面(北から)



1 溝 A086 完掘状況(北から)



2 溝 A086 完掘状況(西から)



3 溝 A086・ピット A087 土層断面(北から)



4 溝 A089 完掘状況(東から)



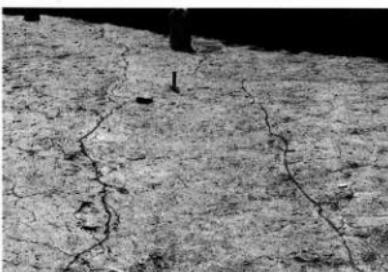
5 溝 A089・ピット A090 土層断面(西から)



6 溝 A094・土坑 A085 土層断面(北から)



1 溝 A033 完掘状況(北から)



2 溝 A033 検出状況(南から)



3 溝 A033 土層断面(南東から)



4 溝 A033 土器出土状況(北東から)



5 溝 A033 土器出土状況(北東から)



6 溝 A033 土器出土状況(南東から)



7 溝 A033 土器出土状況(北東から)

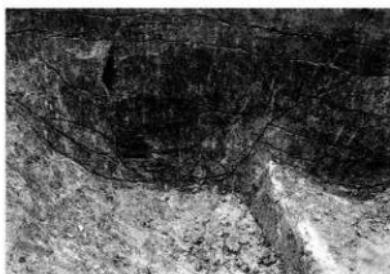
図版二〇 第三面遺構、基本土層断面



1 溝B024 土層断面(西から)



2 溝B025 土層断面(北から)



3 溝B035 土層断面(南西から)



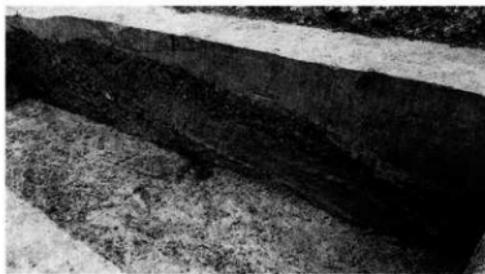
4 溝B035 土層断面(北から)



5 B区土層断面r地点(北から)



6 A区土層断面k地点(西から)

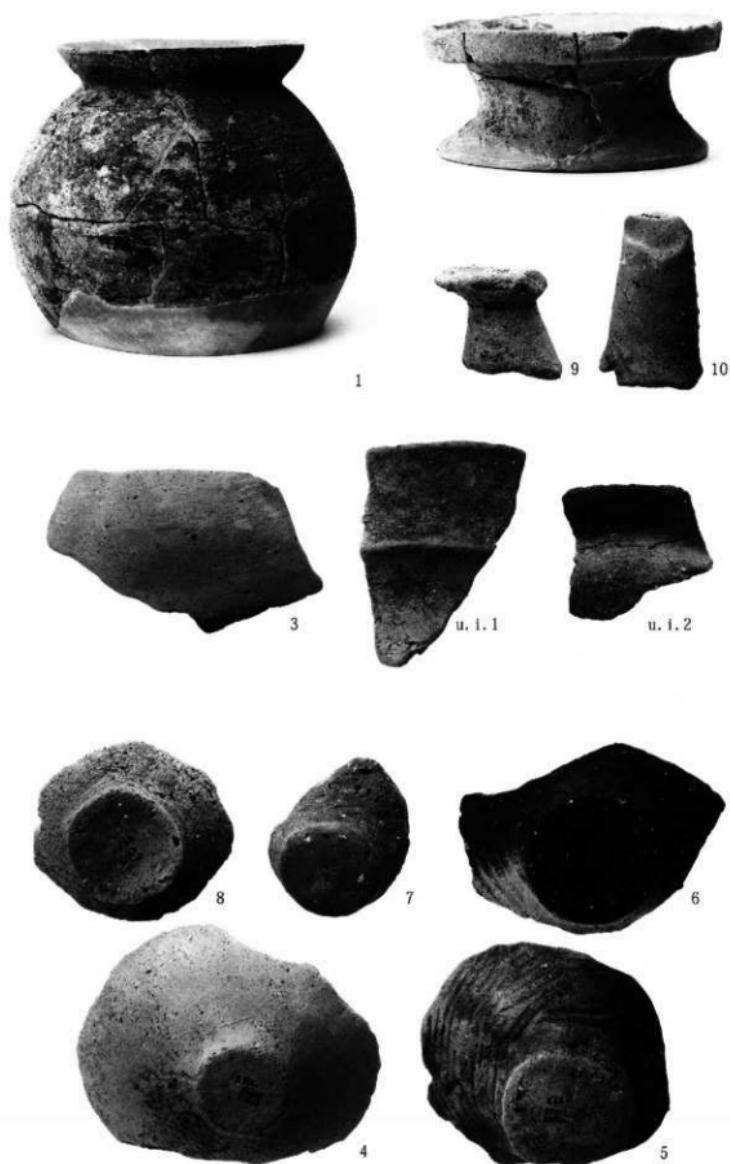


7 A1T 土層断面(東から)



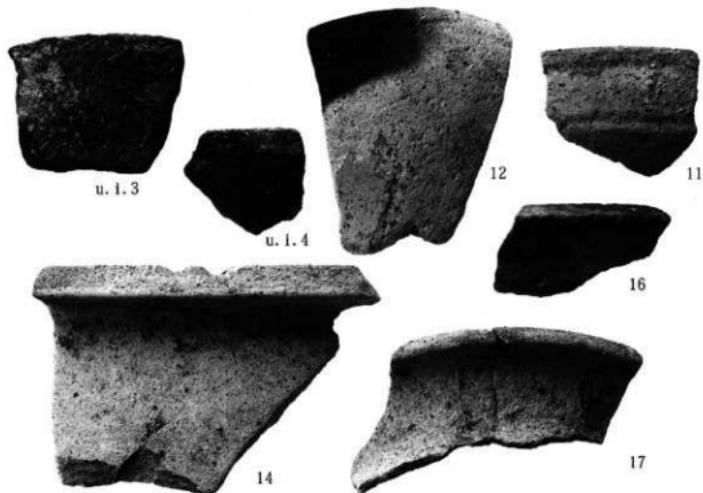
8 A1T 土器出土状況(東から)

圖版二一  
第二面遺構出土土器

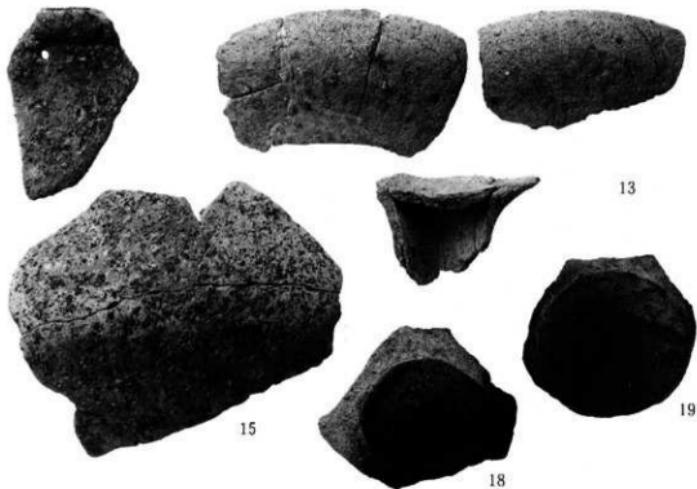


土坑 A143・自然流路 A142 出土土器

図版二二  
第三面遺構出土土器



1 穹穴住居 A048 出土土器



2 穹穴住居 A048 出土土器

図版二三 第三面遺構出土土器



22



20



21

1 穹穴住居 A015 出土土器



23



23



24



25

2 穹穴住居 B026 山土土器

圖版二四  
第三面遺構出土土器

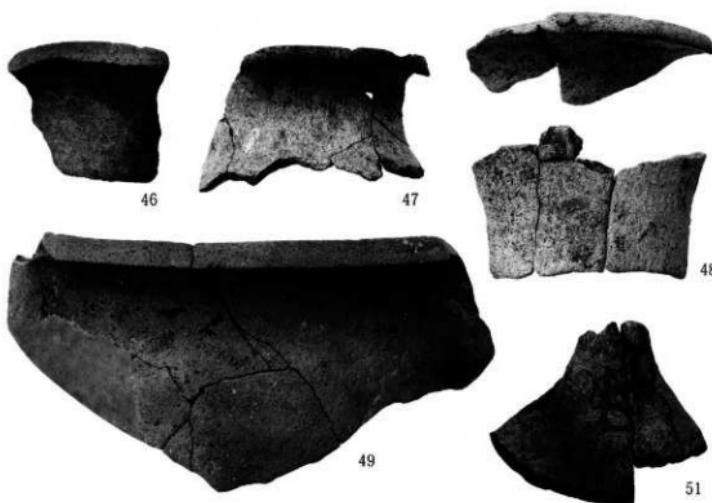


1 土坑 A012・A016 出土土器

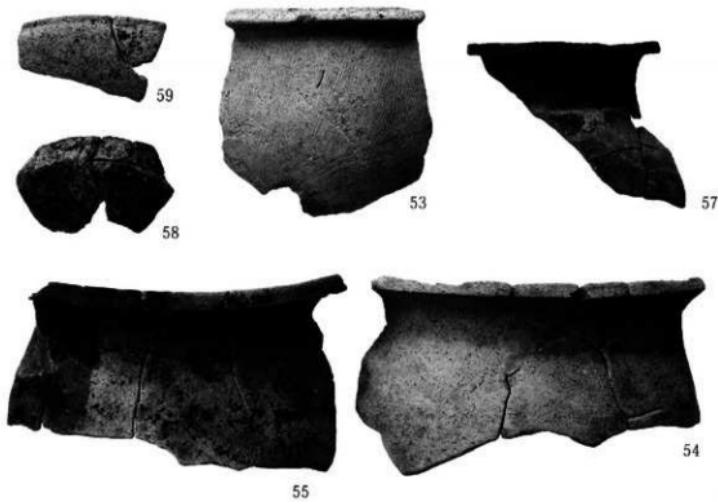


2 土坑 A012・A016 出土土器

圖版二五  
第三面遺構出土土器

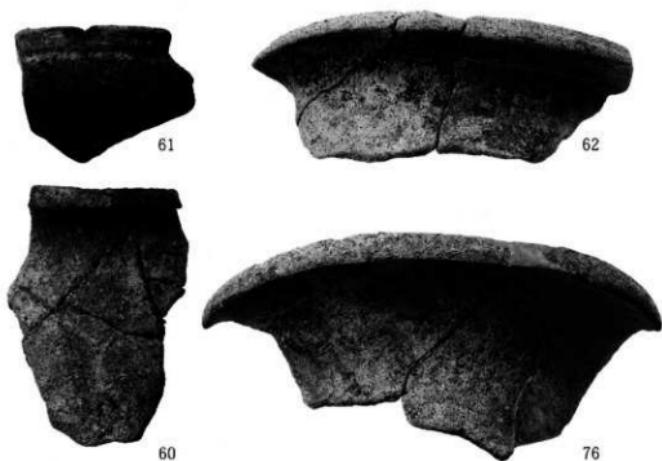


1 土坑 A024・A025・A032 出土土器

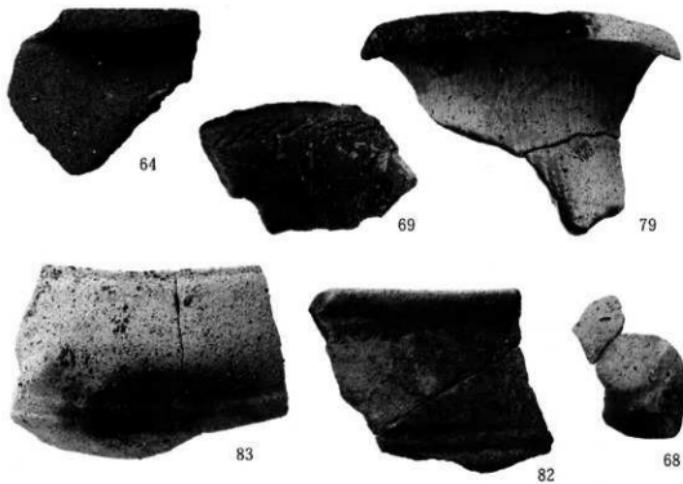


2 土坑 A085 出土土器

圖版二六 第三面遺構出土土器

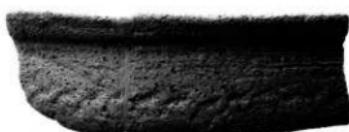


1 土坑 A030 · A031 · A049 出土土器



2 土坑 A035 · A040 · A092 · B027 出土土器

図版二七 第三面遺構出土土器



81



77



71



65



66



78

73



84



75

土坑 A035・A040・A045・A084・A092・ピット A059 出土土器

圖版二八 第三面遺構出土土器



95



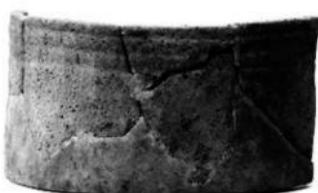
1



88



96



87



94



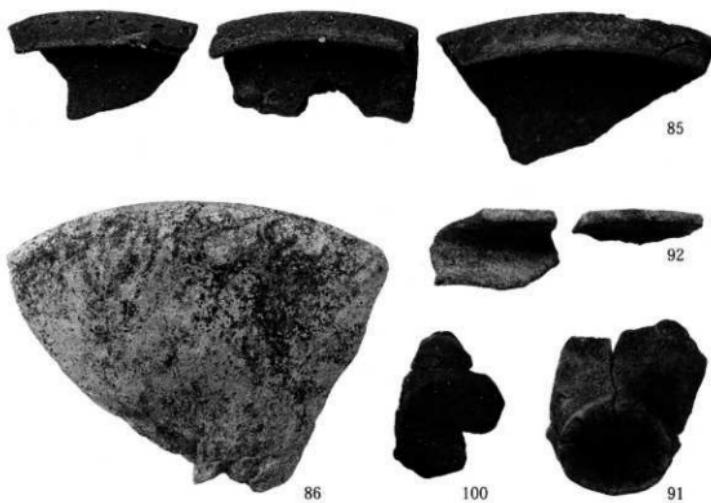
98



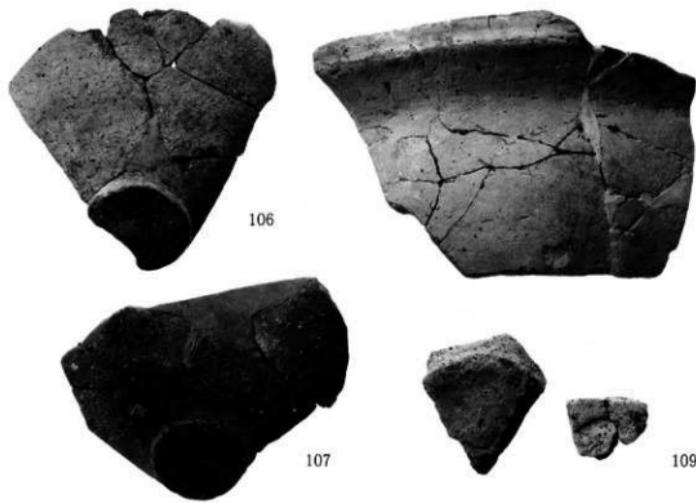
90

溝 A034・A086・A089 出土土器

図版二九 第三面遺構出土土器



1 溝 A011・A086・A089・B025 出土土器



2 溝 A033 出土土器

圖版三〇 第三面遺構出土土器



101



104



103



102



105



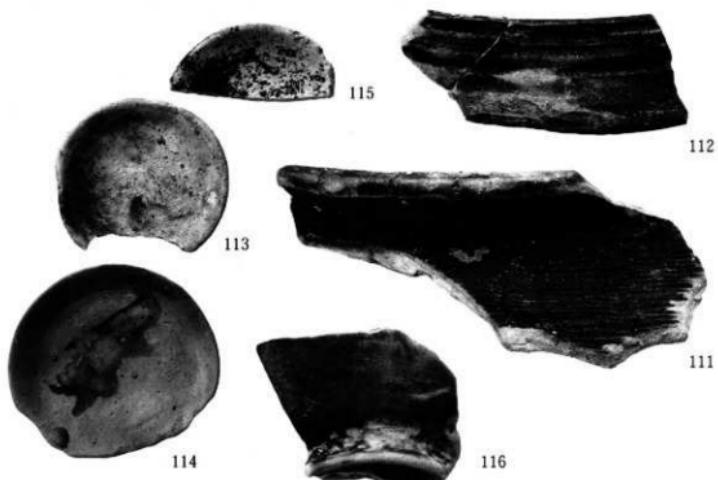
108



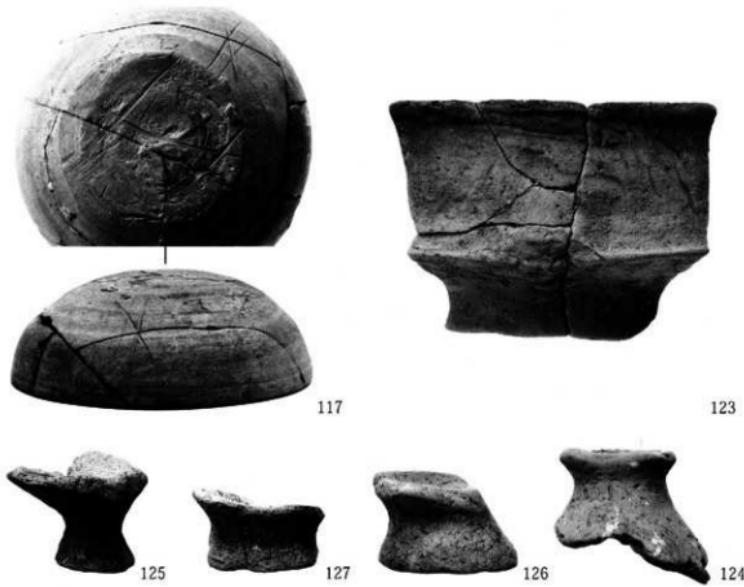
110

溝 A033 出土土器

図版三一 包含層出土土器



1 第6層から第8層出土土器



2 第10層から第12層出土土器

圖版三二一 包含層出土土器



132



128



129



136



135



133



131



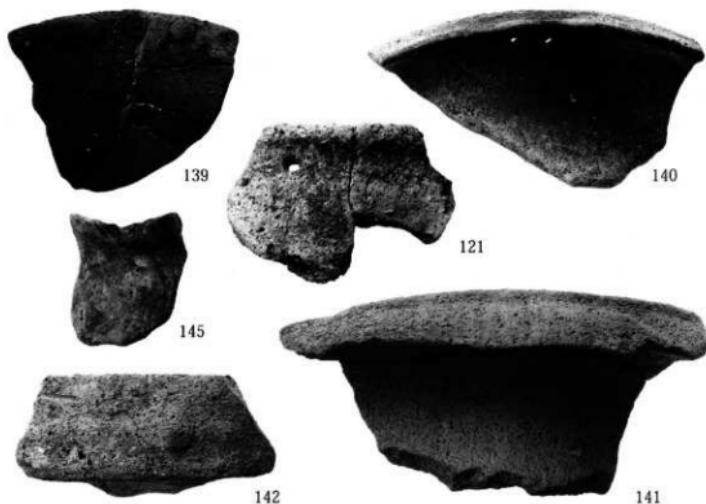
134



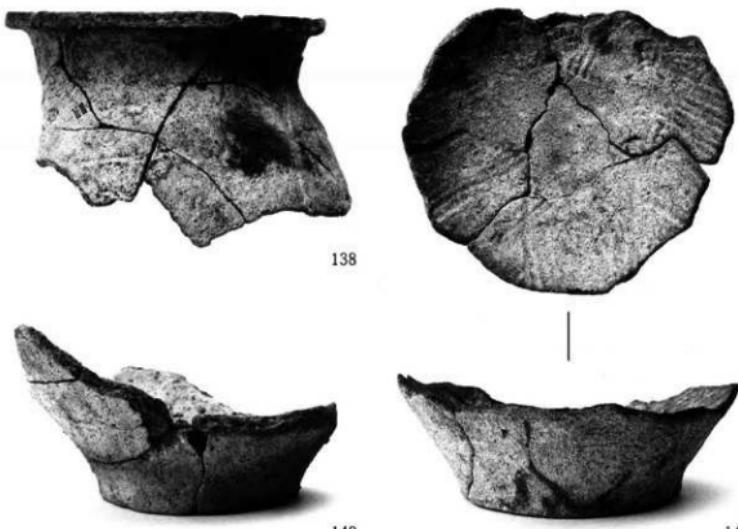
130

第14層出土土器

圖版三三一 包含層出土土器

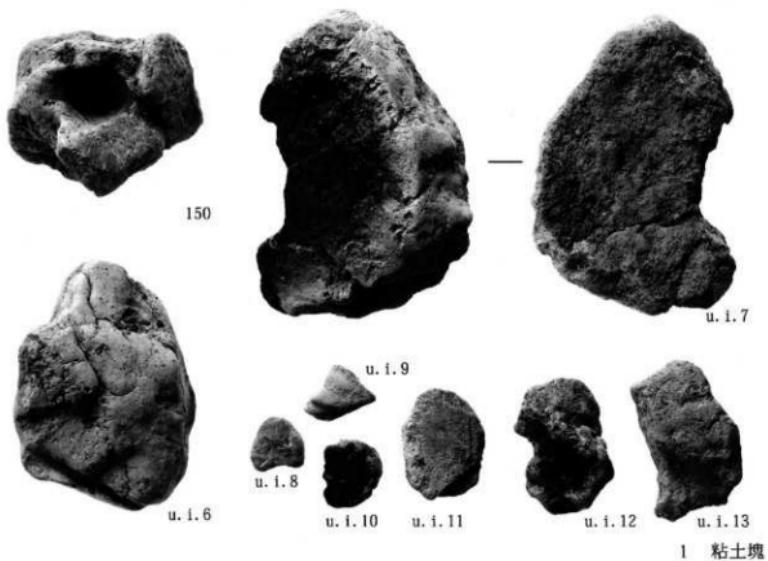


1 第11層・第15層・第16層出土土器

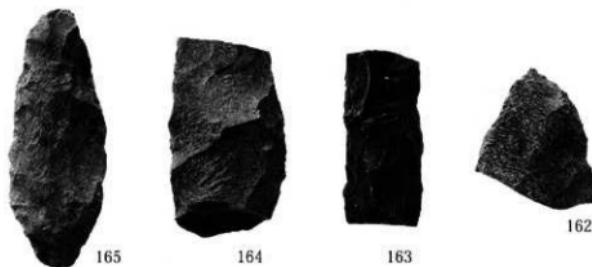


2 第15層出土土器

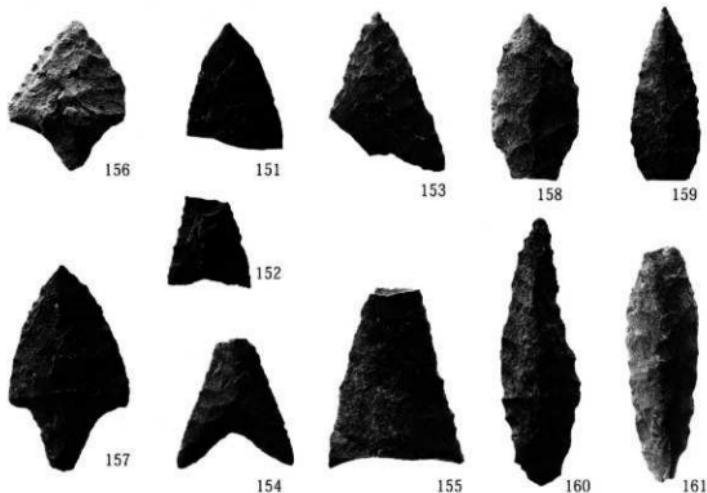
図版三四 粘土塊・石器



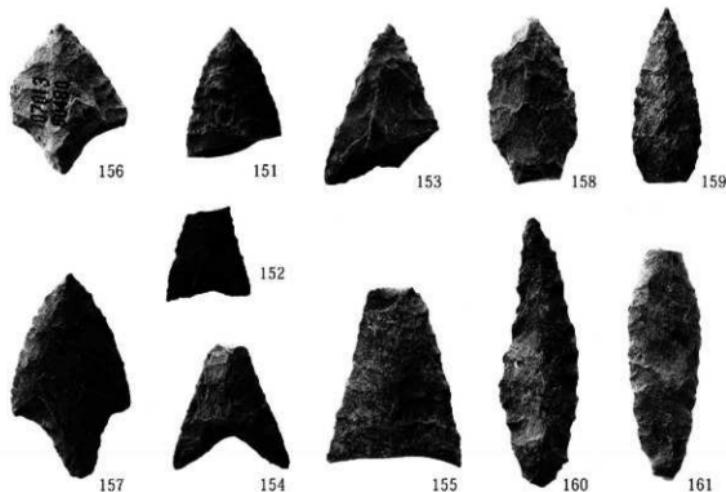
2 石剣・尖頭器



図版三五 石器

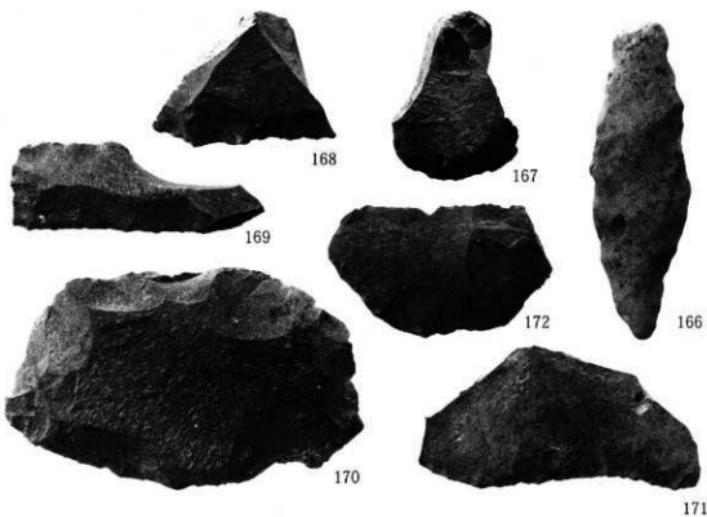


1 石鎌・石錐

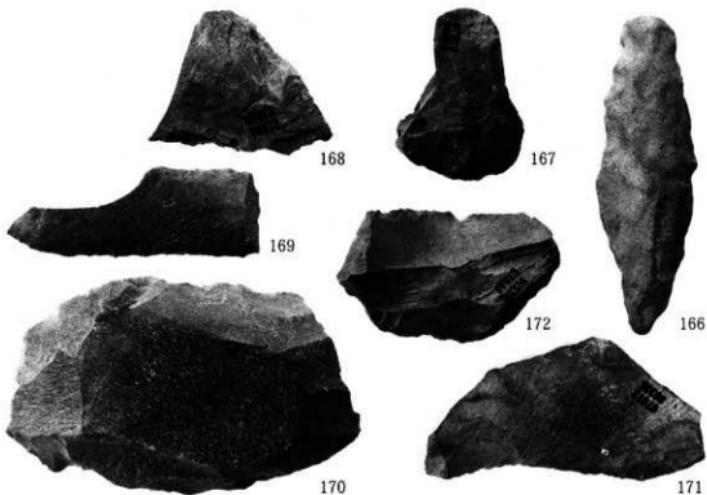


2 石鎌・石錐

図版三六 石器

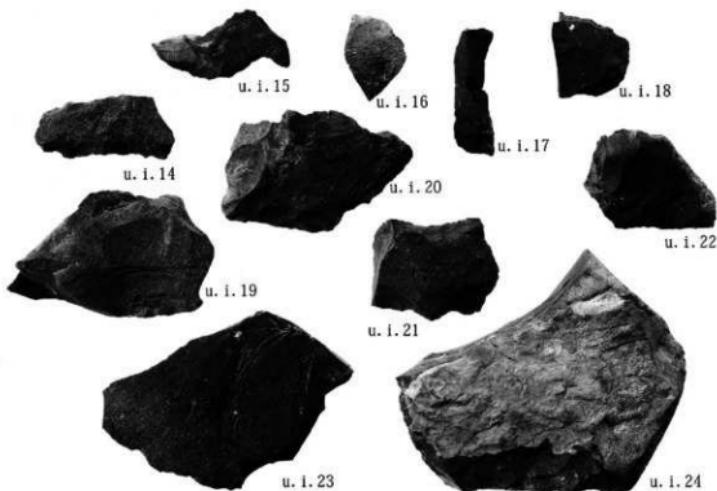


1 尖頭器・スクレイパー

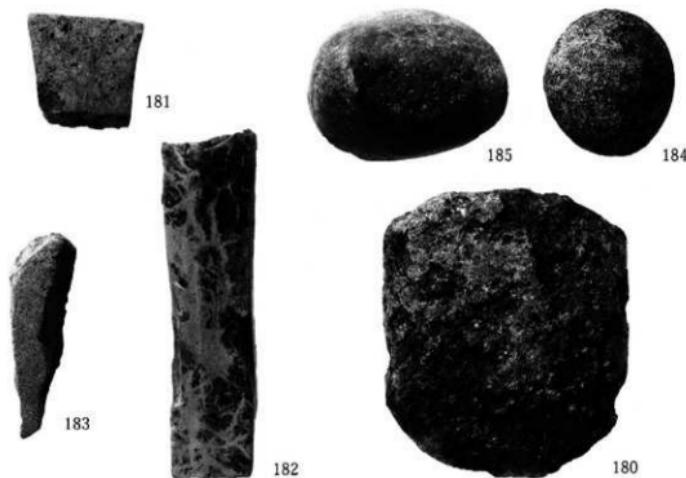


2 尖頭器・スクレイパー

圖版三七 石器

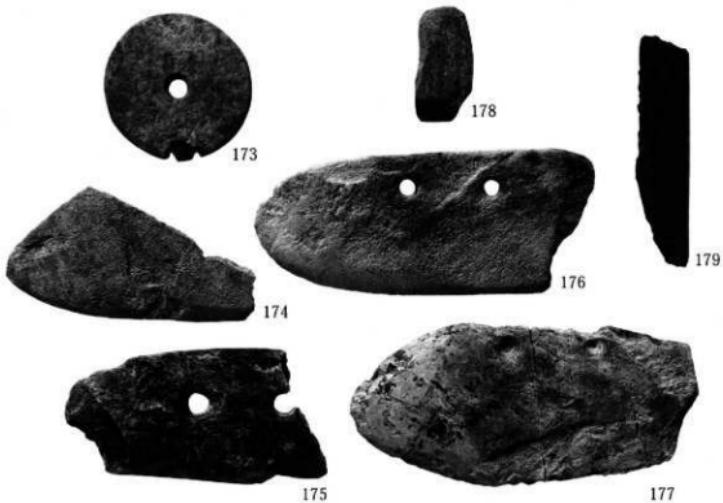


1 打製石器・剥片

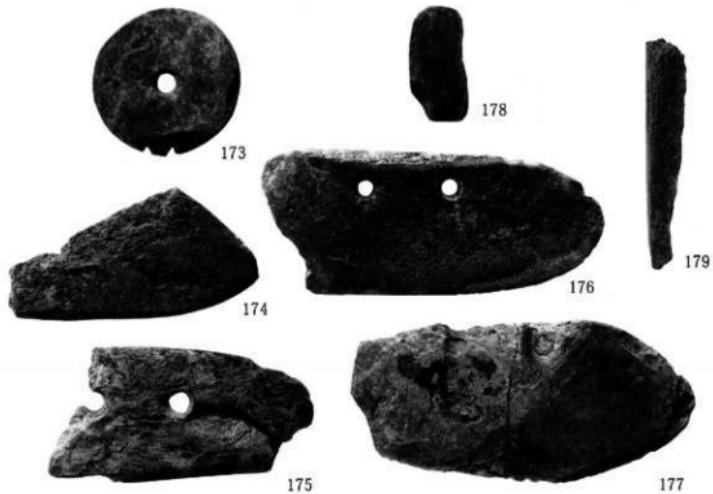


2 磁石・石斧・敲石・磨石

圖版三八 石器



1 石斧・紡錘車・石庖丁



2 石斧・紡錘車・石庖丁

## 報告書抄録

ふりがな	てらだいせき
書名	寺田遺跡Ⅱ
副書名	府営和泉寺田住宅第2期建て替えに伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2009-7
編著者名	土屋みづほ
編集機関	大阪府教育委員会文化財保護課
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351(代)
発行年月日	2010年3月31日

所収遺跡名	ふりがな 所住地	コ一ド		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
てらだいせき 寺田遺跡	いすみし 和泉市 てらだちよう 寺田町	27219	131	34° 28' 14"	135° 25' 56"	2007年7月1日～ 2008年2月5日 2008年9月1日～ 10月10日	2365 300	府営和泉 寺田住宅 第2期建 て替え
所収遺跡名		種別		主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項
寺田遺跡	集落跡	弥生時代		堅穴住居、土坑、溝		弥生土器、石器	弥生時代中期後半の堅穴住居を良好な状態で検出した。	
		古墳時代		掘立柱建物、土坑、自然流路溝		土師器		
		中世				瓦器、瓦質土器、土師質土器		

要約	寺田遺跡は、平成14年の試掘調査により新たに発見された遺跡である。遺跡の東端で実施された既往調査では、古墳時代前期から後期の集落跡が確認されている。
	遺跡の西寄りに位置する今回の調査地点では、弥生時代中期から後期にかけての集落遺構、および、庄内式併行期から古墳時代前期にかけての集落遺構を検出した。特に、弥生時代中期後半の堅穴住居を、良好な状態で検出することができた。既往調査成果とは異なる時期の集落遺構を確認したことでも、寺田遺跡における、弥生時代から古墳時代にかけての生活域の変遷が明らかとなつた。また、こうした生活域の変遷が、河川氾濫による地形変化を受けたものであることも推定できた。
遺物は、弥生土器、土師器、石器が多く出土した。	

大阪府埋蔵文化財調査報告 2009-7

## 寺田遺跡Ⅱ

—府営和泉寺田住宅第2期建て替えに伴う発掘調査—

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目

TEL 06-6941-0351 (代表)

発行日 平成22年3月31日

印刷 株式会社中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号

